768.4-W27ウ
1200500752447
768.4
W27

始

768.4
W27

古淨瑠璃の研究

——延寶・享保篇 下卷——

第三卷

若月保治著

櫻井書店刊行

985
40

古淨瑠璃の研究

延寶・享保篇　下

延寶享保篇　下卷

序

一、元來「延寶享保篇」は二千頁を超ゆるといふ尨大なものである。その持扱に不便であるのみか、今日ではその製本も不可能である。即ち已むを得ずして、大體に之を厚さによつて機械的に二分することにして、上卷下卷としたのである。

二、かくて下卷は殆んど正本研究の部分のみとなつてしまつたが、これも何ともしかたのないことである。然し正本の目次も、挿繪の目次も索引も別々にしておいた。

三、この卷も第一第二卷と同樣に、オフセット版による印刷であるから、あまりに原文を訂正することが出來ぬから、卷末の正誤表及び大增訂二三百頁に及ぶ第四卷を十分に利用されることを必要とする。

四、索引は正本概說內の項目に止めた。總括研究に關するものは目次によられたい。

五、卷末に未見正本について記述しておいたが、その中で、その後閱讀したものについては、第四卷に於て詳記したものも少くないのである。

六、前にも述べたことではあるが、本書にあげた正本中には、元祿以後になつて、新に刊行されたやうな顔をしてゐるものも頗る多數に上るのであるが、その後調べて見ると、それらの中には實際元祿後のものでなくて、寛治寛文乃至それ以前のもので、刊年を削つたり、又は新しい刊年をつけたりして、再版されたをり、又は新に刻直して出されたものも少くないやうである。かくして所謂古淨瑠璃の範圍が、必ずしも貞享頃で機械的に妄りに打切らるべきものでないことをつく〳〵感ずるである。なほ之に關しては拙著「近世初期國劇の研究」について、大和守日記に關する研究の一讀を願ふ。

昭和十九年二月十日　六十五歳の誕生日

若月保治識

第三卷　貞享享保期正本概說　目次

第一篇　貞享・享保正期本

天神御出生記……一
公平牛鬼責……五
源頼家鞠始（頼家勲功記）……一一
義經記……一九
大坂じゆんれい……二三
花洛受法記……二七
永平寺開山記……二九
伊勢御遷宮……三三
鎌田兵衛正清……三八
伏見ときわ……四二
辨慶京土產……四四
頼朝濱出……五〇
東山殿追善能……五一
阿漕平次……五四
石川五右衛門……五九
井筒（河内通）……六四
なごやさんざ六條がよひ……六九
すみた川……七五
隅田川……七七
隅田川（江戸版）……八二
聖德太子（？）……八六
百萬遍數珠功德記……九一
忠臣身替物語……九五
金平忠臣身替……九七
ゑぼし折……一〇〇
渡邊つな引……一〇七
鬼平親王車隱……一一三
金平大峯入……一一四
用明天皇……一一七
金平千人切……一二三
源氏六十帖……一二六
石山寺開帳……一三一

子四天王指物揃……一三一
公平伊勢參……一三六
法華經守護……一三九
女人卽身成佛記……一四四
柏　崎……一四六
雪　女……一四七
曾我物語……一五〇
ゆいせき靜……一五三
きりかね……一五五
切兼曾我……一五八
きりかねそが……一五九
小袖曾我……一六〇
小袖曾我……一六一
劍さんだん……一六一
十番切……一六三
十番切……一六四
曾我十番切……一六五
せんじでが……一六五
かしま御本地……一六六
新大織冠……一七一
大伽藍寶物鏡……一七六

丹生山田梅雨左衞門由來……一八二
團扇曾我……一八八
鎧之本尊女鉢木……一九〇
道外和田酒盛……一九五
守屋大臣九代記……一九七
金平戀山入……一九八
公平入道山めぐり……二〇二
天智天皇……二〇四
四天王女二度合戰……二〇六
威公平……二〇八
公平化粧問答……二一〇
獅子大王記……二一四
ゆりわか高麗賣……二一〇
動稚高麗賣……二一三
日本蓬萊山……二一六
融通大念佛……二二二
大念佛七萬日詣……二二〇
魂產靈觀音……二二八
朝比奈八幡聟……二二七
小野篁地獄讀談……二六〇
因幡藥師利生物語……二六七

妻あらそひ……二七二
湯殿山大日如來御本地……二七三
大日御傳記……二七八
貞女鑑三賢人……二八一
甲州大合戰（追記）……二八五
四天王むらさき野（八まん太郎誕生記）……二八五
三井寺狂女……二八八
平家物語……二九三
南大門秋彼岸……二九四
源氏三代四天王……三〇四
しやかの本地……三一一
法隆寺開帳……三一七
金平太平記……三二四
日本大化物……三二六
補軍記……三二八
巴太鼓……三三〇
北條五代記……三三五
下關猫魔達……三三八
金平歲且發句（金平前句付）……三四一
公平ちぞう……三四六
公時鳥居引……三四九
姫松相生由來……三五二
本朝中興花鳥傳……三五六
大龜神辨財天御本地……三六一
萬歲五色松……三六六
鎌倉北條九代記……三七四
毘沙門之本地……三七六
丹州千年狐……三八一
天王寺彼岸中日（天王寺開帳）……三八六
大和國久米仙人……三八八
島原御影供紋日……三九五
當流十二段……三九七
飛驒內匠……四〇三
新版腰越狀（參考）……四一六
小野道風（參考）……四一〇
遠磨公平……四一三
公平一心獏の札……四一八
公平奴雷公……四二二
傾城勝尾寺開帳……四二七
道中評判敵討（參考）……四四一
東鑑三代將軍……四四四
雁金文七（雁金文七秋の霜）……四四五

雁金文七一周忌の正本……四四九
雁金文七（一周忌）……四五〇
かりがね文七一周忌……四五一
雁金文七三年忌……四五六
雁金文七三年忌……四六一
龍城連理鏡……四六五
大福神社考（参考）……四七〇
垂迹物ぐさ太郎……四七四
高名大福帳（参考）……四七九
難波染八花形……四八五
傾城八花形……四九九
闘東わうじ狐妻……五〇三
荒川兄弟命問答……五〇八
正八幡の御本地……五一一
當流羽衣松……五一五
義經都落……五一九
ゆふし物語（？）……五二五
非人の仇討（？）……五二八
四天王丸山あそび……五三二
公平一代記……五三五
善峯寺開帳……五三七
愛染明王影向松……五四〇
金山左衛門岩屋城……五四六
役行者傳記……五四八
保元軍物語……五五四
息女四天王……五五五
生玉北向八幡宮……五六〇
傾城淺間獄……五六四
しんとく丸……五七〇
前太平記……五七一
傾城二河白道……五七三
傾城鄙鶴岡……五七八
西行法師墨染櫻（参考）……五八四
助六心中の淨瑠璃……五八八
助六心中せみのぬけがら……五九四
蟬のぬけがら……五九八
曾我花橘……五九九
傾城つりかね草……六〇一
新太平記……六〇五
出世太平記（語本）……六〇五
出世太平記（繪入本）……六一〇
新田四天王……六一二

田原藤太（孝行竹の雪）……六一三
甲陽軍鑑……六一六
槐久末の松山……六一六
大黒天神寓寶の御藏……六二一
後三年（？）……六二〇
楠河州傳……六二五
源氏二十日正月……六二八
太平記（追加太平記）……六二九
太平記（細川四國合戰）……六四〇
後太平記……六四一
太閤軍記……六四二
太閤記……六四三
大竹丸……六四八
熊谷先陣詞……六四九
契情富士嶽……六五四
傾城浮洲岩……六六〇
契情我立杣……六六四
行基誕生記……六六九
吾妻歌七枚起請……六七三
あたか高たち……六七七
源平兩輪后……六八
ぼんてんこく……六八〇
者婆誕生記……六八二
にしきと丸山合戰……六八七
女繪師狩野雪姫……六九一
大和歌五穀色紙……六九八
織田軍記……七〇三
伊豆日記……七〇六
神通女楠……七〇八
長者永代藏（参考）……七一〇
人丸姫れんぼの緣（日向景清）……七一四
三井寺不動明王豐年護摩……七一七
新百人一首（参考）……七三一
公平天句問答……七三五
きんぴら（公平物語）……七三八
公平勇大こく（勇公平）……七四〇
鎌倉尼將軍……七四二
鞍馬山師弟杉……七四六
愛宕山旭峯……七五一
小夜中山……七五四
管領風俗鑑……七六〇
源平太平記……七六二

吉野拾遺（菊水の前髪）……七六五
江島姫生捕妻……七六八
鎌倉袖日記……七七三
熊井太郎孝行之卷……七七八
熊井太郎（繪入本）……七八八
源　氏（牛若千人切）……七八九
八幡宮和光白旗……七九〇
昔暦三十三年忌……七九二
冬牡丹女夫獅子……七九三
赤澤山大相撲（？）……七九四
うねめ正平ていきん（？）……七九七
朝鮮太平記……八〇三
出世稚握虎……八〇六
和合の名號……八〇九
稲荷塚千代古道……八一三
公平あられ（？）……八一七
山桝太夫……八二
救世觀音利益絲取緣……八二四
曾根崎心中後日遊女誡草（參考）……八二九
現金公平（？）……八三二
富士權現筑波由來……八三五

しだの小太郎……八三八
しだの小太郎（七太夫）……八四〇
島原軍記……八四七
公平雷庄九郎（公平五人男）……八四八
西國太平記……八五一
八百屋お七付後日……八五三
日本商人の始（惠美酒本地）……八六一
長命寺開帳……八六三
山王權現八千代玉垣……八六七
八百屋お七江戸紫（喜世太夫正本）……八七二
宇治頼政歌道扇……八八一
壽命髪置……八八六
天神記……八九〇
八百屋お七江戸紫……八九一
本朝三國志……八九六
おくりの判官……九〇一
大八島（西海軍記）……九〇二
かるかや道心……九〇三
山莊太夫……九〇四
風流なれそめ曾我……九〇四
花毛氈二つはらおび……九〇七

鬼塚根來合戰……九一〇
善惡道惡鬼迷悟錄……九一一
庚申之本地……九一六
楠正成家傳軍法……九一九
呉越軍談（四百餘州一統卷）……九二二
熊野之御本地……九二二
公平百物語……九二三
鬼打豆……九二六
公平獸盛衰記……九二九
公平桐の小まくら……九三二
日本唐土大力論……九三六
公平花見論（？）……九三九
誓願寺緣起……九四三
あみだのむねわり……九四三
信州川中島合戰……九四四
朝敵橋辨慶……九四四
前內裏王城遷……九四八
あいどの若……九五三
風流新道成寺……九五三
曲輪太平記……九五五

第二篇　追加、補訂、未見本

祇園の御本地……九五九
すがわらのしん王（追記）……九六五
花山院后諍（追記）……九六七
中將姫御本地……九七一
勳稚高麗實（追記）……九七二
みち行揃……九七三
竹子集……九七四
大竹集……九七六
道行盡……九七八
紫竹集（八曲之卷）……九七九
亂曲揃（天和）……九八〇
亂曲揃（元祿）……九八二
翁　竹（九曲之卷）……九八三
紫竹集（異本）……九八四
石山もんだう（花物狂、第四卷參照）……九九三
八幡太郎二度のかけ……九九三
山中常盤……九九四
大內花見車……九九五

七小町（追記）……九九六
法華比丘あみだの本地……九九七
石山御本地……九九七
刈萱道心……九九七
かるかや道心……九九八
嵯峨釋迦御身拭……九九八
鹽谷小次郎夜討對決（第四卷參照）……一〇〇〇
念佛大道崎山上人之由來……一〇〇三
肥前國鬼塚由來……一〇〇五
公平六條通……一〇〇五
國仙野手柄日記……一〇〇六
公平大喧嘩……一〇〇七
東山三幅對……一〇〇七
那須小樓滅……一〇〇七
辛崎一つ松……一〇〇八
書物賣……一〇〇八
かげきよ……一〇一〇
大友眞鳥（追記）……一〇一〇
眞鳥兼道（追記）……一〇一〇
柿本の人丸（第四卷參照）……一〇一一
大森彦七（第四卷見よ）……一〇一一
あたかたかたち……一〇一一
蓮生諸國廻（第四卷見よ）……一〇一一
白旗大明神御本地（第四卷見よ）……一〇一一
新小竹集（第四卷參照）……一〇一一

註「柿本の人丸」以下は更に第四卷に詳記した。

追記　未見本名目、一〇〇八、一〇〇九頁を見よ

第三卷　延寶享保篇（上）挿繪目次（寫音順序）

あいどの若（寶永版）……九五三
愛染明王（表紙）……五四一
同……五四三
同　人形遣ひ方……五四四
赤澤山大相撲……七九五
あこき平次（初丁）……一五五
朝伊奈八幡宮……二六八
あたかたかたち……六七八
吾妻歌七枚起請（初卷）……六七五
東鑑三代將軍……四四四
荒川兄弟命問答（表紙）……二六九
生玉北向八幡宮……五六一、五六三
勇金平……七四一
伊豆日記……七〇七
井筒……六七、六六
命問答—（方便の敵討）……五一〇
うねめ正平庭訓……七九九
永平寺開山記……三一
江島姫生捕妻……七七一
ゑんや小次郎夜討の對決……一〇〇二
大坂順禮……二五
大八島（西海軍記）……九〇二
織田軍記……七〇五
小野篁地獄讀談……二六四
同……二六一
小野道風（義太夫本）……四三
鬼打豆……九七
鬼塚根來合戰……九二
鬼平親王車隱……二三
かしま御本地……一六八
金山左衞門岩屋城……五四七
鎌田正清（第三圖）……三九
花洛受法記……二八
雁金文七秋の霜……四六八
かりがね文七一周忌（表紙）……四五二
同……四五七

關東王子狐妻（初終）……五〇四
同　第一圖……五〇五
同　第二圖……五〇七
管領風俗鑑……五六一
祇園の御本地（初丁）……九六〇
同　……九六四
義經記（五之卷）……二一
同　（五條橋）……四七
者婆誕生記……六八三
行基菩薩誕生記……六七一
きりかね（土佐）……一五六
金時鳥居引……三三〇
公平あら丸……八一九
公平伊勢參……一三八
公平一代記……八一六
公平獏の札……四三〇
公平牛鬼責（第一）……八
同　（初終）……六
公平大嗔嘩……一〇〇六
公平大峯入（第四圖）……一一五
公平雷庄九郎（表紙）……八六一
同　吉原の場……八五一
同　……八四九
公平桐の小枕……九三三
公平化粧問答……二三三
公平獸衰盛記……九三〇
公平戀の山入……一九九
金平歳且發句（表紙）……三四三
同　……三四五
公平千人切……四一四
公平太平記……三二五
公平忠臣身替（表紙）……九六
同　……九八
公平ちぞう……三四七
公平天狗問答……七三六
公平入道山めぐり……二〇四
公平花見論……九四一
公平奴雷公……四三五
楠軍記……三二九
楠正成家傳軍法……九一〇
救世觀音利益絲取緣……八二六
熊井太郎……七八五

熊井太郎孝行の卷（初丁）……七七九
熊谷先陣諍……六五一
熊谷先陣問答……六五七
くまがえ……六六五
傾城勝尾寺開帳……四三八
同　（見返）……四四〇
現金公平……八三四
源　氏（牛若千人切）……七九〇
源氏ゑぼし折（初丁）……一〇二
同　第三圖……一〇五
源氏三代四天王（初終）……三〇五
同　巴奮戰……三〇七、三〇九
源氏六十帖（表紙）……一二六
同　見返……一二七
同　……一三〇
源平太平記……七六四
吳越軍談（表紙）……七二九
同　……九三
高名大幅帳……四八〇
子四天王指物揃（表紙）……二六九
同　……一三四
小袖曾我……一六一
五大力菩薩（表紙）……七二九
嵯峨釋迦御身拭……九九九
小夜中山……七五五
同　（終の圖）……七五八
山王權現八千代玉垣……八六八
獅子大王記（表紙）……二一六
同　……二一九
信田小太郎（終の圖）……八四三
四天王二度の合戰……一〇八
四天王鎌倉攻……二八七
四天王丸山遊……五三三
四天王むらさき野（表紙）……二六九
同　……二八六
島原軍記（初丁）……八四七
同　第一圖……八四六
島原御影供紋日……三九六
下關猫魔達……三四〇
しやかの本地（表紙）……三一
同　……三二五
出世太平記……六〇九

出世稚握虎……八〇七
聖德太子（終の圖）……八九
正八幡の本地……三二三
新太平記……六〇四
神通女楠……七〇九
垂迹物臭太郎……四七六
同　第四圖……四七八
すがわら親王（初丁）……九六四
同……九六六
すがわら親王と祇園の本地（初丁）……九六〇
助六心中（初丁）……五九一
助六心中蟬の脫殼……五九五
隅田川（初終）……七八
同　物狂……八四
同……八五
壽命髮置（初丁）……八八七
善惡道惡鬼迷悟錄……九一三
前太平記（表紙）……二六九
同……五七一
同……五七二
曾我十番切……一六四
曾根崎心中……六〇〇
曾根崎心中後日遊女誠草……八三〇
太閤記（表紙）……六四三
同……六三六
太閤軍記……六三六
大伽藍寶物鏡……一七八
大日御傳記……二八一
大福神辨才天御本地（初丁）……三六二
同……三六四
太平記　五の卷……六四六
同　六の卷……六四一
竹子集（初丁）……九七五
忠信二十日正月……六三八
田原藤太……六一四
魂產靈觀音（表紙）……一二六
同　（見返）……二五一
同　終の圖……二五五
だるま公平……四二五
丹州千年狐……三八四
朝鮮太平記（表紙と繪）……九三七
同　六の卷……九六〇

朝敵橋辨慶……九四六
追加太平記……六三九
妻あらそひ……二七三
劍さんだん……一六三
貞女鑑三賢人……二八三
天神記……八八九
天神御出生記……三
天王寺彼岸中日……三八七
道外和田酒盛……一九六
當流十二段　四段目……三九九
同　五段目……四〇一
當流羽衣松……五一七
名古屋山三六條通（終の圖）……七二
難波染八花形……四八六
南大門秋彼岸（見返）……三〇一
同　第一圖……二九六
同　終の圖……二九九
錦戸丸山合戰……六八九
新田四天王……六一一
丹生山田梅雨左衞門……一八五
日本大化物……三三七
日本商人始……八六二
日本商人始—（惠美酒本地）……八六五
日本蓬萊山（表紙）……二三八
同　見返……二三三
同……二四五
日本蓬萊山（十行本初丁）……二三四
念佛大道人崙山上人由來……一〇〇四
八幡宮和光白旗（初丁）……七九一
毘沙門本地……三七八
飛驒內匠（表紙）……四〇三
同　見返……四〇六
同　第三圖……四〇七
同　第四圖……四〇九
同　第五圖……四一一
人丸姫れんぼの緣（表紙）……七一三
同……七一六
非人の仇討……五三〇
姫松相生由來……三五四
百萬遍數珠功德記（第二圖）……九四
風流なれそめ曾我（表紙）……七二三
同……九〇六

富士權現筑波由來……八三七
伏見ときわ（終の圖）……四三
平家物語（那須與一）……二九三
北條九代記……三七五
北條五代記（表紙）……三三六
同……三三三
同……三一九
保元軍物語……五五四
法華經守護（表紙）……一四〇
同……一四二
本朝中興花鳥傳……二五九
ぼんてん國……六八一
萬歲五色松（見返）……三六八
同……三七一
三井寺不動明王豐年護摩……七一八
源頼家鞠始（口說の場）……一三
同　終の圖……一六
守屋大臣九代記……一九七
八百屋お七江戸紫……八七三
同　（見返）……八七五
同　（終丁）……八八〇
同……八九五
八百屋お七（一中正本）……八九七
八百屋お七戀緋櫻……八八二
八百屋お七付後日（見返）……八五三
同……八五九
ゆいせき諍……一五三
遊女誠草……八二〇
雪女―子日の松（初丁）……七九一
湯殿山大日如來本地……二七四
同　第一圖……二七五
同　第二圖……二七七
動稚高麗責（初丁）……二三五
同　第五圖……九七二
ゆり若高麗責……二二二
月明天皇（初丁）……二一七
同　第六圖……二一八
同　第七圖……二二二
鏡本尊女鉢木……一九三
龍城連理鏡……四六六
渡邊つな引……一一〇

第一篇　延寶・享保期正本概說

○天神御出生記

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十七行十四丁半か。終が落丁なのを、何者か悪意の悪戯をして、奥行に「出羽掾藤原信勝節口傳直之正本也」なる句のある別物の半丁を取りつけてゐる爲に、本正本の實丁數は不明なれど、大抵十五丁以上には出でまい。挿繪は兩面四、片面二。版元は不明。

【太夫・刊年】 この正本の終に、本曲が出羽掾正本であることを記した半丁がついてゐるが、それには終に身延山の辨財天の御堂建立のことが記されてゐて、本曲と關係がないのみか、別の正本によると、此半丁が本曲とは別物であることが明白である。從つて太夫は不明。

『外題年鑑』には、加賀掾語物に同名の曲があることを記してゐるが、それとこの正本との關係は明かでない。又穎原退藏氏の「日本文學書目解說」に記された古淨瑠璃目錄に、慶安元年十一月刊の同名曲が記されてゐるが、それとの關係も明かでないけれども、本正本が慶安版であるとは決して思はれない。『近古小說解題』によると、「慶安元年戊子霜月吉日」とある同名のものは、お伽草子であるかと思はれる。元來本正本は貞享元祿頃のものかと思はれるが、或はもつと溯れるものかも知れぬ。

【形式・曲節付】 五段曲、各段首尾には形式句がある。なほ三段までは段付がついてゐるが、四段、五段にはつけられてをらぬ。

第三段後半には道行があるが、その場面は船の中になつてゐる。

曲節付にはその如く、かなり多數が數へ得られる。

序、　コトバ、　地、　ヲクリ、　色詞、　上、　下、　ウレヒフシ、　イロヲクリ、　地カヽリ、　カヽリ、

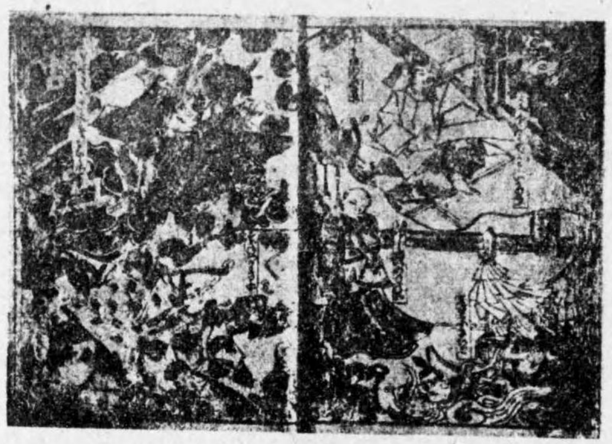
カハリツキユリ、　色地セメ、　ハルイロ、　キホヒ三重、　引取三重、　ヲクリ三重、　ハルヲトシ、フシ、

カントメ、　本ユリ、　カンハル、　ツナキ、　ハツミ、　色ハツミ、　カヽリセメ、　カンイロコトバ、

【梗概】第一　菅原是善は六十にして、姫が一人あるのみ、男子がないので、世繼の問題で心淋しく思つて居る折柄、或日梅樹の下に六七歳の美童が天から下つて、是善の子となりたいといふ。乃ち喜んで菅丞相と名づけ寵愛すると、次第に其聰明を現す。十三歳の時、帝の前に出て詩を詠じ、時平公の妬を受ける。或時、時平公は大かく坊の策によりて、菅丞相を殺さんとして、招いて馳走し、其歸途孔に落さうとするが、丞相は巧に松の樹に飛上つて難を免れる。

第二　大かく坊は最初の畫策に失敗して、再び菅公を陷れようとする。即ち面を隱して、大勢を菅公の邸へ討入らしめて世間を騷がし、一方彼が私の戰をすると奏して、追討の命を受けて彼の邸にのぞみ、入るを拒まれた時、勅命に背くものとして討取らうといふのである。さて畫策を進めて大かく坊が軍を向けると、菅原の臣にて、今樊噲と呼ばれる今村半内ががんばつてゐて、どうすることも出來ぬ。時平の軍は散々な目にあひ、時平も遂に逃出してしまふ。（全くの戰の場である。）

第三　時平は乃ち菅丞相を讒言する。二人の子供もろとも菅公を流罪にせ　と勅諚がある。折から庭の櫻の花が忽然としぼんでしまふ。兄弟の子供は母から引さかれ送られてゆく。御臺所もたまらなくなつて、あとをしとうて配所に下る。（此段の後半は船中の道行である）偶々菅公が愛してゐた梅が後をしとうて飛んで來て、船中に止まり、やがて又老松が風に從うて來る。



「天神御出生記」　（東京帝大藏）

第四　菅公は飛梅と老松とを配所に植えて、せめてもの慰とする。その中に罪なくして流罪になつた恨をはらさばやと、菅公は七日の間食を斷つて梵天帝釋に祈る。と遂に菅公の魂は星となつて空に上り、爾來顏色が日々に衰へる。御臺若君達の悲嘆の中に、「只何事も定る業」であるから、時節をまつて、都に上つて母に孝を盡せといひながら、菅公は延喜三年二月二十五日に落命する。

其後彼の魂は梵天帝釋の許を得て、恨をはらすべく雷神となり、禁裏に近づいて、嘗て無情な態度をとつたものを、だん〳〵に電死せしめる。禁裏では大騷となり、遂に僧正の言葉によつて、菅公を神に祭つて、彼の亡魂をなぐさめることゝとる。

第五　此段では危く命を逃れた時平と、菅丞相の二子かんしやうじ及び弟かんしやうたんが今村に助けられて對決して時平をへこませ、遂に社を建てゝ祭られることになつてゐるが、挿繪を見ると、「かんしやうせうの亡こん時平を殺し卽天神と成給ふ大からくり」と記されてゐる。

【解説】 要するに菅公が時平に讒せられて、配所にて死んだ後に、怨念が雷神となつて讐を報ずるといふ一代の傳説を仕組んだもので、至つて單純な筋である點から見て、近松の『天神記』などの原據となつたものではないかと思はれる。加賀掾正本『天神御本地』など、も緣がありさうに思はれるが不明である。

文章は巧妙ではないが、道行があり、第一段や三段四段等に、機巧仕掛や糸操が多量に用ひられてゐるから、相當に見物の興味を引いたことであらう。

【出處・原據】 德川初期の短篇小説に『てんじん』と題するものがあり、それから多少の影響は受けてゐるが、兩者の間にそれほど深い關係はない。未見ながら、『近古小説解題』に記されて、「慶安元年霜月」の刊記ある同名の草子の筋書によつて察すると、同書に負ふ所が多い。從つて謡曲『雷電』北野緣起等に、色々な俗説を取り交ぜて、本曲は出來たものと思はれる。

【影響】 加賀掾の段物集『大竹集』に、『虎の卷、菅公亂曲』がある、それは延寶四年刊『牛若虎之卷』に收められた、菅公が雷神となる場で、本曲の四段目に相當するもので、本曲と關係はあるが、兩曲間の時代的關係を之によつて知ることは出來ぬ。けれども近松の正德三年二月竹本座上演の『天神記』は本曲の影響を受けてをり、延享三年竹田出雲等作の『菅原傳授手習鑑』や、安永六年並木五瓶作の『天滿宮菜種御供』等は皆多少の影響を蒙つてゐるといへよう。

歌舞伎劇としては『手習鑑』が最も流行したので、本曲の歌舞伎に於ける影響は少く、小説としては此系統に立つものとして、寶延二年刊の『天神記』十卷、安永元年刊『天神幼菅原』三卷、年代未詳の『天神利生記』五卷、『天神御一代記』五卷等をあげることが出來る。

○公平牛鬼責

【體裁】 天理圖書館藏本。半紙形十五行十一丁半、兩面繪五、柱に唯「きんひら」とあり、上の內題があつて、奥に二條通丁子屋町、正本屋喜右衛門板とある。

【太夫・刊年】 共に記述はなく、加ふるに本正本の凡ての述が、自分が直接に讀んだことに基づかず、他人を勞したのであるから刊年の判定も出來ぬが、貞享二年丑正月吉日、うろこがたや板、細字繪入六段本『金平八ツ鬼責』と同內容か、それに多少の手を入れたものではなからうかと思ふ。といふのは、第三段などは頗る短いに反して、第五段などは六段本の五六段を合せたものではないかといふ氣さへするからである。

【形式・曲節付】 五段曲、各段首尾に最も舊式な形式句があり、如何にも江戸版からとつたかと思はれる。曲節付も景事もないが、句點は多い。他日發見の際の比較に便する爲に、各段首を記しておく。

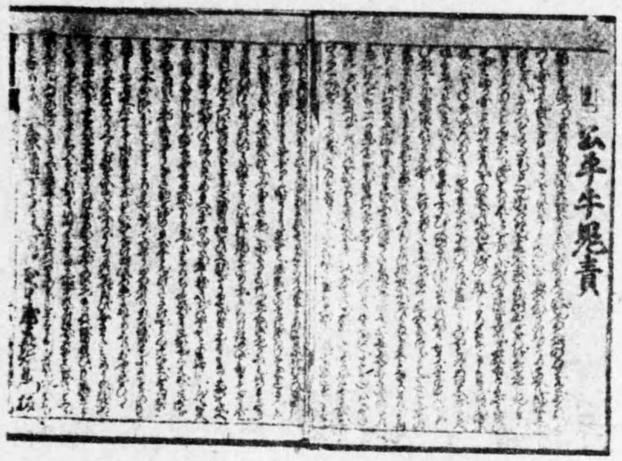
第一「扨も其後、つら〳〵それ世の中の有樣、古今のれいをかんがみるに、ぜんあく二つの道理有、あくはほこつて國さかへ、善は必ずかすか也、されば其きよくながくして惡は大くわにほこるといへ共、風の前のともし火、一度めつする事是もくぜんの道理也……」

第二「其後それ天下平なる時は、小事やぶれて大事となる、爰に一つの大なん出來せり、南ばん國……」

第三「是は扨置坂田兵庫の守公平は、我と君にふそくなし、くわらくをひらき……」

第四「是は扨置坂田の公平は八ツの鬼にになはれ、しなの山ちのそはつたい、みねに上りたにゝ下り、今は白うん山につきにける……」

第五「其後都には國々のぶし、日夜てうぼしんいなくだき、枕なわりきしん一疋打取て……」



「公平牛鬼責」初丁と終丁

【梗概】第一　後朱雀院の御宇、天下の武將頼義は、四天王始め一族出仕の折、四海の靜穩を讃へ、之れ偏に竹綱が軍法第一の爲だと稱美する。公平は自分の武勇によつて世の治れるに係らず、竹綱のみ讃美されるが嫌でたまらず、却つて、逆徒がなくて淋しいと髀肉の歎をもらす。竹綱と公平の問答が進むと、定景清氏は爭をとめるが、竹綱は、武に強い公平だから、武を以て敵には勝てようが、靜謐だから武家がすたれるとはをかしい、といふと、公平は怒つて竹綱の如きは一層隱遁したがましだといひ、「只今坂田がまこと理窟にきはまらは御へんは必ず坂田にかんげんの給ふまじ、さらば」といつて居直る。碓氷ト部が引受けようとすると、公平は益怒り、近年の亂擊に公平は竹綱に劣つたこと一度もなく、手にあまるもので公平の手にかゝらぬものは一人もない。然るに竹綱のみ褒められて、公平は全く緣の下の力持だといふと、竹綱は公平の廣言にひるまず、いしゆあらば直に攻めよ相手にならうと答へる。此時頼義が不敵者の公平との爭をやめよといふと、某を不敵者とのお言葉、此上公平がお家に居ても詮なし、長きお暇を賜れと公平はいふ。頼義は公平をたしなめ、仲直りの酒宴をすゝめるが、公平は納得せず、席を蹴つて出る。一同は公平の勢に恐れて退く。

第二　南蕃國に牛鬼あつきといふ曲者有り、常に牛馬を食ひ左右の角ありて、兩牙は上下に食ひちがひ、其丈一丈二分、力は幾千萬とも限なく、通力自在にて、日本を棲家とせん望をもつてゐた。從ふ者には、天かくあくき、ぢかく外道、天ま、八つ鬼大とう、しゆら、かまん、すいてん、くわき、ふう鬼、……大惡魔八千惡外道とて、異類異形のくせ鬼共が大あつ鬼を大將として、上野の國白うん山なかのたけに飛渡り、岩を切ぬき、一ノ門二ノ門三の木戸、鬼が城と名づけてこもり、日本を覆さうとしてゐる。

大あつ鬼は一日天かく惡鬼、ぢかく外道を近づけ、都に飛んで頼義を攫み、四天王を取り伏せて來いと命する。かくて外道等八百が異類の姿で洛中洛外を荒しまはると、御門の御痛心限りなく、即ち公卿大臣頼義等は參内し、評定の後、三條の大納言國忠卿が、天魔邪鬼退治の爲に、諸國の武士皆討伐に盡すべきことを命する。かくて「先一番は鎭守府の將軍頼義臣下渡邊武藏守……その他日本六十餘州の大小名三千餘人とちやくとう付、弓やりなぎなたてんでに持ちすきまなくこそねらひけれ、此人々の心の內あつぱれゆゝしきとも中々申斗はなかりけり。」

第三　公平は都を去つて信濃國に閑々と暮してゐたが、一日淋しさに姥捨山に出て世の樣を見る。偶々女性が二人現れて公平に近づき、寢たふりをしてゐる公平を起さうとする。二人は天魔と八ツ鬼にて、見る〳〵惡鬼の姿となつて公平をかついで去り、大將の面前にて食はうといふ。公平は鬼の城を見るがうれしさに、かつがれてゆく。途中で

公平が二鬼をからかうと二疋の鬼は驚くが、折柄男女を捕へた六匹の鬼が來て八匹一緒になつて、公平をかついで歸る。

「公平牛鬼責」　第一圖　（天理圖書館藏）

第五　國々にては日夜鬼神を警戒してゐるが其姿を見ぬ。その中に御門は御惱まし〳〵公卿大臣評定の後、賴義の進言にて、日本六十餘州に高札をたて、御惱平癒の祈をすることゝなる。

第四　公平は八ツの鬼にになはれ、白雲山につくと鬼共は公平を俎の上にのせて、大惡鬼の前におく。公平は此時始めて目を開いて大あつ鬼を睨みつけると、大あつ鬼は是は唯物でないから、顎を切放し、背骨を三枚におろせと命ずる。公平は乃ち俎から飛下り、一外道を大俎にのせ、これを三枚におろせ、痩せたといふなら、上座に居る牛鬼こそ肥つてゐるから、あれをおろせといふ。大惡鬼は「我こそ惡心の大王也」といつて公平の名をたづねる。公平が我こそ坂田の公平なりといつて、一同をばら〳〵と投げつけると、大王は驚いて、競爭を提案し、自分が負けたら汝大王たれ、汝が負けたら我が眷屬たれ、といふ。公平は喜んで鎖の首引をなし、大王を輕々と引立て、更に他の外道共を敵に應援させ、やがて首から鎖を外して一同に尻もちをつかせる。かくて公平は一同を脅しつけ、公平は外道王とあがめられる。

さて公平は大王とかしづかれ、鬼共に對して、角の一本は不用なれば、一本づゝ切つて、各自の名をかいて出せと命ずる。やがて鬼共を一々荷造して都へ上せ、渡邊の館の前で賣らせることにする。金銀をとつて賣つた後では、皆公平が取還してやる。その時の爲に一々角に名をかゝせたのだといふと、鬼共は金銀が儲かるといふので、我先にと荷造にされる。其數實に五百八十九鬼、之を百八十四駄にして都に上せ、渡邊の館の前で呼聲たてゝ賣らせると、四天王等は砂金千枚で買つて、直に禁中へ運び、鬼共を庭上にすへ、昨夜生捕つたといつてほめられ、數々の褒美を賜はる。「忝しとててうだいし、わが家をさして歸りしはおとましくぞ見へにける」。

「是はさて置、外道共、五百八十九きのおに、千枚にうちうつて」上野に歸り、公平に言上すると、公平は外道共に鬼の代を配分させ、更に一同の外道をつれて都に上り、高札を見て、それを引ぬき、直に内裏へ赴く。公平今は鬚ものびて昔の姿なく、「外道魔王自在の寶冠をかぶれば、ひとへに鐘馗大臣」かと見える。公平は乃ち常に魔道をつかひ、「厄神を悉くいましめ、打平らげ」たから、帝王の御惱について、「一加持仕べし」といひ、名を問はれると「本は坂田兵庫の守金平、今は外道の大將、まとりの、日本せうき也」と答へ、賴義竹綱が公平ときいて馴れ〳〵しく言葉をかけると、「元は凡夫の交はり、今は鐘馗號を取ぬれば、けがらはしき方々とは、中々言葉も交さぬ也」、早く大臣號を給はつて、「忽ち御惱平癒なさしめん」と語り、さて太刀をぬいて「だいりに坂田現れたり、かばねを現し立去れ」と怒鳴ると、奥から鬼神が飛出す。公平が劍を以て刺通すと、忽ち御惱は平癒する。公平は人にあらずと尊敬される。

やがて公平は竹綱に向つて、御身は計を帷幕の中に廻して敵を千里の外に走らすといつたが、今日まで何故に外道

惡鬼を都に近づけたかと嘲笑すると、四天王だつて鬼を捕へたといつて、例の五百八十九疋の鬼を見せる。公平は乃ち此鬼共は自分が捕つたので、其證據だとて、例の一々印をつけ名を書いた角を取出して見せ、頼義が竹綱のみを讃美したことが誤で、皆手の指の如く一統に働くのだと誇る。此時闘白が四天王をして鬼共を斬らしめると、大外道の大惡鬼即ち牛鬼は雲間より飛下り、鐵杖をふつて戰ふが、公平は牛鬼を取伏せて縛り付ける。かくて公平は信濃上野を賜ひ、「牛鬼を頂戴して本國さしてしよち入す、さればにや此時より、上野白雲山、中のだけに今の世迄鬼のすみか、一の門、二の門、まつせのしるし有とかや、かの公平が有樣、三國一の兵と、きせん上下おしなべ皆感ぜぬものこそなかりけり」。

【解說】 頼義が竹綱だけをほめたので、公平は怒つて飛出し、上野白雲山の鬼が城にかつぎこまれたを幸、大惡鬼の牛鬼と力比をして、勝負に勝つて外道の王とあがめられ、都に上つて鬼神退治をして頼義竹綱等に鼻をあけさせ、昔の恥を雪ぎ、一同五指の如く働くものだと見せつけたといふのである。まるでお伽話のやうな、馬鹿々々しい物語であるが、斯かるものが上演されて、大衆を喜ばせたとすれば、却つてそれが大衆の興味であつたことを注意したいと思ふ。

鬼と力比べをして勝つたことは寛文時代の正本にも先例があり、南蕃や九州あたりから惡魔外道が日本をねらうといつた話は幾度も繰返されたことで、文化の東漸、日本文化の發展の經路からも自然の考へ方であつたといはねばならぬ。

第三段に、八鬼天まの二疋に、六疋が加はつて、八疋の鬼が公平をかついで歸つたとあるから、八鬼といふのは一疋の名かと思はれながら、第四段の始には「八つの鬼」とあり、その點が頗る不明である。

○源頼家鞠始——頼家勳功記　　加賀掾正本

【體裁】 尾崎久彌氏藏本。半紙形十七行十四丁半、挿繪は兩面四、片面一。初行に上の題があり、題簽は、後書のものである。又奥には版元が「二條通寺町西入北側、山本九兵衛板行」とある。柱には「まりはしめ」と見ゆ。『淨瑠璃稀本集』には八行五十五丁本をとつて收めてある。

【太夫・作者・刊年】 初行内題下に加賀掾正本とあり、作者は近松ではないかといふ疑がもてることは解說の條にも記した。刊年は元祿以前かとも思はれるが、中に機巧の應用が少しもない所から見ると、今少し後かとも思はれる。尙『外題年鑑』にも、同名の曲が加賀掾の曲目中にあげられてゐる。

【形式・曲節付】 五段曲にて、本正本には各段首尾に形式句があるが、八行本には『稀本集』所收の文から見ても、各段首には形式句が見られない。

初段に、鞠の曲、第四段に名香盡し、及び道行がある。

初段「扨も其後しんあいをもつて是にしたがふはしじやうのくみする所、あにこれしやうりにかなはざらんや、こゝにかまくら二代のめいしやう……」

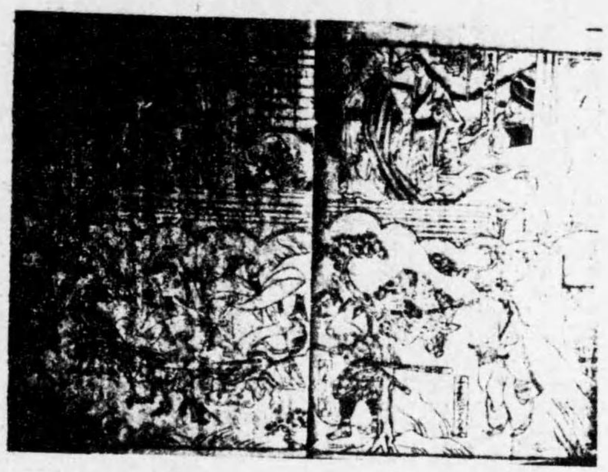
曲節付は主なるものに次の如きがある。

ヲロシ、　フシ、　ハル、　詞、　三重、　地中ウ、　地色中、　キンハルフシ、　コハリ、　スエテ、

長地、冷泉、ハヅミ、ヲクリ、謠、太夫地中、キンオクリ、上、中、下

全體として、曲節付は可なり濃厚な方である。

【頼家勳功記】八行本にて、帝國圖書館藏本には『頼家勳功記』と題するものがある。本曲と同文である。それには唯各段首尾に形式句がないだけである。



「源頼家鞠始」　萬壽姫口說の場

【梗概】第一　鎌倉二代の名將左衛門督源頼家卿、征夷大將軍として頼朝のあとをつぎ、新に問注所を設けて百姓の訴もきゝ、正しき政を行ひ、「八雲の道も淺からず、蹴鞠は又紀内行景とて名を得し鞠の達者をば都より召」して指南を受けてゐる。弟千幡公は十二歳になる、これが後の右大臣實朝である。一子一幡は三歳になるが、之は比企判官能員が娘若狹局の子である。天下の執權は北條時政と、比企能員の二人。正治二年元日の儀式があつて、四日には大内の鞠始があるので、それにならつて、鎌倉でもその會が行はれる。

當日になつて在鎌倉の諸大名出仕し、千葉の介常胤の嫡子、太郎胤政とて文武に達した美男も三十餘人に前後を打たせて登城する。其時行違の若侍二人が胤政の馬の口を引とめて頼度事があるといふ。而も深く人を忍ぶ身だといつて、笠を取らうとせぬ。強ひて笠を引とらせて見ると、「四十餘りの女房と二八の春過ぎて、はたちに及ぶ上臈の山の端出でし月の顏雲のびんづらぞつとして覺えず馬よりころび下り興さめ顏にて立」つと、乳人と見えるは胤政に向つて、「いつぞや大山詣での時御姿を見そめられ戀焦れさせ給ひ、文の數々參りしは定めて御覺えましまさん、しかるに一度つれなくも御返事だに候はねば、今は憂き身をなきものにと歎かせたまふたてさに、やう〳〵賺し參らせかやうにしつらひ申したり」といひ、男が呆れてゐると、姫は盛に口說くが、男は「人の知らぬ緣組は侍の本意ならず、まして正しき妻ありて二歳になる子までもち、今また御身に從はゞ二妻狂ひと名のたゝん、いかに御志の切なればとて武士の法は破られじ」といつて去る。

鞠曲（八行本には「鞠の亂曲」と別行になつてゐるが、繪入本には唯、欄外にかくあり。）「鎌倉の御所のお庭にあらだまの年の始まり蹴ぞめと、軒はことさらうなだれて、君待つ色に千世ぞ知る。」……千葉胤政、北條義時、小笠原、富部五郎等が思ひ〳〵の裝束にて伺候する模樣。「軒の移りや軒向ひ鞠に心も浮立ちて……拍子ゆたかにどん〴〵〳〵と蹴上げてうつほずり、破に移り、急になり、烏帽子流しや烏帽子付け……各々ぱつと感に堪へ終るを惜めるばかりなり。」

去程に朝比奈三郎義秀は鞠を好かぬので、ゆる〳〵と出かけてゆくと、折柄蹴鞠が塀を越して、馬の鼻に落ちかゝる。馬が驚いて朝比奈は馬から落ち、直垂は泥にまぶれ烏帽子の緒も切れる。朝比奈が怒つて鞠をふみつぶす所へ小坊主が出て、君の鞠だといふ。朝比奈はなほ小坊主を捕へて二三間投げる。叫ぶ聲に人々が出て來て、呆れてゐる中に、父の義盛は彼の體を見て怒りつけると、朝比奈は武家の玩ひに蹴鞠始は何事ぞ、蹴鞠や詠歌は公卿の事、何故に

弓始か、馬の乘始どもがないかと不平をいふ、義盛はいよ〳〵怒つて、遂に勘當する。朝比奈も父の命ずる事とて、已むなく刀を渡して泣きながら行衛知れずになる。

第二「扨其後潁川に耳を洗ひし賢人の名のみ殘るを今の世に恥ぢぬ私欲の人心、扨も比企能員は嫡子富士太郎を密に招き」、君若し他界あつても一幡公は幼少、北條一家は千幡公を世に立てるにちがいない、されば千幡公を密に本國につれゆき討ちすてよ、さうなればやがて汝も天下の伯父として敬はれるといふと、直にそれを承知する。

千葉太郎胤政の北の方藻鹽の前は、才貌兼備の女にて、一子玉若あり、夫婦相愛の間なるが、或時北の方は胤政に向つて、戀焦るる人に、一夜を契りて命を助けてやりたいからとて許を乞ひ、胤政に焦れてゐる女の文を出して「戀すてふ我身のやる方なきまゝに……」と讀みきかせ、面目ながる胤政に向つて、一夜の情を與へよといふ。そしてそこへ忽然と女を案内して來て、心置かずゆる〳〵と語れ、「いや是大事の殿御なれども今宵は貸し參らす、情の枝は折らるゝとも、根引には成りませぬと戯れながら入り給ふ」。やがて上藤がじやれつく所へ、北の方は銚子土器をもつて出て、酒をついで「聲張上げてうたかたの、あはれ情を白波の沖の石とは何をかいふ、戀をする身のそこはん扨袖を見よ、れろ〳〵れれんぼれつろちゝんでつんと通らぬは神ぞ氣の毒夢の世にたゞ、と歌ひ戯れ」女に素性をきくと、「頼朝卿に召仕へし唐糸が娘萬壽と申す女」と答へる。北の方は萬壽と姉妹の契約を結ぶ。「藻鹽の前の御貞節類もあらぬ賢女やと聞く人感ずる斗也」。

頃來朝比奈三郎は浮き世がいやになつて、伊豆の山にこもり、髻を切つて義秀法師と號してゐる。

比企富士太郎は千幡公を奥にのせ來り、山蔭にて事情を語つて殺害しようとする。丁度其時一睡をしてゐて、人聲

に驚いた義秀は、飛起きて富士太郎を蹴飛して、千幡公を救ひ、四人の郎黨を海に投込んで、若君を先に立て富士太郎を引立て庵に歸る。

第三　「去程に比企の判官能員は」翌日になつて嫡子富士太郎が歸らぬので、郎黨早瀬をしてさがさせるが一向にわからず、山深くたづねて千幡公の烏帽子狩衣佩刀が松の枝にかけてあるのを見つけて、事成就したと思ひ、富士太郎は見つからぬが一應歸館する。

朝比奈はまた、此儘にては追手が危いからと、思案の果に、「駿河木枯の森に頼朝卿の思ひ人萬壽」があるのを思ひ出し、男勝りの彼女に遇つて千幡公を託する。

鎌倉では千幡がゐないといふので、上を下への大騒、殊に頼家病重き折柄ではあり、或は後繼ともせん所存の際とて、全國に賞をかけてさがさうとする時、比企判官は御乳人子大和前司友行が見えぬは、彼がかくしたに違ないといつて、友行を招寄せ、自己の陰謀を友行に着せかけて、彼の邸宅を捜索せしめる。そして早瀬をして例の狩衣佩刀を持出さしめる。友行は罪なき罪を着せられ、悲憤の涙をのみて、由井の濱で拷問せられる事となる。

拷問の場へ友行の妻がかけつけ、何故の拷問か、罪なくば何故に御前にて腹かき切らぬかと口說く。友行は無實の罪をなげきながら、間もなく讒者がばれて、怨が晴れようといつて妻を慰める。判官は怒つて、耳をそぎ腕を切らせ慘殺させようとする。友行は死にのぞんで、「やあ畜生我命を助かりたきと云ふを未練也と思ふか、たとひ如何體にて成共命だに長らへば、無實を晴開きまづ此如くおのれめを行はん爲にこそ……今に一念の惡鬼と成、子々孫々まで捫みひしき此仇を報ぜんと、つつ立ち上ると見えけるが舌くひ切て死してけり。」それを見ると親子の人々も共に殺し

てくれといふ。

第四　「かくて其後いたはしや千幡公、萬壽の前が情にて、木枯の森蔭に隠れ忍びて」ゐる一日、久し振りに胤政がたづねて來る。萬壽は鳴子を引いて千幡を忍ばせる。やがて胤政を寒凌ぎに風呂に入らせ、おぐし清めに香をたくとて、乳人がとり〳〵の名香の名をきくにつけて「まづ名香は天が下、初音手枕新枕時雨松風、短夜の有明道芝東路の……」と名香づくしをする。そこへ胤政が風呂から出て來て、互に戀物語をする。そしてそのなまめいた所へ、朝比奈がやつて來る。萬壽も胤政も狼狽する。そして遂に一切の祕密がばれると「朝比奈つく〳〵と笑ひ、いやはや浮世は異なものかな、御身はぬれ故思ひもよらぬ若君へ遇ひ奉り、我は親の勘當故思ひもよらぬ若君の御命を救ひ奉り、萬壽を頼み申せし故思ひもよらぬ御身に遇ふ、扨若君は讒者故思ひもよらざる御難儀に遇はせ給ふ御事よ」と、互に語り合つて、比企を平げて若君を世に出すべく出發する。

「源頼家鞠始」終の圖

道行「木枯の森の下庵露深く夜深く出し月の顏誰をかいざや白菅の笠深々と萬壽の前若君御馬に乘せ參らせ義秀胤政御供し……暮れてもよしや星月夜鎌倉山に着給ふ。此人々の心の

内忠有り義有り誠有り、天道いかで守らざらめと世の人感ずるばかりなり」。

第五　「去間鎌倉には、國々の諸大名晝夜殿中に相詰め、千幡君の御行衛さま〳〵評定さします所へ、若君の御在所注進の者とて、沙門の姿成者參上仕候が頭子にて顏を隠し、いかさま不審がましき體に候と訴ふる」。やがて沙門姿の朝比奈は御前へ召され、背負ふた具足櫃をあけると、中から縛られた富士太郎が出る。かくて朝比奈はこれまでの事情を明かにし、頼家は直に千幡公へ代をゆづり、千幡は實朝と呼ぶことゝなる。

朝比奈と胤政とは、乃ち比企判官父子討伐を命ぜられ、戰の後、先づ富士太郎を殺し、判官を捕へて「二疋の馬に能員が片足づゝ括りつけ、兩方へ追立れば馬は左右へ驅け出る、無慚やな能員は二つにさつと引裂かれ」る。……「源氏の御代の御繁昌千萬めでたかり共中々申斗はなかりけり」。

【解說】　頼家の鞠始の會の時に、朝比奈が少しく狼籍して、父義盛から勘當されたといふことが外題と關係あるのみで、あとは頼家が病んで亡からん後は、北條氏が勢力を得、自分の一家が勢を失はんことを恐れ、比企能員が千幡公を失はうとした陰謀に、千葉胤政に對する萬壽の前の戀をからませたものである。即ち、比企が嫡子富士太郎をして、千幡を失はしめんとする時に、勘當されて伊豆の山に隠れてゐた朝比奈は、千幡を助けて、萬壽の前に預ける。その間に千幡の乳人子大和前司友行を犯人として、比企は慘殺する。胤政に惚れた萬壽は、氣の通つた胤政の北の方の計らひによつて相遇ふ事となり、偶々胤政が萬壽を訪れた時、朝比奈と會して一切が明かとなり、比企を滅して千幡を世に出すことが出來るといふのである。

成るほど第一段は朝比奈三郎が勘當されるまでの筋に過ぎず、第二段では千葉胤政に對する萬壽の前の戀が中心で

あり、而も千葉の北の方が恐ろしく碎けた態度で、萬壽の文を利用して、夫を萬壽に引合せるなどの粹な場が見られるが、第二段の後半からは比企の陰謀で、殊に第三段は、彼が友行を慘殺し、責殺す悲痛な場であり、むしろ本曲の山である。第四段は胤政が萬壽を訪れてゐる濡場にて、そこへ朝比奈が訪れた際の滑稽は、狂言『花子』を借りての一種のねらひであらうが、第五段の前半に於ける、朝比奈が千幡公發見訴への場は趣向が足らぬ。後半の戰は餘計物である。

此作が近松ではないかと疑はれてゐるほどあつて、萬壽の前が千葉胤政に對して進んで先づ戀を打あける點といひ、千葉の北の方の粹な態度といひ、加賀掾の語物にふさはしいといふよりも、近松の作らしい匂ひは決して見られぬではなく、全體の表現に近松の味が可なり濃厚ではある。思ふに場面の構成に於て、今少しく考慮が拂はれたとしたら、立派な戲曲になつたゞらうことを思ふと、あまり後期の作でもないらしく、或は元祿中頃迄のものかと思はれる。それにしても鞠の亂曲とか、千葉の北の方の取持場とか、第四段の名香ぞろへとか、道行とか、曲節上にも相當に苦心が拂はれてゐる。

【出處・原據】『吾妻鏡』を見ると、正治二年の正月には、鞠始のことはなくて、正月七日に御弓始があつたことが記され、建仁元年九月廿日の條には、「御所御鞠也、凡此間拋ㇾ政務ㇾ連日被ㇾ專ㇾ此藝」とあり、又建仁二年四月には、十三日にも、廿七日にも、「有ㇾ御鞠」とあり、更に六月廿五日の條には「尼御臺所入ㇾ御左金吾御所ㇾ、是御鞠會雖ㇾ爲ㇾ連日事、依ㇾ未ㇾ覽ㇾ行景已下上足也。此會適可ㇾ爲ㇾ千歲一遇之間、上下入興。」とあつ、紀內の名も度々その參列者の間に見えてゐる。鞠始は之等によつたものか。又賴家不例の件と、比企叛逆の事は建仁三年八月二十七日の條に「將軍家御不例、緯危急之間、有ㇾ御讓補沙汰ㇾ、以ㇾ關西三十八箇國地頭並總守護職ㇾ、被ㇾ充ㇾ御長子一幡君ㇾ（六歲）爰家督御外祖比企判官能員、潛憤怨讓ㇾ補干舍弟事ㇾ、募ㇾ外戚之權威ㇾ、挿ㇾ獨步志ㇾ之間、企ㇾ叛逆ㇾ、擬ㇾ奉ㇾ謀ㇾ千幡君並彼外家已下……」と記され、ついで之が誅伐その他の事は、九月二日三日四日五日の條に長々と記されて居る。

また第四段にて、胤政が萬壽の前を訪れた處を、朝比奈に見つけられる滑稽の場は、既述の如く、狂言『花子』を應用したもので、最後の比企判官馬裂の場は、萬治頃の『よしうぢ』の牛裂を應用したものである。

寛文九年刊『賴朝三代記』は同樣の材料を扱つたものながら、全く異つたものとなつてゐる。本曲はそれに刺戟されたものと思はれる。

○義經記

【體裁】東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十七行、初卷及六之卷十五丁半、二之卷十五丁、三及七之卷各十六丁、四及五之卷各十四丁にて七之卷まであり、挿繪は兩面六あるが多く、四卷と七卷には五ある、各卷の奧に「大傳馬三町目うろこがたや新板」と記す。京都帝大寄託古梓堂文庫藏本も同版である。

【太夫・刊年】これには元祿二己巳年正月吉日と奧に記されてゐる。此曲は土佐少掾の語本と傳へられ、又此正本にも後人の筆にて、さう記されてゐるが、最初からそれの刷込まれてゐるものを見ず。今日見るものは大抵元祿二年の此版で、萬治三年の上方版もあるといふが未だ見ぬ。

【形式・曲節付】 各卷六段づゝに分たれ、各段首尾には形式句がある。曲節付のあるものもあるときくが、此正本には曲節付はない。

『義經記』からとつたものにて、試に初卷の文を少しづゝあげて見ると、

初卷首「さても其後人民たかぶるときんばがいし、うては之をせいすとは五うんりつはせうふくの道也。ま事に天うんしゆんくわんしてゆくとしてかへらずと云事なしかるかゆへにゑきにいわくかうれうくひ有、みてる時はひさしかるべからず。しんだいそんほうなしつてたゞしきなうしたはるはひとりせい人か。爰に仁王七十八代二條のいんの御ぢせの御時くわんむ天皇のべうゑいださい大武清もりとてゑいたいかうけの名將有、さてちやくしには左衛門の介しけもり……」

二段目「其後いたはしやよし平はかげすみに近付て此由かくとかたり給ひ泪をながしおはします六郎此由承げに御どうりしごくせり……」

三段目「去程になんばの次郎つれとをはあく源太のくびを取六原さしてぞかへりける六原になりしかば此由かくと申上る清盛は聞召……」

四段目「去程にきよもりの御まへにはなんばの次郎をめされて……」

五段目「其後されば人の心をまとはす事しきよくにしくはなし日比は清もりもときはをさがし田なば火にも水にもなしなんと心をつよく思われけるが、ときはを一め見るよりもいかれる心もよは〳〵と命をたすくるのみならず七條しゆしやかにすへ置てわきてさいも、ひせられけり …」

更に轉じて七之卷を見ると

「義經記」 五之卷 （東京帝大藏）

七之卷首「さても其後それ君はぎ有しんはおこなひ父は子をいつくしみ子はおやにかうをつくしあには弟をあいしおとゝはあにをうやまふいわゆる六じゆん是也しかるにじゆんをすてぎやくにならふはわざはひをまねく故也爰にかまくらのさきの右兵衛の介よりともはからうしうその外八か國の御家人共をめしあつめ頼朝仰ける樣はいかにかたかた聞給へ誠によしつれがむほんにおいてうたがふ所なき間いそぎうつてをつかふべし去ながら一大事に思ふゆへ……よしつれを大將にてやすひら兄弟一身の上は五十ねん三十年せめたゝかふといふ共人のみそんずる斗にてせめおとすことかたかるべし……」

七之卷六段め「去程にしきとやす平兄弟はたかだちを打ほろぼし頼てぎけいの御くびをかまくらどのへぞおくりける……」

七之卷終「… 願くは梶原父子がかうべをはねよしつれにたむけられは今生後生のうらみ有べからずばんたんひつしにつくしがたし文治五年閏四月廿八日ひやうへのすけ殿源の義經判とそよまれける……衣川のほとりにしんぞうにやしろをたてしん八まんとあがめおなしくうちじにのさむらい武藏坊弁慶鈴木亀井をさきとして以上九人の人々をもまつしやのしんといわひつゝ四月廿八日には…かくて梶原父子共もよしつれの御たむけについに御ついはつとぞきこへけるなを〳〵源氏の御ゑいゆう、せんしうばんざいまんざいらくめでたしともなか〳〵申ばかりはなかりけれ」

○大坂じゆんれい

【體裁】 斑山文庫藏本。半紙形十七行、十三丁半。兩面繪三、片面繪二あり。奥に八文字屋八左衛門板とある。極めて稀本。

【太夫・刊年】 太夫名は未詳、奥に元祿二巳二月吉日の刊記がある。「巳」の字のあたりは、わざ〳〵削られたのではなからうかと疑はれる節もないではない。ひよつとしたら原本は、もつと古くはなからうか。

曲節付の點から見ると、加賀掾か義太夫の語り物に近いやうにも思はれるが、勿論明言は出來ぬ。尙此點に關しては『蒲曹司東童歌』の解説の頃參照。

【形式・曲節付】 五段にて、各段首尾に形式句あり、加賀掾か義太夫の曲節かと思はれるものが可なり澤山についてゐる。その中主なるものは

序、詞、地、ヲロシ　地色、ハル、ウ、フシ、三重、大三重、謠詞、上、中、下、カヽル、クル、スヘテ、ヲクリ、地ハル、小舞

【梗概】 第一　播州加古川の城主義房が鎌倉參勤からちりふまで歸ると、一人の侍が先代大殿以來の願だから使つて呉れ、其の名は惡七兵衛景清の孫惡七郎景勝だといふ。即ち願を聞入れて、祖父景清が八島合戰の功名を物語れといふと、「いで其頃は壽永三年三月下旬……」と例の謠曲『景清』其の儘の詞をかりて、景清活躍の物語をする。やがてその夜義房が「それ侍といふものは、文道より武道より衆道しらねば……」といつて景勝にぬれかゝる。そこへ若侍が左の肩に女を引かけ、血刀生首をさげて來て、親の仇を討つたが、追手が來るからかくまつてくれといふ。そこで二人を櫃に入れて、荷物として直に國境まで送る。後へ追手が來て、鬼塚兵庫の臣刀根川春次となのり、我が親春平の寢首をかき、主人が召使ふ女をさらつて逃げた者が此家に逃込んだから出せといふ。景勝が左樣のものはないといふと、侍は飛込んで調べるが果して居ない。景勝はさあ約束だ、居らねば汝の首をおいてゆけとてせめたてる、景清の孫らしいその態度と頓才とに一同感心する。

第二　鬼塚兵庫貞澄は義房の態度を聞くや、大に立腹し、夜討にして腹いせをしようと、直ぐにちりふに攻寄せる。之をきくと義房方では、道中の戰では、地理は不案内だと、先づ一旦退却を目論むが、景勝は之に反對し、一戰をすゝめて、お守の觀世音を義房に與へる。其處へ兵庫が攻めよせて、科人を渡さねば皆殺しにするといふ。かくて兩軍戰を交へ、寄せ手が遂にまけるまで例によつて戰に終始するのである。

第三　ゆきゑのかみ義房は景勝の目覺しい働によつて、無事入國することになる。殊に景勝には暇を賜つて、くつろけとある。折柄二十歳になる義房の姉君は高砂の櫻狩をして、茶屋女に化けて男狩りをしようとする。それに引かつたのは景勝である。茶をすゝめられるまゝに景勝もふざけてかゝり、「命盜人め、どうもならぬはと手を取」る。そこへお局達が出て來て「三國一のむこ君と左手めてよりとりまはし」男が景勝なるに驚くと、景勝は恐縮するが「ゑゝわけもない何事ぞいの、今からは自からが殿御ぞや、かまひて二世のちぎりぞと打もたれつゝ」姫がいふ。景勝は即ち「殿樣よりわきて御ふびん蒙れば御前の首尾もいかゞ也許させ給はれ」と辭さうとする。姫は「ゆきゑのかみは主にて自は主ならずや女と思ひ侮りてせつなき心をむけになす思ふ男にきらはれて女をたてゝせんもなし」と

死んで煩悩の犬となり思ひ知らせるといふ。景勝が己むなく承諾すると姫から今宵忍ぶ約束をする。

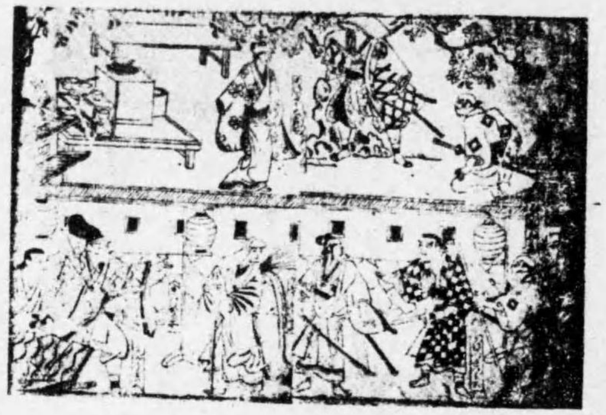
義房の城中では、一同景勝の勢を見てそねみ、己等の無力になつたことを嘆き、景勝が殿と男色の關係を結びながら、今宵は姫君が景勝の處へ忍ぶと聞いて、その邪魔をしようとする。姫君は小姓姿をして忍ぶ。折柄義房は闇を幸に女姿で景勝の處へ忍ぶ。姫君は他の女が忍ぶかと思ひ妬心に燃えて義房に斬つてかゝる、義房は小姓姿を見て又妬む。かくて「はらから爭ふじやけんの劍」危いことになる。火の番の拍子木が來て呼立る。火かげに見ると姉と弟、姫君と若君である。己をきらつて姉と親しむ　よくも企んだと怒つて、義房は景勝を勘當する。姫君は企めることではなく、初めての忍びに過ぎぬと謝するが、景勝は兎も角も追放と定める。姫は死を以て景勝を止らせようとするが、遂に景勝は姫を誘つて都へのがれる。こゝに道行がある。

第四　家臣久國等は集つて評定する。御家の樣が鎌倉へ知れては大變だ、即ち若君病死と云ふ事にすれば、自分が後を引受ける事にならうと思ひ、久國は一同と謀つて、若君義房を牢に入れ、鎌倉から自害をしろと沙汰があつたことにして、義房に切腹をすゝめて遂にその首を切る。處がさて若君の首を切つたと思つてゐると、それは觀音の首で、若君は依然として牢の中に生きてゐる。惡臣どもは呆れ且つ恐れる。若君が牢から出て見ると、背て景勝が授けた觀音の首が切れて血が出てゐる。それをつなぎ合せると元の觀音である。義房は玆に菩提心を起してもとゞりを切れば、惡臣共も皆之に從ふ。

やがて景勝は追手を追ちらし姫君を背負うて行くと、以前にちりふで助けられたすさき五郎すけのり夫婦が子供を連れてゐるのに出遇ふ。五郎は追手を拂つて二人を我家につれゆく。

第五　景勝まさごの前が守口の片ほとりの五郎の家に忍んでゐる中に、攝州生玉の庄の中の觀音の開帳がある。俗に景清觀音と呼び、加古川の城主そね氏某が遁世して、今此寺にこもる由を五郎が聞いて歸ると、景勝等はこれに參詣して樣子をさぐる事になる。參詣して見ると果して義房が月山と號して郎黨と共に行ひすましてをり、景勝を見るや、「誠に不思議の緣にひかれ佛道に赴くこと煩惱即ちぼだいなり、こゝを以て之を思へばまさしくおことは佛ちよくなり只何事も許し給へや」といふ。景勝は姉弟の中を直さうとして佛に祈誓し續けたことを語り、今一度の還俗をすゝめこ。けれども月山は之を固辭して姉夫婦に家を繼ぐことをすゝめ、曾根氏正統の血脈に傳はるものといつて一卷を讓る。

そこへ例の鬼塚兵庫は例へ出家しても敵は許せぬとて押かけて來る。忽ち本堂震動し觀音の御厨子から白羽の矢が射るが如くに飛んで出る。兵庫驚いてひれふし「かくまで佛の惠深き義房に敵對せば如何なる罰を蒙らん、御許下さるべしと手を合せ」る。月山は乃ち惡心を戒める觀音の大慈悲をさとり、景勝に家をつがせるから鎌倉方によろしく取なされよ、すゝき夫婦が罪は我に免じて許されよと乞ひ、快諾されると、喜んで「それ諸佛諸ぼさつの悲願まち〳〵にいづれをろこはなけれども、中にも大悲觀世音のおちかひ世にもすぐれて覺えたり……」と觀音の功力をのべ、此地にも



「大坂順禮」（斑山文庫藏）

三十三體の靈佛があるから、「三十三度巡參せば西國一度の功德」であるから、一同巡禮しようと、すぐに出發して三十三番の札所を廻りて佛果を祈る。

【解說】 第一、二段は戰爭に至るまでの過程と戰爭であるが、第一段から既に男色の場があり、第三段には柔か味といひ、情味といひ、これまで餘りに多く見られない戀愛分子が豐富に取入られて、時代の空氣が濃厚に見られ、殊に近松の女に近い女、男性に先んじて異性を誘惑する女が描かれ、姉弟の嫉妬刄傷といふ、珍らしい場面に眼を見張らしめられるのである。第四段第五段は怪奇なる靈驗によつて、觀音の功德が述べられ、宗教宣傳の趣が濃厚に見られる。

唯聊か注目すべきは第一段は「扨も其後」で始まり、其他の各段も可なり形式的の文句で始まつてゐながら、稍形式の影が薄くなつて、第一段が「そぞつて昔をしたひけり」、第二段が「かゝる事をや申べき」、第四段は「心は清く清かりき」、第五段は「萬代に二世の安樂とぞおがみけり」となつて、第三段にのみ唯「感ぜぬたぐひはなかりけり」とのみあることである。かくてこの作があまりに古いものではないことを思はされる一方に、外題なり、最後に主人公等が西國一巡に等しいといふ大阪三十三所の觀音を順禮するといふことから見ても、寛文十年刊播磨の正本、『西國三十三番順禮記』と何か緣がありはせぬかと思はれるのである。萬一にも同物とすればこれは再版であり、改作とすれば原作の姿が忍ばれるやうにも思はれるのである。

尙此作が其構想に於て『蒲曹司東童歌』と關係深いものであることは、同曲の「解說」の項等に詳述した。或はその點から正本太夫も考へられるかと思ふ。

○花洛受法記　　加賀掾正本

【體裁】 繪入十七行十三丁半。內題が上の如くあつて、その下に正本太夫名があり、奥に山本九兵衛板と見ゆ。兩面繪四。又八行本は四十七丁にて、奥に山本九兵衛刊とある。『近松全集』第三卷にも收む。

【太夫・刊年】 繪入本の內題下には加賀掾正本とある。又八行本の奥には、元祿第二己巳曆季春吉祥日、加賀掾と見える。

【形式】 五段曲、繪入本の各段首尾には形式句があるが、八行本の各段首にはない。

第一「扨も其後、みんしゆじやうとおあくせ、くばうゑんしきやうのめいもんにたがはず、まつほうじよくせの今本ぞくの四ぼさつかはる〳〵出げん有……」

【梗概】 第一　後宇多院の御時、駿河の浮島太夫兼益は、其女かざしの前を、同國芝山の城主秋岡藏人宗綱に嫁せしめることにした。一日兼盛は鷹狩に出て、愛鷹が鷲に傷つけられたを怒り、宇津の山にて鷲を見つけると之を射殺さうとする。折柄法華宗を弘め、衆生濟度の目的で上洛の途にあつた日像上人は、之を見ると、殺生の罪と慈悲を說いて、鷲の命を助け、兼益を敎化する。

爾來兼益は益々法華宗を信じ、他宗の者との緣組をやめるべく、執權爲成を以て、宗綱に婚約變改を申込む。宗綱は改宗も婚約改變も諾せず、兼益を攻める。

第二　兼益は宗綱に攻められ、夫婦共遂に自害し、執權爲成は姫をつれて逃げる。

姫が爲成と共に山中を辿る折、一匹の大熊に追はれて、命がけで谷をとぶと、其手が藤に引かゝつてぶら下る。此時、鷲が來て姫を引かけて空に上ると、爲成は失望して自殺する。

第三　日像上人は其後上洛し、五條河原にて法華宗を弘めてゐると、他宗の徒によつて六波羅に訴へられ、探題北條時輔によつて鳥部山の獄に投ぜられる。

加賀掾正本

「花洛受法記」

姫は鷲に助けられて都に入る。（姫の道行）折柄北條時輔は高野河原にて、姫を見つけて家につれ歸る。

第四　姫は一身の事情を語り、時輔に法花受法をすゝめ、やがて日像をつれて來させて調べさせる。時輔は始めて大に恥ぢて日像に謝する。乃ち日像は許されて洛中洛外に法を弘め、雨乞の祈禱に其力をあらはし、民に題目踊をさせたりする。

やがて時輔が死ぬと日像は悔に行つて、燒香するとて、杖刀をぬいて死人の首を斬り、袈裟に包んで首を持去らうとすると、郎等は怒つて日像を殺さうとするが、此時時輔の首は「眼をくはつと見ひらき」郎等を叱つて即身成佛する。

第五　時輔の一七日忌に、宗綱は姫を捕へて斬らうとするが、日像は此時姫に代へて自分を斬れといふ。折しも兼益の妻は大蛇と現れて、宗綱をつかんで空に上る。宗綱は提婆品のお蔭で成佛する。

【解説】　京都妙顯寺の開祖であり、大覺僧正の師である日像の法力を說き、法華禮讃の物語といつた方がよいもので、宗綱を始として凡てが遂に法華の功力によつて敎化されてゆく所に、本曲の狙があるのである。

殊に曲尾に至つて、作者の藝術觀と宗敎觀とを見るべく、藝術を宗敎乃至敎化に用ひて、成功した姿を見ることも出來るともいへるのである。作者が近松であることは明かではないにしても、如何にもさうらしい處があり、非常に巧に機巧を應用した例として記憶すべきであらう。

○永平寺開山記

結城孫三郎正本

【體裁】　東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行十六丁半。柱に「永平寺」とあり、內題には「越前永平寺開山忌」とあるが、題簽には、唯『永平寺開山記、全』とある。版元は奥に「通あぶら町、新板」とのみあつて、元の店の名がけづられてゐる。挿繪は兩面六。

【太夫・刊年】　卷末に「右此本者太夫結城孫三郎、ソキ　寄太夫　同　三郎兵衛兩三人直傳之正本を以テ一點あやまりなく寫之候て令板行もの也、元祿貳年巳五月吉祥日」とある。

【形式・曲節付】　六段曲、各段首尾に形式句があり、曲節付はない。三段目に道行がある。

初段「さても其後つら〳〵おもんみるに、道あきらかなる者は家を立、その身をまつたうする事、よこしまなれば家はほろびぬ身をうしなふ事男女にかぎらず、愛に……」

【梗概】 初段　越前永平寺の開山道元禪師の由來を尋ねると、後鳥羽院の時、源中納言道忠卿といふがあり、十五歳の神道丸、十三歳のかな若丸、二歳の松よの姫の三子がある。道忠は五十歳の時、神道丸に家をゆづり、「君に忠孝私なく五常を守り慈悲深く家を治め身を立てよ」といつて、執權更科ゆきへ光虎、御臺の乳人木下將監行正に後を託す。

處が御臺は先腹の神道丸の世繼を喜ばず、將監を招きて神道丸殺害をはかり、事を金若丸に告げるが、金若は却つて母の惡心をとめる。けれども母が七生迄の勘當ぞといひ、自害を計ると、仕方なく母の意に從つたふりをする。

かくて金若丸は兄神道丸の室に至り、兄の衣を貰ひ受けて着し、兄の代りになつて座し、兄を父の所へやつて待つてゐると、將監は金若丸を神道丸と思ひ込んで、御臺の命によつて首を討つて去る。

二段目　神道丸は室に歸つて、金若の殺されてゐるを見て驚き悲しみ、金若の仇を討つといへば、御臺は將監に向つて、神道丸を今夜の中に討てと迫る。將監は、此上の惡事を重ねるに忍びず、浮世をあきらめて、十四歳になる梅王を近づけ、自分が自害するから、首を斬つて神道丸へ屆けて、父に代つて忠孝せよといふ。梅王は如何にしても父の首は斬らぬといふが、强ひられる儘に父の意に從ひ、父の首を神道丸に贈ると、神道丸は事情を察して嘆き、自害せんとして、梅王にとめられ、二人で叡山の叔父の寺へ落ちる。

三段目　次男を失ふて悲しむ中に、又しても長男にゆかれた道忠は、嘆の中に、これを御臺の仕業と思ひながらも「それとても恨むまじ、われ惡業のなせるわざ、たゞうらめしき浮世かな」といひ、まつ世の姫に系圖をゆづり、悲の果に死んで行く。

道忠が死ぬと、御臺の惡心がつのり、人々は皆退き、藏の寶は消え、あとは滅茶〳〵になる。御臺は姫を抱いて迷ひ出る。

第二圖　「越前國永平寺開山記」

叡山なる神道丸と梅王の處へ、侍田代源内はかけつけて、其後の一切を物語り、舌を食切つて死ぬ。二人は遂に落髪して道元道正と名乘り、やがて入唐を忘して二人で出る。

道行　「……衆生さいどの旅なれど、又かへらんもふでう也、行すへ何と白川や……とうせんの出舟あらば乘らんとて、しばしやすらひ給ひける……」。

四段目　やがて二人は加賀國白山の權現と名乘る老人の舟に乘せられて唐につき、達磨に導かれて天どう山に至り、色々と問答し、種々の修行を積む。十三年の苦行の後、二人は筑前の川しり村に歸つたが、其間には惡鬼龍女になやまされるなどの事が度々あつた（そこには機巧仕掛も糸操も度々用ひられてゐる。）

五段目　道元道正は安てい元年に入洛し、參内して樣々奏聞し、「扨も道元は達磨二度の出世、日本の寶也、此いど曹洞一宗の開山たるべしと紫の御衣を下さるゝ」。かくて宇治に光照寺を建てる。

やがて道元は、歸國の途に龍女から貰つた「しんせんげとくのやくほう」を以て、人々を幸せんとしてゐる時、大原の里の貧女が病母に孝行しつゝあるに會し、その藥にて病を治してやるが、守袋によつて、其母子は松よの姫と母であることがわかり、久し振に奇しき對面をする。此時道元は母に向つて落髪を勸めるに係らず、母は昔の惡心をすてず、かく落ぶれたも皆道元故であるとなし、道元に飛かゝらうとするが、不思議にもむら雲が下りて母の姿を消す。乃ち道元がほつすをふると母は再び地に落ちて懺悔し、遂に姫と共に髪をおろして、鎌倉松が岡に寺を建てゝ行ひすますに至る。

六段目　道元は更に佛法を弘むべく諸國を行脚し、鎌倉にては時頼を導いて最明寺と戒名し、其後越前に至つて、永平寺を建立する。

【解説】　他の多くの名僧の如く、繼母に憎まれて殺されんとして、異母弟が身替になつた爲に助かつて出家し、入唐して修行をつんで、名僧となつたといふのであつて、後半は要するに道元禪師の經歷である。而もその經歷も出家以前は兎も角、出家後のはあまりに興味に乏しく、入唐時代の達磨との問答の如きはむしろ硬きに過ぎる方である。此種の名僧傳としては劣作の方である。

【出處・原據】　『元享釋書』卷六には

「釋道元、姓源氏、京兆人、……後乘商船入宋地、見天童如淨禪師淨付以曹洞宗旨、歸來闢法于城南深草平副帥時頼招以名藍、不就、乃如越州構精舍而居、名曰永平禪寺。……

道元が出家するまでの構想には澤山の先例がある。『目連尊者』は其一例で、殆ど此種の人々の出家を同一の型に

まとめることも出來さうである。

○伊勢御遷宮

加賀掾正本

【體裁】　半紙形細字十七行十六丁。題簽に「伊勢御遷宮」と大書され、其下段に「二條通寺、町西へ入、山本九兵、衛板行」と四行に書かれ、內題に外題同樣の字あり、その下に「加賀掾正本」と記し、卷末にも「二條通寺町西へ入北側、山本九兵衛板行」とある。柱に「御せんくう」と見える。挿繪は兩面四、片面一。

【挿繪】　第一圖（三枚目裏と四枚目表）は、二部に分れ、大圖の方には「今上くわうてい、もりひら親王、中なごんかね道、大なごんかね家卿、くわんばくこう」、其他「けいしやうゐんかく、諸大名衆」などあり、その下、殿の下には「まんぢうさんだいの所」とあつて、側に「わたなべ源五つな」があり、斑點ある馬が引出されてゐる。左下方には小さく、別の小圖があり、それには「秋子のひめ」が「めのと」と共に、「かね家卿」に對面してゐる。

第二圖（七枚目の裏にあり、片面）には、「ふくやまにせおに」「秋子の姫つれ行處」とあつて、他に鬼二人あり、鬼三人が姫を抱いてゐる。左方には「めのとにぐる所」とある。下段には、「まんぢう鬼を生とる」「わたなべにせ鬼取てふせる」「ふくやまさいど」「秋子の姫たすかり給ふ」「にせおにのめん」などあつて、似せ鬼が面をぬがされ、押へられてゐる繪があり、面が二三投げ出されてゐる。

第三圖（八枚目の裏と九枚目表）は、左右通して上下段に分れ、上段は、滿仲が秋子のひめを左方へつれのく所、右には滿仲の北の方を二人のめのとがさゝへる所。下段には、右に、北の方の似せ病の所、滿仲が驚く所、左に、秋

子の姫が落ちんとして廊下を出る所、下の庭にはめのとの若い男がゐる。

第四圖（十一枚目裏と十二枚目表）は、四部より成り、右上圖には、秋子姫がねてをり、その左の處で、宿の亭主が陰謀を企むを、女房がとめてゐる所。上左圖では、姫が逃げ、宿の主が刀をぬいてゐながら、首には蛇が二匹まきついてゐる。そこに「あるじ神ばつにて殺さるゝ」とあり、「女房にけゆく所」である。下段右圖には、秋子姫が產をして子を抱いてをり、神主三人が右の方で踊つてゐる。下左圖には土俵があつて、すまふをする所、裸の男が六人あり、今土俵で一人が投げられてゐる所。

第五圖（十四枚目裏と十五枚目表）の左上には、雲の上に「あまてる神」と、馬上の秋子姫があり、そこに「秋子の姫神馬大からくり」と記し、下に「大などんかね家卿」『宮人かぐら役人』がをり、左には、上右に「大神ぐう御せんぐう」と記し、中央に御幣、左上に太陽、其下に、「とがくし明神あらはれ」給ひ、中央に右に「太々かぐらまひ姫」、左に「さくら町さいしやう」がある。

凡て挿繪の人物小さく、版式からは元祿初年頃の物と思はれる。

【太夫・刊年】 題簽に加賀掾正本とあるから、太夫は明かであり、又『岩井半四郎物語』によると、元祿二年三月大阪大和屋甚兵衛座で、岩井半四郎が『伊勢御遷宮』を上演してゐるから、本曲も元祿二年九月十日內宮（皇大神宮）、同十三日外宮（豐受大神宮）の御遷宮をあてこんだ元祿二年の上演物と見て誤あるまい。

【形式・曲節付】 五段曲、各段首尾に形式句が殘つてゐる。

第一「扨も其後　ゞ　かうだにうごきむつの世はさしてつくなふもあらざりけり、いんやうわがうのみおやかみうけつぎまします日の神のみほこのしただり國と成、此あしはらのしまねいやさかゆくすゑもすべらきの、むそじあまりみつのよのりひらせいていあんわ三年、しゆしやうみくらゐなまふけの君もりひらみこにゆづらせ給ひ……」

【梗概】 第一　六十三代の御門が安和三年に御位をもりひらみこに讓らせ給ひ、さて新に年號選びの議あり、大納言兼家も滿仲も、天祿といふに贊成するが、中納言兼道は弟兼家に官位ををくれてゐるを恨み、文句をつける。けれども兼家は中宮の親であるので、御門も心を和げて、なだめ給ひ、その女秋子を伊勢參宮せしめられる。

大納言兼家の女秋子は、天てる神の申子で、美人であり、大君が東宮の御時より御心をかよはせ給ひ、既に懷胎してゐる。乃ち齋宮に立てとの勅諚に對して姫は當惑する。此時兼道は、若し秋子に宮が生れますと、愈々自分に不利益になることを憂ひて、姫を失はうとする。その手段として、先づ福山大膳をして、兼家と滿仲の間を割かしめようとする。乃ち滿仲が大神宮へそなへる爲に用意せる神馬を福山が横領して、かねて仲のよからぬ兼家の所爲と見せようとするのである。處が福山は近江路にて滿仲を襲ふたが、渡邊源五等に討負かされる。

第二　滿仲が伊勢參宮から歸つて、近江石部にての狼藉を訴へると、兼道が横から口を出して、それを兼家の所爲と斷じたので、兼家は一先づ志摩國へ流される。陰謀は半は成功したが、猶秋子姫があつてはといふので、兼道は福山をして、變化にまねて姫を害せしめようとする。丁度節分の晚、姫が鬼の話をしてゐる時、化物に扮した福山は姫の館へ飛込んで姫を奪ふて去る。

其頃郡には變化が出るといふので、滿仲と源五は變化さがしをしてゐると、吉田邊にて女の烈しく泣く聲がする。即ち近づいて暴漢を討つて女をつれ歸る。

第三　滿仲はつれて歸つた女が、日比自分とよからぬ兼家の娘と聞きながら、寡鳥懐に入つては獵師も之を殺さずといふことを思ひ、其上姫が宮をはらんでゐると知ると、新殿を建てゝ重くかしづく。而も滿仲は姫の次の間に寢て警戒を嚴にしてゐるが、北の方は大に嫉妬して姫を圖らうとする。そして一夜魔に襲はれたといつて、北の方は滿仲を驚かし、侍女を姫に近づかせ、「大事のこちの殿さまをねとらんとて、よくも〳〵おくさまをのろひねたみ給ふよな　是せけんのりんきしつとは本妻こそするなるに、あまさかさまのうはなり打先々あらふことかいの、あらおそろしの姫さまや」といつて罵らせる。そのあとで父庭の小蔭からおどされたりすると、姫は北の方の嫉妬が恐ろしく、意を決して、伊勢參宮をして、ついでに鳥羽なる父を尋ねようとして、滿仲の館を忍び出る。

道行「春の夜のゆめばかりなるたまくらもかはさでたちしあだなみのよるべいづことさだめなきそでにしぐれのあきこのひめ……火ともすくれやまつざかにやう〳〵つかせ給ひけり……」

第四　松坂にて姫がある宿にとまると、主人は姫を殺して、路銀や衣裳を奪はうと計る。女房はそれを知ると姫を落す。やがて其夜主人が姫を刺したと思ふと、それは姫が忘れた笠であつた。(「姫君の御笠をすん〳〵にさしとゞし、おはらひあけにそみて有。」)失敗した主人は女房が内通したものと思つて怒つて斬つてかゝると、「太刀とび返り身にたゝず、すかさず切つて拂へども、かさをのつからとびまはり、あなたこなたへひら〳〵といけるが如く女房に付まとひ、ふせぎつゝついにあゞじが頭にきさりはらひ忽ちにじやと成くびをしめ口に入耳をつらぬきせめければ、……あらくるしやとそり返り狂死にぞ死したりけり」。

姫は外宮の鳥居につくと重病にかゝる。宮人達が兩宮のけがれとして、川よりあなたへつれゆかうとする中に、玉のやうなる若宮が誕生ある。人々のさわぐので姫は目を廻はす。遂に人々は屍と若宮とを乘物にのせて志摩へすてにゆく。そしてその出産のあとを「三尺ほつてすてさせあらこもをしきしめを引七どのしほこり火をあらため、あをにたて、しらにきてうちとのしやんぬさを取、さま〳〵にきよめ申せ共さらに其かひあらざれば」大宮司の差圖にて、すまふをとらせて神慮をなぐさめる事とする。

第五　「去間誠に人のたねならぬ神の御するゑとしらず して……」人々は秋子姫と若宮を鳥羽に送つて濱にすてたが、乘物を見ると、姫の屍のみで若宮は内宮の万どのはらひと成給ふ」。人々が驚いてゐる處へ、多勢の見物が來る。その中に兼家卿もあり、姫の屍を見て悲嘆にくれ、最後の別をすべく頭をなでると、「姫の形にあらず、外宮の萬どのはらひ也」。人々は愈々驚いて、二人を兩宮のおうごの方々と思ひ、兼家を宮居へつれてゆく。

都には怪しき事のみあるので、占はせると「勢州山田が原にて王子誕生ましますを、あやしめ奉る御とがめに、かくのごとしとうらなひたり若させるゝと有やいなや、去によつて神慮いさめみかぐらを奏し日月わくわうをこひねがひ給ふ、御りうくわんにみやゐせんぐう有べしとの勅とぞのべらるゝ」。乃ち太々神樂を奏するところへ、鳥羽より兼家が來り、萬どのはらひを差出す。そこへ秋子姫は神馬に乘つて雲を分けて來る。そして父兼家に若宮を抱かせる。天下喜の中に、姫君若君諸共に歸洛、兼家は内大臣になる。「其後いせの御せんぐう御ぐわんじやうかいりやうまんぞく四かいたいへいめでたしともなか〳〵申ばかりはなかりけり。」

【解説】　兼道兼家の兄弟の勢力爭から、兼家は讒言で流される。其女であり、宮を孕んでゐる秋子姫は、危い處で滿仲に救はれ、その館にかくまはれてゐる中に、又しても嫉妬の迫害にたへかねて、逃出して參宮の途中、三度宿屋

にて災難に遇はうとして、宿の女房の救ひで、危く逃れて參宮すると間もなく、宮を誕生して鳥羽にすてられるが、父と邂逅して、宮を誕生した爲の靈驗によつて、都からお使を得て、父子再び榮華にかへるといふ。所謂勢力爭物でもあり、靈驗記でもあり、姫の受難記でもあるのである。宿屋の主人から殺されようとして、その女房に助けられた先例は公平物にも屢々見られた。

○鎌田兵衛正清

【體裁】 帝國圖書館藏本。小形十六行十四丁、兩面繪四。柱に「かまた兵衛」とあり、奥には版元をけづつて、唯江戸○○新板とある。内題に「鎌田兵衛正清ふしみときは小幡物語」とある。

【太夫・刊年】 奥に元祿三年庚午年猛春吉日とあり、その前に天滿八太夫、同重太夫、ワキ權太夫正本とある。

【形式】 六段曲、各段首尾に形式句がある。四段目に多少常盤の道行らしいものがある。

【梗概】 初段 義朝は待賢門の夜戰にまけると、鎌田兵衛と、濃谷金王をつれて、尾張うつみなる、鎌田の舅長田庄司に賴る。それを知ると清盛は直に宗清をして討たしめんとするが、重盛は謀をめぐらし、賞を以て先づ長田を釣つて、彼に義朝を討たしめ、更に其後長田を滅すに限るといふ。清盛はそれに從つて、長田に美濃尾張三河の賞をかけて義朝を討つべき下狀を送る。長田はそれを見ると、五人の子に相談するが、三郎は三代承恩の主を斬ることの八逆罪たることを述べ、反對に平氏の討手來らばそれに抗すべきことをいつて諫める。けれども長田が大に怒つて三郎を引立てさせると、三郎は十七歳の身で、髻を切つて出家する。長田は他の子供等に計ると、彼等は別に反對もせぬので、子供の一人に命じて鎌田を醉はしめ、自分が刺殺すことにし、まづ金王丸を滅さうとして、内海の沖にて網漁の奉行たらんことを求めるが、義朝を奏するのであらば自ら奉行たれ、何を戰に疲れた我に奉行たれといふかといつて、金王丸は大に怒る。

「鎌田正清」 第三圖 （帝國圖書館藏）

二段目 長田は義朝の前へ出て空泣きをして、義朝を馳走せんとして、金王におどされたといふ。義朝が金王を招いて話をきくと、長田は變心して、君を討たん下心だから、斷じて漁にはゆかぬと、金王はいふが、義朝は變心とあらばやむを得ぬとて、金王に勸めて漁に向はせる。金王は義朝に對して最後の別をなし、いざといへば敵を皆殺しにするつもりで出かける。

その夜鎌田は家に歸りて二子を招き、萬一自分が死んだら三河しん福寺のおぢをたよりて出家し、我爲に菩提を弔へといつてゐる時、長田から迎へられてゆき、酒を强ひられて、醉つた所を討たれる。鎌田はこんな陰謀を女房が知らぬ筈はないといつて、女房をうらみながら死ぬ。

長田は夜があけてから、鎌田の死骸を片づけようと思つてゐる處へ、娘である鎌田の妻は、あまりに歸らぬ夫を尋ねて來て、夫の屍を見て驚き歎き、父の非道をのろひ、直に自害を

決心するが、此儘死んでは、三た石、三た若の二子も、父に殺されるかもしれぬと思ひ、更に子をつれて來て、夫の屍の側で二子を刺し、自分も夫の屍にもたれて自害する。それを見つけると妻の母、長田の妻も娘の側で死ぬ。かくて五人は長田故に悲痛な死をとげる。

三段目　長田は女房、子、孫の五人の死を見て驚くが、慾に目のくれた長田は平然として鎌田の首をとる。義朝は三ケ日の嘉例として八幡へ參詣すべく湯殿に入つてゐる。長田の臣三人は時を計つて其處に押入り、義朝に討つてかかる。義朝も始めはふせいでゐたが　長田にたばかられ、數多の敵に圍まれたと知ると、遂にやむなく腹を切り、長田に首を討たせる。

折柄盤ひて網漁に出されてゐた金王は、三十八人の長田の部下の態度を怪しみ、散々に之を討つて、急ぎ上陸して不安に驅られながら歸る途中に、鎌田の下女から一切の事情をきいて、一人で長田を攻めたて〳〵して、一旦大勢の中へ斬り入るが、やがて逃げ歸つて急ぎ都に上る。

四段目　金王丸は都に上り紫野に至つて、義朝の最期について常盤に語り、早く身をかくすべきことをつげて、其身は早速仇の長田を討つべく飛出す。常盤は悲の極に陷るが、此儘にては三子まで清盛の手に捕はるべきを恐れ　今若乙若牛若の三人をつれて、いづこともなく迷ひ出て、其夜正月十七日の晩は清水にやどり、翌朝とぼ〳〵と「扨さいもんに立出、西をはるかにながむれば、四條五條のはしの上清き流れの石川や……」と、道行をして木幡の里につく。

其夜は灯をたよりに一軒の家に立よりて宿をこふが、姥は狐狼野干かと恐れ、翁は義朝の落人と怪みて、中々家に入れぬが、いつまでも立去らぬ母子をあはれみて、遂に家に入らしめる。

五段目　宿の主は常盤を尋常の者ならじと思ひ「木はた山落すあらしのはげしくてやどりかねたるよはの月かな」と一首をかけて見ると、常盤は之に「木はた山すそのゝあらしはげしくてふしみときけとねられざりけり」と答へる。主はいよ〳〵もてなし二月下旬に及ぶ。その間に近所の女房共は來てはなぐさめ、常盤の生れや行先などをきいたりする。常盤はよい加減な事を物語るが、女達は「うゑい〳〵さうとめ田うゑいさうとめさつきののふをはや……」と田植歌などを歌つて慰める。やがて常盤は宿を辭して出てゆく。

清盛は景清をして、常盤の母をさがさせて牢につなぎ、娘の在り所を調べる。それときくと常盤は三子をつれて六波羅に出て、母の出牢を願ふ。清盛は母をゆるし、常盤を景清に預ける。重盛はその危險なことを說いて討たうとするが、人々がとめる。

六段目　長田が清盛に義朝の首を差出して、約束の三國の賞を願ふて與へられず、頗る不平なる時、金王丸が六波羅へ來て、長田の首を討たせよ、そのあとでは我を勝手にせよといふ。此時重盛は長田の忠は眞の忠にあらずして慾から出たものである。かゝるものを許すはよろしからず、金王こそ眞の忠臣だといふ。乃ち金王をして長田をひねりつぶさせる。金王はその後、首を討たれんことを求める。清盛はその勇を以て我につかへよといふが、金王は源氏を思ふて討首を求める。清盛は已むなく、彼を許して、自由の身とする。金王はそれから甲斐源氏へ赴く。

【解說】平治の亂に破れた義朝は平氏に追はれて長田忠致に賴るが、平氏から僞の賞に釣られた長田は先づ婿の鎌田正清を醉はせて討ち、ついで義朝を討つて平家に對して賞を求める。處が、義朝の臣金王丸は長田の陰謀をのがれ

て都に上り、常盤に事情を報じ、清盛に願ふて長田の首を討つことを許されたといふ、鎌田の死と義朝の死を中心とした物語と、常盤が伏見の里にて宗清に救はれたが、母が捕はれたときくと、名乗り出てお預けの身となつたといふ物語とを結び合せたものである。

鎌田を中心とする前半の物語は、既に慶長頃から淨瑠璃に語られたものらしいが、それは舞曲の『鎌田』を殆ど其儘であつたらしく、それが說經に入つて、いつか鎌田物語と伏見常盤物語とが合したものと見えて、本曲の如く鎌田を外題とする正本と、伏見常盤を外題とする正本と、同一內容の二つの正本を見るに至つてゐる。即ち本曲は『伏見ときわ』と內題ある正本と全く同文であり、說經太夫も同一であるが、唯版元を異にしてゐる。

【出處・原據】『平治物語』第三に出て、幸若舞曲『鎌田』と『伏見常盤』とを殆ど其儘つぎ合せたものである。

【影響】影響とはいへぬかも知らぬが、次にあげる東北大學本內題『ふしみときわ』は、本曲と同文であり、同じ『伏見ときわ』が京都帝大國文研究室にもある。此外享保三年の序ある九行大字佐渡七太夫正本、惣兵衛板『鎌田正清』も、享保四年刊九行本東洋文庫藏『鎌田兵衛ふしみときわ』も皆此影響である。

元祿三年正月初演と見るべき『ゑぼし折』に影響を及ぼしてゐると見るべきか、明かでないが、兩者の間に密接の關係がある。

●伏見ときわ

天滿八太夫正本

【體裁】東北帝國大學圖書館藏本、內題『ふしみときわ』小形十七行十丁にて、繪は兩面が三ある。奥には通油町

井筒屋三右衛門板とある。柱に「かまだ」と見える。京大國文研究室本も同物である。

【太夫・刊年】奥に、天滿八太夫同重太夫ワキ武藏權太夫正本とあり、寶永八年正月の刊記がある。それでゐて小林又兵衛なる本主が「寶永七年寅極月」と記してゐるに見ても、元來がこれより前のものであることが知られる。

【形式】六段曲にて、各段の首尾には形式句が殘つてゐる。

試に本曲の各段首をあげると下の如くである。

初段「扨も其後つら〳〵おもんみるに、さかんなるものは必かとろふるならひ有、爰に仁王七十八代二條の院の御時源氏の大將左馬の頭よし朝は……」

二段目「其後おさたはこん王におどされてふるい〳〵さしきを立義朝の御前に參そらなきをぞしたりける……」

三段目「去ほどにすでに其夜も明ければ庄司はかまたが首とらんと…」

四段目「去程にこんわう丸ときは御前のおはしますむらさきのにまいり上郎たちを支付てか樣〳〵と申ける…」

五段目「去程にときわの前にはおふちや姥が情にて樣々いたはり奉りたき火にあたゝめ申せば袖のつらゝもとけにける、かくて御前は……」

六段目「その後おさたはよしともの首をもち景清を頼清盛公に奉る…」

「伏見ときわ」 終の圖 （東北帝大藏）

曲尾「……これまた源氏の御代となるべき御きつきやうせんしうはんせいばん〳〵せいすへはんじやうのおんよろこびめでたしともなか〳〵申ばかりはなかりけり」

○辨慶京土産

【體裁】 東洋文庫藏本は十行二十八丁。青々園文庫藏本は八行三十丁。又紫蘭文庫藏本は十行三十丁本にて、京寺町通、菊屋七郎兵衛板。何れも半紙形。『近松全集』第三にも收む。

【太夫・刊年】 『近松全集』には、青々園文庫本は角太夫の正本であることは曲節付から疑ないとある。家藏本も確に角太夫節と見られるが、各段首の形式が、普通の角太夫物よりは幾分柔いでゐる。

内容から見ても、筆癖から見ても、よし近松物としても、元祿前のものとは思はれず、やはり近松作といはれてゐる『本朝用文章』との關係から元祿初年のものか。

【作者】 成るほど近松物といはれ、推定され、若しくはさうらしく云はれてゐるほどあつて、文體や暢達なる筆致等から、近松の作かと思はれるが、確證を得ない。

【形式・曲節付】 五段曲にて、角太夫節の正本としては、幾分各段首に形式句のとれてゐる處がある。

第二段に名所物語、第三段に茶の湯の場、第四段に牛若姫君道行、第五段に黄金の威力物語の節事がある。

曲節付の主なるものは下の如くである。――カントメ、カンクル、トルフシ、ヒツトリ、七ツユリ、カンコトハ、キホヒ三重、ナキフシ、サイモンフシ、ミコフシ

【梗概】 第一　牛若が都をあらすといふので、重盛は之を討てといふが、清盛は常盤に助命を約束したのだからといつて、常盤を預けてゐる監物太郎に命じて、母の命だからとて、牛若に出家させようとする。

牛若は鞍馬の東光坊にあづけて、毎日僧正坊に教へられて武をはげんでゐる時、大天狗が現れて牛若を嘲り、牛若は天狗と試合をするが、遂に天狗に勝つ。天狗といふのは武藏坊辨慶で、彼は五條橋にて一旦牛若に屈したが、今一度力試しをしようとして、天狗姿で牛若に試合をいどみ、又しても負けて白狀する。そして愈々牛若に屈して、鎌田正清のせがれ三郎正親と心を合せて、牛若の爲に平家の様子を伺ふ。

やがて監物太郎は東光坊に至つて僧正に對面し、當月三日は左馬頭義朝の十三回忌だから、それまでに牛若を出家させたいが母御の望だといつて、牛若に迫る。僧正がすゝめても、牛若は容易に應じようとせぬ。乃ち太郎が强制する所へ、鎌田正親がかけつけて、清盛の爲に民が苦しみ、其上源氏の仇だから、傲る平家を滅す時の大將にするのだからとて、牛若の出家を遮る。僧正も之をきくと、平家討伐をすゝめ出家をとめる。此時鎌田は代りに出家せよとて、太郎の頭を剃つて、刀を奪ひとり、坊主にして歸す。

第二　牛若が一日鞍馬を出て野に遊ぶ折、二人の賤の女に遇ふ。牛若が二人に向つて、あたりの名所物語をさせると、賤の女はそれを語つて後、牛若に盃をさす。牛若が喜んで飲んで返すと、女はその盃を懷に入れてしまふ。牛若が怪しんで故をたづねると、女等は今出川鬼一法眼の姫千鳥の前の侍女、朝日夕日の二人で、嘗て牛若を見初めて戀病ひをしてゐる姫の爲に、牛若に近づかん爲に來たものだといつて、其儘牛若をつれて今出川に歸る。そしてやつと姫と牛若とを引合せた所へ、鎌田正親が來て、四面敵に圍まれて油斷ならぬといつて、牛若をつれて歸る。歸途果し

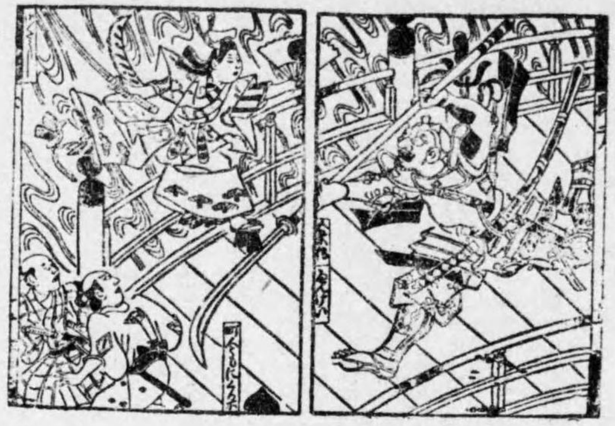
て監物太郎の一行が襲ひかゝるが、鎌田は太郎を討つて敵を追拂ふ。

第三　その中千鳥の前が牛若の爲に姙娠し、近頃男の子を生んだときくと、鬼一法けんは、驚いて其子湛海に、牛若を討たせようとする、平家を憚り、家の滅亡を恐るゝが爲である。やがて鬼一は牛若誅伐によつて恩賞に預らうとし、茶の湯を催して、婿舅の契約をせんといつて、牛若を招くことにする。

計略があるとも知らで、牛若は一人でぼうぜんと鬼一の館に入る。やがて茶の湯の始まつた處へ、武藏坊辨慶は大小姿にて入來る。牛若が大小を携へた無禮をなじると、油斷のならぬ今日左樣の事をやめて、早く大事の計畫に取かかれと辨慶はいふ。それをきくと、鬼一は辨慶をなじりながら、茶の湯の濫觴を語つてきかせ、「そも〳〵茶のゆのらんしやうは、もろこししんのゑおんぼつし、れんげらうをきざみ、六時三まいのつれ〳〵とろさんのあめのよさうあんの内かたらう人々には、たうゑんめいりくしゆせい……」、と辨慶にも稽古をすゝめる。ところが辨慶はその裏をかいて、雜兵をかくして牛若を討たん計畫ならんと一々鬼一の密計をあばくと、敵の部下は果して四方から飛出すが、辨慶は緣の框をとつて雜兵を追拂ひ、牛若をつれて退く。鬼一父子は愈々怒つて、此上は千鳥の前の家を襲ふて牛若の子供を加茂川へ沈めよと命ずる。

千鳥の前は牛若との子を千代若丸と名づけて、一間に押込められて、侍女朝日夕日と共に忍び暮してゐるが、そこへ郎等早見權内が下人をつれて入り來り、若君を强奪してゆく。千鳥の前は歎きつゝ其後を追ふ。そして今しも若君を竹のすきまにする處へ追着いて、罪なき赤子を殺す胴慾さを恨み、父へは殺したと僞つて助けてくれと口說きなげく。けれども權内は我が戀をいれてくれなかつた戀の敵でもあるのだといつて、冷酷に取扱ひ、罪なげに笑ふ赤子

を、水に投込むと、姫は倒れ伏してなげき狂ひ死なうとする。そこへ辨慶がかけつけ、權内を捕へて深みに投げ込んで殺し、姫を助けて去る。



元祿二年刊「義經記」

第四　辨慶は千鳥の前をつれて八瀨の牛若のもとに駈けつけ、一切を物語つた後、鬼一が追かけ來らんことを憂ひ、牛若と千鳥の前とを尾張なる常陸坊海尊の家に隱れさせ、鎌田と二人で暫く後を防ぐことにする。

牛若姫君道行（この一行がこゝにある）「思ひ立つ柱暦の中だんにふねのりはじめかど出に、よしやゑらぶもおろか成、女心をなぐさめて、思ひ立日を吉日と、ついむくおきに牛若は姫君の手を引てやせのはにふを出給ふ、かもの川なみおとすごく……くさののがみのさとわらべ、はやり哥やらこゑを上とよひござらばひごなたさいてごされの、ばんにやこざくらのゑだおろのんやほ〳〵……」

源氏重代の勇士常陸坊海尊は、義朝の滅後山伏姿にて佗住む中、「同國おんやうじの大めいじん、一はしといふみこに相馴れ」てゐた。丁度一はしが留守の時、牛若と姫とは海尊をたよつて來て、かくまいを賴む。海尊は二人を笈の中に隱し、暫く女房には祕密にしようとする。そのあとへ嫉妬深い一橋が歸つて來て、二つの笈を怪しみ、中なるものを尋ねると、海尊は

一つには辨財天女、一つには不動明王を入れた、そして七日の護摩を頼まれたから、女は近づかず別の家に住めといふ。女房一橋が愈々怪しむ所へ、湛海は牛若を追かけて來て、尋人が此國に居るかどうかを占ふてくれといふ。海尊は此所ぞと思ひ、占ふといつて僞つて、牛若等の安全を祈る。ところが、先程から夫海尊の擧動を怪しんでゐた一橋は、今こそ夫に恥をかゝせて、たしなめようとして、自ら尋人を引受けて、神おろしを始める。そして遂に夫婦で祈禱の中に、互に惡口の云ひあひを始める。「惡い心へじやまをせば山の神とはいはせまじがうまのりけんをするりとぬき、たはう千里の外へさつてのけんとの御たくせんときねんきたうはわきへ成ふうふいさかひしともなし、女房なをもはらを立何わらハをばさらんとや、扨々それはきよくもなや……」。この樣子を見ると、湛海は何のことかわからず、狂人かと怪しむ。女房はいよ〳〵狂ふて、あのいたつら坊主が若衆と女をかくしてゐて、われを去らうとしてゐる、その爲の爭だと白狀する。湛海は怒つて、遂に笈の蓋をあけようとする。海尊は太刀おつとつて一同を追拂つて後、女房に牛若夫婦を紹介する。湛海等は又引かへすが、牛若海尊等は遂に湛海の首を討ち、陸奥へ下る。

第五　一行が伊達の郡秀衡がたちにつくと、秀衡は五人の子と共に悅び迎へる。牛若は平家討伐の話をもち出して秀衡の贊成を得る。そこへ辨慶と正親がかけつけて、而も辨慶は牛若の上座に坐る。秀衡が怒つてゐると、「辨慶が京みやげはつたと失念申たり、いで〳〵せんみやうよみきかさん……」といつて、牛若丸に給はつた平家討伐の院宣をよみ上げ、やがて下座になをる。牛若は二人を秀衡に紹介する。

其後秀衡は領內の金山を吉次信高に支配させて金を堀らせてゐるから、お慰にお目にかけるといつて、岩を切り土をうがつてほり入り、「こがねの山口」の實況を大仕掛に見せる。更に吉次兄弟をして金の威德を語らせると、吉次は「そも〳〵こがねのらんしやうは天平勝寶いぬの年奈良のみかどの御時初てこがねわき出る……さればこがねは萬寶のつかさ、其とく君に同じうして、きせんおろかになす事なく、一天せかいをくる〳〵〳〵、めぐりめぐるやおぐるまの我君の御ゐ光はこがねの光に百倍せり……」とことほぐ。

【解說】　矢張一種の判官物にて、淸盛の牛若出家强制、牛若と鬼一の娘の戀物語、鬼一父子の牛若と千鳥の前討伐物語、辨慶の活躍、海尊の牛若をかくまふ物語、牛若秀衡對面等、滑稽味やゝ豊かな所謂牛若奥州下りの前後の物語である。本曲に於て殊に注意すべきは第五段に金山採堀の實況を取入れたことゝ、「黃金は萬寶のつかさ」といつて、黃金崇拜の語の現れて、如何にも資本主義發生時代の姿を見せてゐる點である。

【原據・影響】　『牛王姫』『遊屋物語』『牛若虎之卷』『牛若千人切』の諸曲と多少關聯する所がある。

本曲が近松作『本朝用文章』と構想文章等に於て似てゐることは驚くほどで、之に關して藤井博士は次の如く述べてをられる。

牛若と鬼一千鳥の前との關係は、頼朝と伊東入道との筋をかりたものであるが、その他は本朝用文章と趣向も文章も殆ど同樣で、牛若は阿新、鎌田三郎は日野資朝の執權左衛門尉藤原、駄物太郎は北條方へ內通の日野家の臣石見守となつてゐる。その前後は定めにくいが、趣向として京土產の方が自然に近いやうに思はれる。用文章はこの改作ではなからうか。

（弁慶京土產）

前半は弁慶京土產と同樣の脚色……又京土產の方が仕組に無理が少くない。妙法坊が阿新菊の姫二人をかくまふ所も京土產と一樣である。（本朝用文章）

なるほど牛若千鳥の前の二人を海尊が笈の中にかくまふ所は、『本朝用文章』では妙法坊が阿新菊の姫をかくまふ所と全く同樣である。かうして種々の點で此兩曲の似てゐることがしみ〴〵と思ひ出されるのである。

尙茶の湯を以て牛若を討たうとして、鬼一が失敗する先例は、播磨の語物、寛文十年の『鎭西八郎爲朝』の第五段にも用ひられてゐる。不幸にして今同文かを比較することが出來ぬ。

○輾朝濱出　　加賀掾正本

【體裁】半紙形八行六十丁。題簽にも內題にも、上の題があつて、外題の下に加賀掾直傳と見える。山本九兵衞刊。別に十行三十丁本も、十行三十二丁本もあり、最後の本の內題下には「付タリ風流女武者」とあるといふ。『近松全集』第三にも收む。

【太夫・刊年】加賀掾の字は奧にも題簽にも見えるが、刊年はない。元祿初年迄のものか。

【形式】五段。各段首には形式句はないが、各段には大體ある。第一段に「女武者勢揃」第四段に「虎團三郎道行」の節事がある。

第一「あら面白のやつ〳〵や春に先咲梅がやつ……」

【梗概】曾我兄弟の仇討の一種で、近松の作とも稱せられる。此種の曲十種あまりある中で、最も稚拙なものである。外題は輾朝の濱出の遊のことから說き出してゐるに起つたものである。舞曲の『濱出草子』とは關係がない。

○東山殿追善能　　加賀掾正本

【體裁】帝國圖書館藏本。『校註淨瑠璃稀本集』にも所收。但し前者には奧附がないが、後者には奧附があつて、加賀掾とあり、山本九兵衞とある。共に八行四十三丁。

【太夫・刊年】奧附に加賀掾とある。刊年は不明にて、解說の條にもいふ如く、西鶴の『曆』から借りた「富士山十二月の風景」の景事を主として考へると、藤井博士の想像される如く、義政の二百年忌にあたる元祿二年頃の上演かとも思はれぬこともないが、またもつと後のものか不明。何れにしても「長月の紅葉狩」といふ語があるから、九月の上演のやうに思はれる。

【形式】五段曲。各段尾には形式句がある。第五段に「富士山十二月の風景」の景事がある。

第一「それ人は衣食住此三つ缺けざるを富りとす。三つの事儉約ならば誰の人か足らずとせん、爰に足利九代の公方征夷大將軍源義尙公は……」

【梗概】第一　兄利義尙が亡父義政の二十五回忌を催して、父の靈を慰めるべく、父が好んだ能を催し追善にしようとする時、執權の一人で末席に連る玄蕃國貫が、若君萬榮丸の乳母の親の弟であるといふを笠に、能道具の次第を聞いて、金がかゝり贅澤に過ぎようなどゝ云ひ出し、他の執權細川政元と爭ふ。其爭をきいた義尙は遂に怒つて、三百騎を以て、國貫を討たしめる。虛をつかれた上に多勢に無勢の國貫は「兩の耳へ指を入れ首引拔」かれる。

第二　義尙が萬榮丸にも能をしろと命じたといふので、萬榮丸が普阿彌を招いて、その爲にと羽衣の曲を稽古して

ゐる處へ、政元は命を果し、國貫を討つてかへる。やがて義尙は追善能を催すことを止めて、萬榮丸の望にまかせ、北山に盛りの紅葉狩を催すことになる。

九月の始、前關白の息女直衣の前は、乳母の姉の尼が住む嵯峨野に近き双の岡の庵にて、紅葉葉を集めて酒を暖めて戲れる折しも、晉阿彌一人をつれた萬榮丸が來ると、姫は近づいて酒をくみかはし、夕暮に名殘惜しく別れる。

第三　双の岡の紅葉狩に見そめた姿を忘れかねて、萬榮丸はその後ふさぎ込んでゐる。かくと知ると、晉阿彌は其憂鬱を慰め申さうと計る。

直衣の前もそれより後、萬榮丸の事が忘れられず、思ひ焦れてゐると、常に來る軒端といふ盲瞽目は、「只今中京に俤と申御前候、筑紫琴の上手にて、折々連引致候」と物語つて、やがて萬榮丸の邸に至つて、俤といふ盲瞽目に、萬榮丸を扮せしめてつれて來り、韓神（からかみ）といふ祕曲を奏して、姫を喜ばせた後、夜更けて俤を姫の間近く忍ばせる。萬榮と姫とは紅葉狩の折の思ひ出から、互の胸中を語り合ひ、遂に乳母の氣轉にて、連理の契をこめることゝなる。

第四　萬榮丸が直衣の前に忍ぶことが、義尙に知れると、萬榮丸は直に駿河に追ひやられ、清見寺に預けられる事となる。かくと知ると悲歎限りなき姫は、御所近く住みなれた白狐に頼んで、萬榮丸の側へつれて行つてくれといふ。神變自在の白狐は忽ち女となり、やがて鷲に變つて、姫を搔抱いて東に向ふ。

狐は興津につくと、下女の姿となつて、姫をつれて清見寺に行くが、門口にて犬が數匹吠えついた爲、驚いて正體を出し、犬に食ひ殺される。姫がなげく聲に驚いて人々はかけ出で、萬榮丸も出て來て、喜びながら、姫の歎く所以をたづね、狐の死の物語をきくと、狐の爲に稻荷明神を建てゝ祭る事となる。

やがて將軍の子である萬榮丸が此地にあるとわかると、附近の夜盜强盜の大將稻妻六郎は、一夜萬榮丸を襲ふが、彼は巧に盜人共を殺して凡てを追拂ふ。此時狐の同類は明神を建てられた恩を感じて、來つて萬榮丸を守護する。

第五　萬榮丸直衣の前は其後許されて都に歸り、公然と結婚を許され、田舍にあつた間に富士の風景を見たゞらうといふので、萬榮丸は富士十二景を語らせられ、直衣の前は「今樣につらね舞」を奏でさせられる。

（終に富士山十二月の風景がある。）――「ながめ也、富士は和國の蓬萊山、峰は削りなせるが如く其高さ測られず……」

【解說】　初段では東山殿追善能を催すことが、將軍義尙によつて意氣込まれながら、いつかそれが煙の如く中止されて、第二段以下は專ら紅葉狩に端を發した、義尙の子萬榮丸と、前關白の一人子直衣の前との戀物語である。而も其戀が公になつて、萬榮丸が駿河の清見寺に幽閉の身となると、それを追かける直衣の前を、神變自在の白狐が鷲に化けて攫んでゆくのみか、狐が犬に殺されて神として祭られた後は、同類の狐が戀人同士を守るといふのである。

最初の一段が外題の生れる所以でありながら、まるで戀愛物語とは緣がないものであるが、第五段に於て、萬榮丸が清見寺に幽閉されてゐたといふので、富士山十二月の風景を語り、それにつれて直衣の前が今樣を舞ふといふのも、相當突飛なものであるといへるのである。それにしても此富士山十二月の風景を西鶴作の『曆』から借りたのは如何なる理由によるのか、『曆』の上演後遠からぬ頃に、本曲が上演された爲に、富士風景をかりたものとすれば、萬榮丸の幽閉所を、その爲わざ〳〵清見寺としたものであらうし、萬榮丸及び直衣の前と、清見寺との關係が傳記的にでもあるのだとすると、それによつて『曆』の景事をかりたものであらう。この二つの理由が、或は本曲の刊年と

關係があるかと思はれる。即ち前者が成立すれば、藤井博士の想像される如く、義政の死後二百回忌にあたる元祿二年頃の上演かもしれぬが、後者が成立すればもつと後の元祿末頃の上演かとも思はれるのである。それは『勝尾寺開帳』とか『愛染明王影向松』などの如く、機巧的演出上の興味をねらつて、又狐が人間に對して報恩的行爲をする動作が、元祿末頃から寶永頃にかけて、度々演出されてゐたり、操にも、歌舞伎にも、此頃『しのだ妻』の改作が度々上演されてゐたからである。然しさうした考は下らぬこじつけかも知れぬ。

さるにても本曲は『東山殿子日遊』とは關係がありさうに見えて關係なく、第二段には謠曲『羽衣』が大分引用されてゐることも注意すべく、又戀愛物としては、二人の戀愛の成立の模樣といひ、姫が白狐の變化である鷲に摑まれてゆくあたり、『十二段草子』の影響らしく見え、又鳶や鷲に摑まれてゆく例は、既に古くから繰返されてゐる。

なほ本曲が事實と緣の遠いものである事は、將軍義尙が義政の二十五回忌を營むとありながら、義尙の方が義政よりも一年前に死んでゐることでも證せられる。

【影響】『當流羽衣の松』は本曲の影響である。

○阿漕平次

【繪入本】帝國圖書館藏本。內題に『阿漕平次』とあつて、半紙形より稍大きな形で、十七行十四丁半。柱に「平次」とあり、終に山本九兵衛板と見ゆ。挿繪は『高砂』と同筆致にて、兩面三、片面二。

【太夫・刊年】刊年は記入がないが、初行に土佐掾正本とある。版式から元祿初年頃か。

土佐掾正本

【十行本體裁】紫蘭文庫藏本。半紙形十行三十丁。初行に上の如くあるのみにて、版元も不明。『新群書類從』第五に收められてゐるものとも、繪入本とも同文である。

【太夫・刊年】共に不明であるが、曲節付から見ると角太夫節の正本である。『繪入淨瑠璃史』には貞享頃のものとあるが、この正本が原本であるとすると、十行だから今少し後の元祿初年頃のものではないかと思はれる。繪入本には前記の如く、土佐掾正本とあるから、結局元祿初年のものか。

「あこきの平次」初丁（紫蘭文庫藏）

【形式・曲節付】五段曲、各段首尾に形式句があり、第四段に「たけひめともわか道行」がある。

第一首「さてもそのゝち、いせのうみにあこぎがうらにひくあみもたびかさなればあらはれぞする、そも此ゑいかのたいがいをいかにとたづねもとむるにんわう四十九代……」

【梗概】第一　人皇四十九代光仁天皇の御代に、丹波國天田郡の山吹將監高信は、天田郡に城廓をかまへ、威勢盛である。執權荒川だて右衛門時遠は、高信の妹ちか姫を戀してゐるが報ひられぬ。ちか姫は時遠の下役たる若年のかげゆの介を戀し、一日百姓が年貢納に來た時、姫は彼を口說き落す。折柄時遠はそれを庫の中にて聞く。そして怨めしさに、此事を大將高信に訴へる。高信は怒つて、姫の乳人はやとの介を招いて、姫に越度あらしめたことをなじり、彼を勘當する。

時遠は第一歩に成功すると、更にかげゆの介を讒言し序に殺さうとして、かけゆの介がもつてゐる重代を高信に所

望させ、命に背かば其儘殺させようとする。處がかげゆの介を招いて、時遠が彼の太刀を見ようとすると、名刀飛龍丸は自らぬけ出て、ひら〳〵とひらめき廻るので、一同は驚いて逃る。かくてかげゆの介は危い處で助かる。

第二　やがて兄高信が姫を招いて、其不心得を叱ると、その實は時遠こそ、戀を迫る惡人だと姫が語るので、さらばとて其證據を見るべく、姫をして時遠を招き寄せさせ、高信が姫に代つて寢てゐると、時遠は果して忍びよつて口説くのである。高信が時遠を罵ると、時遠は本性を現して、主君高信を殺し、一家中を手下にする。

姫は兄の仇を討たうとして、一旦かげゆの介方へ隱れる。かくと知ると、時遠は直に其後を追ふ。已むなくしてかげゆの介は姫をつれて落ち、山に入つて、姫の乳人はやとの介が結んでゐる庵室を見つけて賴り、やがて姫をつれて伊勢路へ逃れる。

第三　かけゆの介は阿濃の郡島が崎に住んで、既に姫との間に、十二歳の竹姫と七歳の友若とをもうけてゐる。かけゆの介は今は阿漕の平次といつて、漁をして其日を立てつゝ、昔の榮華を戀してゐる。丁度今夜も平次が漁に出ようとすると、大神宮の御領内にては、殺生禁制が嚴しく神のお咎めも恐ろしいから、出漁をやめよとて、姫は頻りに平次を制するが、平次は却つて妻を叱つて出てゆく。

勢州總政所小林右近太夫守直は、禁漁を犯すものを捕へようとして警護してゐる中、平次を見つけて引捕へ、掟によつて裸體にして手足を結へ、石をつけて海へ投げ込む。平次の歸らぬを心配してゐた姫は、平次がふしつけにされたといふ高札を見つけて、歎のあまり氣が狂つてしまふ。

其後はやとの介入道は西連と號して、關東までもかげゆの介をさがし、伊勢に歸りて、高札を見て、回向してゐる

中に、平次の幽靈に出遇つて一切の事情をきゝ、平次から麻の片袖のかたみを預つて、大和の宇治へいそぐ。

第四　狂氣になつた姫は、所を追拂はれて、十六の竹姫と十一の友若とをつれ、春日のほとりに住む中、病死せんとする。姫は此時自分が丹州天田の城主山吹殿の子なることを敎へ、伯父の仇を討てといふのであるが、丁度其時西連入道が尋ねて來る。姫も西連も互に歎き悲しむのであるが、「世の中の定る事と」て、「すくせのむくひにて」、姫は遂に死ぬ。西連は悲しむ二子をつれて、時遠に復讐すべく丹波に向ふ。

たけひめともわか道行。「人はなさけの下もみぢ、れんりにやとる兄弟に、かさふか〳〵とさきにたて、わらぢのひもをしめおしへあとにほうしのうつゝなや……」

第五　天田郡を押領した伊達右衛門時遠が、一日茸狩をしてゐるのを見ると、平次の二子姉弟は茸を買へとて一行に近づく。時遠は姉姫の美しさを見ると、しなだれかゝつて、姉姫を手に入れようとする。其時姉弟は時遠を討たうとして失敗するが、其處へ赤色の玉が飛んで來て、かけゆの介平次の靈が現れ、時遠を睨みつけて悶絕させる。姉弟は遂に仇討に成功する。けれどもかげゆの介は、ふしつけにされた苦を訴へるので、西連が和州長谷寺の開山道德上人のかいた名號を口にふくませて成佛せしめる。

【解說】惡人は主人の妹姫を手に入れようとして失敗すると、却つて主人を殺して主家を横領する。姫は戀する若侍と共に逃れて、伊勢に佗住む中、夫は禁斷の漁を犯して殺される。姫は狂氣になつて死ぬ。姫の二子は入道した忠臣である母の乳人の助力によつて、遂に伯父の仇を討つといふのであつて、一種のお家騷動物であり、主人の妹姫横領の未遂物でもあり、仇討物でもある。けれどもまた一面に於て、本曲が皇大神宮御供魚に關する禁漁問題と關係さ

せてある點からは、敬神思想を根抵とする物語とも見ることが出來るのである。

【出處・原據】 阿漕の海士の俗說と謠曲『阿漕』『あこぎのさうし』などによつたものである。阿漕の海士の俗說といふのは『勢陽雜記』卷三によると下の如くである。――

「阿古木は津の城下より五六丁巽。濱邊に古墳一堆、榎一本あり、これを阿古木の明神といふ、海人の俗語ならし、むかし納所村より大神宮へ御供調進の時、此浦にて贄の佳肴を漁せり、其故に伊勢をの海士の世を渡るいさりを禁戒しけるに、阿古木といふあま人、よる〳〵忍びて網を引き、渡世ともしからざるとなり、かくて忍び〳〵の度かさなりければ、人目もあまり遂にあらはれ罪科に行はれて、此浦の波間に沈められけるとかや。其靈たゝりをなす事あるによりて、十の禰宜より社を祠りてのち、惡靈邪氣のさたも鎭まりけると……」

阿漕の靈を鎭めて成佛せしめたと、本曲にあることから見ても、此說を取入れたことが明かである。又『あこぎのさうし』といふものゝ梗概も大體似たものであるが、『近古小說解題』の文をかりて見ると、

元來阿漕浦にては大神宮の御贄の料にするほか、一切の漁獲を禁ぜらる。然るに一志郡鎌畠の主平次盛といふ武士伊勢少掾に任ぜられ、勢あるまゝに暴行少からず、夜な〳〵人を遣はしてこの浦にて漁をなさしむ。神宮の宮司憤りて公に奏上せしに、次盛却つて大いに怒り、一族等を集めて御贄の鰒を捕る蜑をぞ妨げける。この由神宮より國司に告げければ、國司軍勢を催し、次盛と戰ひて之を生捕る。次盛後悔して謝しけれども、世の例にせよとて、やがてふしづけにして海に沈めけり、その怨靈祟りて癘疾行はれ、死者夥しかりければ、僧行鎭次盛の塚を弔ひて懇に後世の事を營みけれども、なほ休まず、三安友盛といふ神主こゝに小祠を建ててこれを祀る。今は誤りて友盛の祀りしは八幡なりと曰へり。建長年中この祠を造り替へたる棟札

天王寺にありなどいへり。

奥書、明德二年十一月三日、兵部少輔俊宗

と記されてゐる。又本曲に引かれてゐる「逢ふ事も阿漕が浦にひく網も度重ならは顯はれやせん」の歌は『古今六帖』の「逢ふ事も阿漕が浦に引く網もかず重らば人も知りなん」から轉化したものであらう。

【影響】 寛保元年九月豐竹座上演、『田村麿鈴鹿合戰』には阿漕平次が田村麿の舊臣として活躍してをり、この四段目は『勢州阿漕浦』の名で繰返し上演されてゐる。

讀物としては延享二年八文字自笑、其笑作の『阿漕浦三巴』、文化七年三馬作『阿古義物語』、三馬作の續物たる文政九年二世楚滿人作『阿古義物語拾遺』、刊年不詳の『阿漕浦物語』などがある。

○石川五右衛門

松本治太夫正本

【體裁】 東洋文庫藏本。半紙形十行二十一丁。勿論繪なしにて、奥に「大阪北久ほうじ町御堂前西かわ、本屋仁兵衛」。題簽は表紙の中央にあつて、それに「石川五右衛門」とあり、下に松本治太夫直傳と見ゆ。『德川文藝類聚』第八にも收む。紫影文庫に十行三十丁半本、又古叢文庫にもあり。

【太夫・刊年】 表紙中央の題簽に『石川五右衛門』とあり、その下に松本治太夫直傳とあるから、治太夫が語つたことは勿論だが、刊年はない。

【形式・曲節付】 五段曲にて、形式句が各段首尾にある。曲節付もついてゐるが、角太夫節に似てゐる。

第一「扨も其後それぶんせん王の詞にいはく君きみたらずといへとも、しんしんたらずんは有べからず……」

曲節付の主なるものを見ると、

序詞、オロシ、コトバ、地、ジツコトバ、惡人コトバ、カンコトバ、ナキフシ、ヤツシコトバ、ハツミフシ、三重、ウレイフシ、オクリ、キライ、色詞、カヽリ、色、大三重、ウタ、江戸フシ、フシ、コウタ、ウレヒガヽリ、ウタカヽリ、ロウサイコウタ、ハヤリウタ、六方ナノリコトバ、ウタヒ

等相當珍らしいものが見られ、殊にジツコトバ、惡人コトバ、ヤツシコトバ、ロウサイコウタ、六方ナノリコトバなどはさうである。第三段に柳の前道行がある。

道行「つらきはいやな戀風にいかでなびかん柳の前ふきみだされてちり〳〵に、おつるはもじやたびすがた、今とうふうの江戸がのこしだしもやうのそめ小袖、御みかろげに、立出て大のゝいへのかんでうを、あにうへにわたさんと、まもりぶくろに入給ひ……」

【梗概】第一　遠州濱松の住人、大野庄左衛門のすけ師安が死後三年、長子藤若十六歳は、よく繼母に孝を盡す。妹に十三歳の柳の前があるが、後腹の美人である。執權に眞田藏之進行貫があり、若君の乳人である。姫君の後見には、進藤國右衛門があり、遺言の箱は進藤に、鍵は眞田に預けてある。若君が十六歳になつたら、遺言を開けとあつたので、祝の日を定めて開くことになつたが、開くに先立つて、御臺は平生の惡心を出して、若君を追ふか殺すかして、柳の前に家をつがせ、進藤を其婿にせんと圖る。

さて定の日に遺言を開いて見ると、「都高尾山清龍寺座主藤若が伯父なれば、寺に上せ出家遂げさせ、左衛門が若提をとはすべき者なり」、又柳の前十四歳になれば、後家の望にまかせ、婿をとれとある。御臺は怪しむが、眞田は驚いて、若君の出家に反對し、取消を哀願する。進藤は眞田の說に從はぬ。けれども眞田がよく見ると、手蹟の上に涙がこぼれてゐたり、文字もしどろに、紙にもつぎ目がある。怪しんで手水鉢で洗つて見ると、文字は皆脫げる。乃ち陰謀が行はれてゐると叫んで、「誠あらん侍は若君の御供せよ」と眞田はいふが、既に企まれてゐることゝて、一人も加擔せぬ。眞田はやむなく太刀引拔いて戰ひ、一先づ鄕國へ落ちる。

第二　惡人共は先づ眞田を討取る手段として、使を以て、舞坂蓮沼の眞田が家に、其妻を生捕らせる。歸宅の途中に之を見た眞田は、奮戰して敵を斬拂ひ、妻子を奪還し、河內國の知邊をたづねて、小源太を肩に妻をつれて落ちる。

進藤國右衛門勝平は、今は主人の如く振舞ひ、御臺に向つて、柳の前との結婚を迫る。御臺は乃ち姫を口說くが、兄をさしおいて左樣な亂暴は出來ぬとて、姫は出家を願ふ。御臺は困つて、その夜の中に藤若を殺させようとする。かくと知ると、姫は兄を落ちさせようとするが、「親孝行の爲なれば御手にかゝれば本望」といつて藤若は動かぬ。けれどもそれではとて、姫が自害しかけるを見ると、やむなく姫の言に從つて、和州高間寺圓覺坊の叔父をたづねて落ちる。姫も別に姿をかくす。

やがて藤若も姫も見えぬに驚いた進藤は「やいおひぼれ、扨は我をたばかるな、姫が行がたなきからは、もはやおのれはおや共しうともおもはぬなり」といつて、御臺を刺殺し、大野の家を我儘にする。

第三　眞田は河內國へ行つたが、緣りの者は跡たえて、世渡る法もないので、石川五右衛門と名乘り、女房には茶

店を出させ、其身は駕籠屋をして、ゐる風に見せ、密に阿部野堤で剽盗をしてゐるのである。

柳の前は乳母と二人で道行をしながら、藤若をたづねてゆく。淀の橋本の宿にて松や又七といふにやどる。

石川五右衛門彌之介の主從は、此頃阿部野をやめて、伏見の里藤の森邊から京をあらして、淀橋本の宿々をさがしてゐたが、其夜柳の前の宿つた松屋の奥座敷に押入り、柳の前主從を殺して、一切を奪ふて去る。

第四　五日振りにやつと歸つた五右衛門が女の着物などをもつてゐるので、女房は妬けて毒づく。五右衛門は盗を隱さうとしてごまかす。そこへ捕手が押かけて來て、五右衛門と彌之介に繩をかけ、橋本の宿にての罪狀をならべ、盗んだ品物を出させて見ると、皆「丸にすはま付て有、また守袋に卷物有、開て見れは大野左衛門之介師安家の系圖」である。五右衛門は始めて、柳の前を殺したことを知つて歎き、親子三人引かれてゆく。彌之介は此時自害してしまふ。

五右衛門は都に引かれて調べられると、主家の事から語らうとするが、主の名を汚すととめられ、三人共に七條河原にて、釜煎の刑ときまり、洛中洛外を引かれ、「石川や濱のまさごはつくる共世に盗人のたねはたへせじ」と歌つて、いざといふ時、女房一人は何も知らぬ上に、女の事とて助けられる事となるが、女房はそれより親子を助けて、代りに殺してくれといふ。けれども藤若をさがして世に出せといつて、五右衛門父子は釜に入れられる。火をたかれるに從つて、五右衛門は辛さを思ひやり、先づ小源太を膝の下に引敷いて殺し、間もなく自分も死ぬ。

第五　藤若は二年計大和高間寺にあつたが、その後都おし經山にこもる。そこへ尼姿の五右衛門の女房は廻り合せ、進藤勝平が此頃有馬の湯へ來て、京に寄り、明日高尾の紅葉を見物するときいて、二人で黒木賣の女に裝ひ、進藤が紅葉狩の最中、黒木賣の歌を歌ひながら近づいて、難なく仇討を遂げ、都へ歸つて昔の如く榮える。

【解説】　全く型にはまつたお家騒動物で、遺言を僞作し、繼母の御臺が惡家老と一緒になつて若君を殺し、實子の姫に家をつがせ、家老は婿となつて家を横領せんとする中、姫は陰謀に反對して兄妹別々に落ちる。家老は怒つて御臺を殺して家を乘取る。忠臣は追拂はれて一時窮迫するが、やがて若君を尋ね出して仇討を完うし、主家を回復するといふのであるが、本曲ではその忠臣が窮迫して石川五右衛門と名乘り、强盗殺人を行つて、遂にそれと知らず、落のびた姫まで殺し、捕はれて父子釜煎にされ、女房が若君を尋出して、仇討を果すといふ點が異つてをり、またそれが外題の出る所以でもあるのである。つまりお家騒動と石川五右衛門の生活を結びつけた點に目新しさがあつたのであらう。

【影響】　石川五右衛門を題材に取入れた作では、本曲は早い方で、紫影文庫藏内題『石川物語』といふ七行六十一丁本は本曲と同文であり、曲節付も同樣である。之についで正德二年十一月竹本座上演の近松作『傾城吉岡染』、元文二年七月豐竹座の並木宗輔作『釜淵双級巴』、前者の改作たる明和四年十月竹本座の『石川五右衛門一代噺』（當證軒作）等がある。

石川五右衛門を歌舞伎に入れたのは、初代並木五瓶作『金門五山桐』で、安永七年四月大阪小川吉太郎座で上演、之が江戸に入つたのが寛政十二年二月市村座上演の『樓門五三桐』である。この外に、天明二年五月大阪藤川座の『仁王門端歌雜錄』、寛政元年二月堀江座の『木下藤狹間合戰』、寛政七年三月江戸桐座の『時今廓花道』、寛政八年角座の『艶競石川染』、寛政十年七月江戸桐座の『大内山戀墓白浪』、享和元年正月角座の『けいせい忍逢淵』、

文化元年九月中座の『濱眞砂傳石川』、文政七年三月中村座の『館風扇白浪』、明治十二年八月久松座の『稚櫻眞砂兒』、明治十六年十一月市村座の『濱千鳥眞砂白浪』等がある。豊後節正本にも「石川物語釜入の段」と稱し、四段目を一冊にした七行本がある。

讀物としては延享元年刊の黑本に『石川五右衛門』といふ二冊物がある。

○井　筒（？）――河内通

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十七行十三丁半。挿繪は兩面三、片面二。初行に「井筒」、その下方に「正本」柱に「河内」とあり、井筒業平河内通に關係するものであることが察せられる。版元は終に「京二條通山本」と見えるから、九兵衛版であらう。題簽は後書である。或は「河内通」といふのが本曲の外題であつたかと思ふ。

【太夫・刊年】 共に記載なく、曲節付から見ると角太夫や出羽掾ものであるよりも、播磨掾か、加賀掾のものでもありさうだが、播磨掾には、寛文の末頃に『業平一代記』があり、一體で播磨は、その正本に曲節付をあまりつけなかつた（『忍四季揃』は別だが）から、本正本には非常に曲節付の多い點でも、そして各段の結びが頗る進歩してゐるのでも、これが播磨の正本ではないことが證明されるやうである。それから井上市郎太夫も、貞享の初頃に『業平一代記』を語つてをるが、『邦樂年表』義太夫節の部には、加賀掾が元祿初年頃に井筒白露兩女の戀物語『河内通』を語つてゐることを記してゐる。本曲は内容の點からも、加賀掾正本と同物ではなからうかと思はれる。

【形式・曲節付】 五段曲にて、各段首尾にそれ〴〵形式句がある。尤も曲尾が「難波の京、いまも大阪榮えて、いやよろづ世の中あん德太平民安く祝の物と夜みせも賑ひ給ひける」となつてゐるのは、京都本位に活動してゐた加賀掾がお世辭をいつたものと考へられないことはない。

殊に道行の處に曲節付が多く、道行の中で特に目立つてゐるものとしては、

アミトフシ、フシヲクリ、キンヲクリ、小ヲクリ、スエノ、ウフシ、ハルフシ、キンハルフシ

などが數へられる。そして各段の語り出しなどの曲節付から見ると、何となく加賀掾の正本かと思はれる趣が多い。

【曲尾風流の舞】 此曲として注意すべきは、曲尾に於て、第五段終に近く、欄外に「風流」と記されて、天和三年刊の『世繼曾我』に於けると同樣、下記の如く風流の舞が添けられてゐることである。恐らく此曲が、此頃の流行に從つたもので、同時代のものであらうと思はれる。

風流――「既にその日に成ぬれば在五中將なり平胴ほうべいしのせんしをうけ、いくわんたゞしくつくろひて、神前にさいはい有、天長地久の御いのりあらめてたやとおさまりて扨も風流の色重ね皆一樣にだてもやう地は紅ゐに八重櫻の花のかほばせ……かれうびんかのこゑをあげ君がよは千代にや千代にさゞれ石のいはまとなりてこけのむすまで〳〵日の本に猶光そふ春の日のどけきかげにあそぶてふ花にたはふれみたるゝは……」

【梗概】 第一　業平に白露といふ戀人がある。ところが、井筒の姫は業平にあこがれてゐる。業平のいとこ中納言忠興は井筒姫にあこがれ、之を手に入れようとして、業平を陷入れようとする。

第二　忠興の讒奏によりて、井筒はおあづけの身となり、業平は遠流となる。忠興は即ち侍女を通じて、幽閉されてゐる井筒を口說くのであるが、戀の敵たる忠興の名をきくだにいやだといふ。井筒の弟に多聞丸（十歳）と、八重

若丸(六歳)とがある。この二人が井筒の所へ遊びに來た時、忠興は八重若を井戸に投げ込み、井筒を脅して斬つけ戀を迫る。脅迫に遇つても從はない井筒は、遂に十七歳で死ぬ。多聞丸は乃ち姉と弟の敵として、忠興を討たんとする。父母の止めるに對して「多聞丸涙をさへ、いや申父母様、何忠興鬼神にても候まじ、某姉の敵なれば日本の地は申に及ばず、もろこしまでも尋ね行、討て本望とげ申さんと、云ひすてそばなる太刀おつとりかけ出」でるのである。子供には無謀な事として母がとめると「こは仰とも覺えぬものか、たとひ某をくるゝ共、すゝめ給はん道なるに、止め給ふはいかにぞや、よし許させ給はずば、腹かき切つて姉君の冥途の御供申さんと、太刀に手をかけ給ふ時、のり常(父)あはて押し止め、けなげなり多聞丸、いかに汝が心にまかせ、敵をねらひ討おゝせ、姉のけうやうに奉ぜよや、去とては持べき者は兄弟ぞ……」と父からいはれると、十歳の多聞丸は愈々敵討に出る。母は嘆く。

「井　筒」絵の絵巻　(東京帝大藏)

第三　ためし少くも、十歳にして敵討に出た多聞丸には、近藤兄弟が助太刀に從ふ。東國にて三人は忠興を見つけたが、戰つてゐる中に、多聞丸は足に傷づく。即ち近藤兄弟は追かけることも出來ず、一旦敵を逃すのである。

さて業平は武藏野にて、井筒の姿を見つける。——場面は夢幻的になる——焔が諸方にもえ、黑雲の中に井筒白露の影がほの見える。二人の姿が雲の中に消えると、業平は跡を追ふ。忽然髑髏をもつた骸骨のやうなものが現れる。天人が現れて別の髑髏を玉座に据えてをがむ。又天女が招くと、井筒と白露の姿が現れる。二人の女は忽ち「蛇形となり、飛かゝり飛ちがい、口より火焔を吐き出し、まき返しまきもどし、くひつきくひ合ふ」のである。嫉妬に攻められる二人の女の姿である。忽ち玉一つ落ちて來るのを業平がうけとると、不思議やそれが二つに割れて、井筒の姿が現れ、迷うてゐる中に戀の字となる。天人は之を見てさとすのである。

「井　筒」(東京帝大藏)

第四　白露は業平の後を追うて東に下る。そして隅田川につくまでの趣が道行となつてゐる。忠興は生きるに道なく、人商人になつてゐる。偶二人の女が賣られてゆく中、海に身を投じて逃れようとする。女達は浮木に取ついて流れてゐる間に、春日明神に祈願中の業平が小舟を寄せて二人の女を救ひ上げる。白露と侍女である。時に海上に鹿が現れ、色も妙なる姿となつて、雲間に輝き、金色の託宣をする。「千日雖曳注運不到邪見之家、重服爲深厚可趣慈悲之室」の字が輝く。そこへ女が逃げた、捕へた女を返せといつて忠興が來る。業平の臣藤太夫が忠興をねぢふせて

歸洛のよすがとする。

第五　多聞丸と近藤兄弟とは武藏野へつく。業平は引出物として、忠興を三人に與へる。多聞丸は見事に仇を討つ。

親王の御即位で業平は勅勘を許され、上洛する。やがて御即位のお祝として春日明神の前で、風流の舞があり、業平も舞人の白露も數に加へられる。

「君が代は千代に八千代に……苔のむすまで」と歌はれるのである。繪を見ると、女五人が業平の前で舞うてゐる。

【解說】第三段の夢幻の場には機巧や糸操が盛に用ひられ、第四段には道行があつた上に、曲尾に風流の舞が加へられてゐることは、天和三年の『世繼曾我』に風流の舞が加へられてゐることゝ、何かの緣がありさうに思はれる。これが彼に習つたのかとも思はれる。かくて愈々加賀掾の語物らしく、又近松物かとの疑も起る。

その外第二段に於て、十歲の多聞丸をして、仇討を決行させるあたりは、時代の道德の上にどんなにか感化を及ぼしたことだらうし、姉と弟の死は、非常にあはれげに描かれてゐることも、如何に作品をして情味豐かなものたらしめたかを思はしめ、第三段の夢幻的な場は、操淨瑠璃にふさはしい場面として珍とするに足ると思ふ。

いづれにしても此作品が單に嫉妬や戀愛を描いたものでなく、複雜な筋の仇討物としたところに、作者の勞はあつたことだらう。

【出處・原據】『伊勢物語』、謠曲『井筒』及び延寶八九年頃の淨曲『伊勢物語』にも負ふ所あり、江戸土佐少掾の『吾妻業平色小町』とも關係がある。託宣の用ひ方は、『三社託宣由來』に先例がある。又風流の舞を用ひた點は、既記の如く『世繼曾我』にならつたものである。

【影響】此作が播磨の『業平一代記』でないとすれば、それとどんな關係に立つかがわかると面白いことだが、同曲を未見故何ともいへぬ。享保四年の紀海音作、豐竹座上演の『業平昔物語』は此曲の影響を受けてゐるものであるが、近松の作である『井筒業平河內通』は結構の點からは此曲と全く趣を異にしてゐる。元祿七年都萬太夫座興行、富永平兵衛作『業平河內通』や、安永四年四月大阪嵐座興行、奈川龜助作の『新伊勢物語』との關係もゑしい。

○なごやさんざ六條がよひ

【體裁】半紙形十七行、十六丁。柱に「なごや」とあり。兩面繪五、片面繪一あり。版元不明。

【太夫・刊年】共に不明。ただ挿繪の中の提灯に、黑地の菱形の中に、かたばみの紋がついてゐる。江戸土佐掾のは、劍かたばみの紋ではあり、本曲が六段でなくて五段物であるから、上方太夫の正本と思はれる。內容から元祿頃のものか。曲節付からは角太夫物か。

【形式・曲節付】五段曲にて、各段の首尾には形式句がある。

第一「さても其後それしきよくはなんによのたい、よくつゝしむべきは此みちなり、こゝに本朝百王のすゑ文祿年中の頃ゆゝよ、ことにときめく都人からそうもすうけうも老にやく色にひかされて行まどうは六條の遊女町ぞはんじやうなれ……」

曲節付には次の如きものがある。

序コトバ、イロ、中、下イロオロシ、ウ、ユリ引フシ、ハツミ、カカリ、イサミハツミ、イロフシ、イロオクリ、マヒヅメフシ、地カカリ、ツヨク、ツキユリ、イロツナキフシ、シツメ、地イロ、ツキ三重上、ハルオトシ、七ツユリ、小ウタ、ドウクフシ、オクリ引下、地、カカリセメ、カントメ、下オン、ハツミフシ、下、本ユリコトバ、カンイロ、ウレヒフシ、ウレヒ上、ハルイロ、中三重、ユリ引地、イロコトバ、クルフシ、ハル、シツムル中フシ、入、下ユリ、本ユリ地、地ウ、カン引下持ハル、レイセイフシ、地オツ、カカリ持、オスハル、ウカントメ、トメセメ、トメオトシ、三重。

【梗概】第一　伏見に居住する宮仕の武士などや三左衛門尉すけひらの一子山三春平は、業平の若盛りもこの男にはかなふまいと言はれる美男であつた。同じ所に、富有な浪人不破だうけんといふものが居り、其子に萬左衛門むね國とて好色のゑせものがあつた。此二人は常に連立つて、六條の色町に通ひ、山三は葛城と二世を契る仲であり、万左衛門むね國も空蟬といふのに執心であつた。

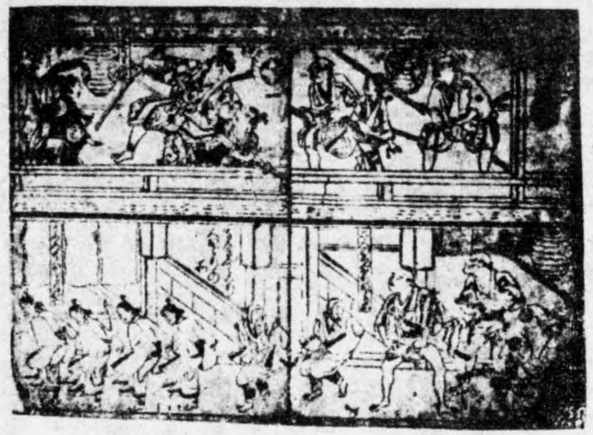
今日も兩人は六條の町へ行く途中、共に語合ふ北野の社人梅津のかもんに出會ひ、一同はゑびすやに入り、そこの座敷で遊女の道中を見物する。（こゝに遊女の容姿などについての叙述がある）やがて酒宴が開かれる。その最中に山三の宿所から迎の手紙が來る。山三は宮仕の身はつらいとて後に心を殘しつゝ歸る。葛城は山三が歸つたので、座敷にゐても詮ないと、一間に引込んで、山三の事を思つてゐる。

その時、ゑびすやの主人與藤次が座敷へ來て、不破に、西國の者が明日は國へ歸るのだから、どうぞ空蟬を貰つてくれ、それが出來なければ一寸の間かりたいとの事だから、了簡して下されといふ。万左衛門は、亭主のたまの無心だからと、思切つて承諾し、空蟬は與藤次と共に出てゆく。

元來万左衛門は空蟬に逢ひながら、葛城にも心をかけ、首尾もあらばと狙つて居たが、今日こそ良い機會と、葛城がゐる部屋に入つて行き、君が山三を思ふほど山三はそなたを思つてはゐないだの、などやは果報者だの、怨めしの結ぶの神だのと言つて、葛城を口説く。葛城は「御心だに誠の道にかない給はゞ祈らずとても結の神の御ちかひいかでかおろかに候らん」といふと、万左衛門は大に喜んで「この上は仰ならば二つなき此の首かき落して參らせん、必ず今のお言葉いつはりにて候はぬか」と、早や寄添うので、葛城は吃驚して、戯れだと思つたから、あゝ言つたのだが、眞實にして居られるのか、「始て交す新枕ならべし人の朋友にも見へ參らせぬは遊女の習ひ、ましてや妾と春平の仲は申すに及ばず御存じの事、いやしき流の身なれども心の底は清きぞや、さのみにあなどり給ふな、はや〳〵そなたへ出たまへ」とつき出す。万左衛門は、座興にもせよ一旦我に從ふと言つたから、心の内を打明けたのだ、といつて出ない。そこで葛城は夫れ程までに思つて呉れるなら何とか思案しようと、しみ〴〵した風で側へ寄り、いきなり彼の脇指を拔取り、先刻お望みならば首でもやると言つたのを、よも忘れはすまい、首を貰つてから、御心に從はうとて斬つてかゝるので、万左衛門は表へ遁げ出す。

第二　兩人が遊女衒に忍んで通ふことが世間に知れ渡つたので、山三の父すけひらは或夜ひそかに不破の父だうけんを招いて相談し、今宵も二人ながら出かけて居るから、町端れで待受けて引捕へ、充分意見して遊女狂ひを止めさせようとする。萬左衛門は葛城に道ならぬ事をして以來、親しかつた山三との間も遠くなり、且つあの事が世人の耳に傳はつたのは、山三が葛城との深い仲をわざと人々に吹聽した故で、我が戀の叶はぬのも彼が居る爲だから斬つて

棄てようと、一木陰にかくれて山三の歸りを待つ。夜更けて彼が通り掛るや斷寄つて渡り合ふ。其處へ兩人の親が飛出して止める。山三は構はず斬かけ、萬左衛門は股を斬られて打倒れる。此態を見るやだうけんは、直ぐ萬左衛門を下人に負はせて舘へ歸らせ、すけひらに對して從來の誼も何も今は之まで、一歩も逃さじと斬つてかゝる。すけひらは之を制するが聞かない。山三は怒つてだうけんに斬かゝる。兩者の下人共も斬合をする。すけひらはだうけんの爲に二太刀三太刀斬られる。山三は之を見るや奮然としてだうけんに斬掛り、遂に其首を打落す。山三は父がこのやうな事になつたのも、我ゆゑだ勿體なやと言つてなげく。



「名古屋山三六條通」　終の圖

第三　山三の父は負傷が因で死ぬ。乃ち萬左衛門を討つて孝養しようと思ふが、其居所が分らない。其上今度の事が主君の耳に入つて、所領を取上げられる。山三は今は生甲斐のない身だからと自害しようとするが、葛城とは言交した言葉もあるゆゑ、事の仔細を知らせると、葛城が訪ねて來て色々かき口説く。二人は北野の七本松觀音寺で死なうといふ事になる。(こゝに少し道行がある)愈々七本松に着いていさ死なうといふ處へ、北野の社人梅津が通りかゝつて、二人を見つけて押止める。そして山三を梅津の伯父なる奥州會津の領主しのぶの大膳もとかねへ推擧する。葛城は一先づ主人の處へ歸ることゝなる。

第四　葛城は主人與藤次の許へ歸つたが、明暮れ山三の事ばかり思ひつめて病氣になる。すると與藤次は、病みほうけて、損の上に損をかける憎い女、今どこかへ捨てたら忽ち飢死するが、それでも全快すれば、又あの殿はいやこの人には出ぬなどゝ言ふのだらう、どうだ、返答しろと荒々しく言ふ。葛城は病氣だからといつて賴み、何事も敎かぬといふ誓紙を書くことも拒むので、與藤次は怒つて葛城を駕籠に乘せ、夜の明けぬ間に大阪邊の街道へ棄てさせる。日頃召使つてゐたはぎといふ女が後を慕つて尋ねて來る。そこへ會津から葛城を迎へのため京へ上る山三が通り掛つて二人に會ふ。葛城から一切の事情をきいて、山三は二人を乘物にのせて京へ急ぐ。山三は第一に北野の梅津の舘へ行つて御禮を述べ、それから葛城を連れて與藤次の許へ赴く。彼等夫婦は歡待する。山三は、既に葛城とは言ひ交してある故、是非とも請出して下りたい望で、わざ〳〵來たのだが、葛城は何處に居るかと訊ねる。與藤次はハツと思ひ「南無三寶葛城を捨てずは大分の金銀にかへんものをと後悔すれどかひもなく」、詮方なさにふびんや葛城は殿に別れてから、思ひ惱んだ擧句、病氣になり、心盡しの効もなく、去る廿日の夜に空しくなつたが、臨終の時まで御身の事を戀憧れてゐた、此世で今の御言葉を聞いたら、どんなにか喜んだ事であらう、心にまかせぬ浮世だ、と空泣をする。山三は可笑しさを耐へてゐたが、遂に自分が京へ上る道で女を召連れて來た、葛城の顏に少し似てゐると言つて二人を此處へ呼ぶ。與藤次は赤面してうつむく。葛城は取なすやうに、此度君に逢へたのも、此頃まで與藤次が情をかけて呉れたからだ、何で御恩を忘れようぞといふ。山三は夫婦の者に種々引出物を贈る。次いで山三は、聞けば仇敵萬左衛門が、此家の柏木といふ遊女の許へ通ふとの事だから、手引をして貰ひたいと賴む。與藤次は快く承知し、奥座敷で仇敵討の打合をする。

第五　萬左衛門は山三が都へ歸つたことは夢にも知らず、また六條の町に通ひ、與藤次の店の柘木といふ遊女に馴染み、今日もゑびすやへ行つたが、どうも山三の行衛が心配なので、遊ぶにも二階と限り、他の者は一人も上げず、常に用心をしてゐる。山三は豫て樣子を知つてゐるので、遊女は皆二階座敷へやり、さま〴〵に酒を强ひさせ、下の座敷に會津客風をして、遊女と一緒に尺八、ひとよぎり、胡弓、三味線、琴など彈き鳴してゐる。二階の萬左衛門は之を聞いて、天晴藝者達の集りと見え、なか〳〵面白い事だといふと、柏木も、今日の下座敷の客は、皆他國の人で藝者が好きだから、妓達も男等も皆藝のある人ばかりであるし、後には可愛らしい小坊主や禿が一緒に交つて踊るといふ事だと話す。萬左衛門は之を聞くと、それは珍重の至りだ、しかも多勢の妓達を此處で見物すれば、此上もない、早く始めればよいと言ふ。もと〳〵仕組んだ風流事とて、その言葉も終らぬ內に、浮々とした小坊主が先に飛出すと、後から禿が振袖をふり〳〵足拍子をそろへて踊る。用心深い萬左衛門もつい前後を忘れて入る。その中に遂に山三の爲に討たれてしまふ。

【解說】一種の仇討ではあるが、まことに筋の通らぬ仇討である。雙方共に爭の最中に、親は死んだのだから、理窟からいへば、親の仇討であるべきではないか、處が山三は自分の親が死ぬことになつたのは萬左の爲だ、自分が窮迫したり戀人葛城が苦められたりしたのも、萬左故だと考へたものか、兎に角萬左が我戀人葛城に橫戀慕したりしてゐることなどが癪にさはつて、萬左を討つといふのだ。要するに當時の色道の間に於ける頽廢的な狀態を描いたもので、寧ろその方が主になり、當時のさうした世界の姿を見得る上に於て文化史的に意義をもつてゐる。最初に於て、遊女の道中の模樣を見せたり、大踊を見せたりする處が花々しい見せ場である。

【出處・原據】土佐少掾の語物である『名古屋山三郎』を改作したものと思はれる。從つて影響その他についても、その項（四五四頁）にゆづる。最初に文祿中の事とせるは六條遊女町の起源をさすのか。

○すみた川

土佐掾正本

【體裁】角太夫節の『隅田川』には少くとも左の三種がある。

一　東洋文庫藏本。題簽は表紙の中央にあり、それに「すみた川」とあつて、下に「山本土佐掾直傳」とある。けれど初行には、太夫名はない。

本文の前に前附があつて、その表に、次の文がある。

むかし〳〵勅書懸墨の敎調ばなしあるひは源平の軍物語に節を付られし山本氏者一曲を機木になして土佐掾直の正本と號して世に傳へし數百の卷々も寶永のけふりとなりわつかに殘りしも、宇治の才とかはり、竹本に紛れしを頃日尋出して、此道に遊び給ふ人々の求め給ふ事を希ものならし

山本角太夫正本賣所　　寺町竹屋町下ル町　鶴屋喜右衛門
三條通寺町東入町　正本屋吉兵衛

そして此前附の裏には、次の如き發行目錄があげてある。

善光寺　蓬萊山　角田川　小袖うり　ゑぼし折
信田妻　百合若　鉢の木　七小町　石山寺

融通念佛　四十八願記　門出八しま　大職冠　七萬日
あこき平次　熊井太郎　彼岸中日　相生曾我　粟しま
豊勝後日　山桝太夫　酒天童子　鎌倉袖日記

正本板元　舊章軒　山本九兵衛

右の中「山桝太夫」以下の三つは後人が書加へたものである。

此東洋文庫本は八行四十四丁の稽古本にて、奥附の中央に「山本角太夫」とあり、その次に「京二條通寺町西へ入町、正本屋山本九兵衛板」とある。かくして前附と奥附とで版元の異るは何故であらうか。

二　古報文庫藏本。これは普通の角太夫正本の如く、十行本にて、二十八丁より成り、初行に山本土佐掾正本とあるが、版元は不明である。『新群書類從』第五所收の山本土佐掾正本がこれと同物かと思はれる。

三　前島春三氏藏本。これは第二の如く、十行本だが、十九丁にて、『角田川』と初行にあり、題簽には『すみた川』、其下に山本土佐掾直傳とあつて、曲節付は全く角太夫節にて、各段首に形式句あり、『新群書類從』本と大體同文である。

【太夫・刊年】東洋文庫本を見ると、題簽には土佐掾直傳とあり、前附には、版木が寶永の火災で燒けたから出すなどとあるから、寶永か正德頃の版かと思はれるが、奥附を見ると、原本その儘に刷られたと見えて、山本角太夫の名が出てゐる。角太夫の名が原本にあつたものと見ると、延寶も早い頃のものかと思れるが、それには多少の疑がある。

古報文庫本の如く、土佐掾正本とすると、元祿になつてからのもので、次の加賀掾正本は、これを流用したものと思はれる。江戸版は勿論之を抄略したものである。

【形式・曲節付】東洋文庫本も古報文庫本も、五段にて、何れも初段から形式句が除かれてゐる所から見ると、延寶後のものらしく、それでも各段尾には、何れも形式句が殘されてゐる。

土佐掾正本とあるものゝ曲節付は、普通の角太夫節正本に於けると異り、濃厚ではない。むしろ曲首に於ける樣子は普通のそれと大に變つてゐる。

然し土佐掾正本と加賀掾正本とでは、文章も曲節付も殆ど同樣である。曲首も兩正本同一である。

○隅田川　加賀掾正本

【體裁】古報文庫藏本。半紙形大字八行四十五丁。奥に二條通寺町西へ入町山本九兵衛刊。

【太夫・刊年】奥附に加賀掾とあつて、其捺印もあれど、刊記はない。

【形式・曲節付】五段曲、各段首は初段にも形式句は失はれてゐるが、各段尾には形式句が殘つてゐる。

第一段「夫身を觀れば岸のひたひに根をはられたる草、命を論ずれば江の邊につながざる船、のりえて彼岸にいたらん事をねがへ、爰に堀川院の御宇かとよ、都白河に……」

曲節付中主なるものを見ると、

ヲロシ、地中、地色、地ハル、ユエテ、三重、フシ、上、中ウ、下、ウ、キン、詞、ヲクリ、詰、フシヲクリ、

小ヲクリ、哥、ナヲス、長地、キンヲクリ、トル、ワキ、太夫、ツレ、子、同

以上は『新群書類從』所收、土佐掾正本の上に見るのと、大體同樣の曲節付である點から見ても、他の場合に於けると同樣、同一太夫の正本を二人の太夫の、別々のものである如き顏をして、版元が出してゐるものと思はれる。

【土佐掾正本との差】 加賀掾正本と土佐掾正本とは大體同文で、極めて多少の字句の差があるだけである。兩者異る點で眼についたつは、第二段終の文が、加賀本では「世の中の物のあはれ」以下の「はこれなり、たゞこれ成はとかんぜぬものこそなかりけれ」が、土佐本では「のしこくならめとひたさぬ袖こそなかりけれ」となつてゐるだけである。

加賀掾正本　「隅田川」　初丁と奥丁

【梗概】 土佐掾正本と加賀掾正本とは、既記の如く、殆ど同文であるが、終に記す江戸六段本とは、段切の樣子も、節の差も可なりあるので、爰に極めて大略を記すことにする。然し大筋は六段本の一と大差ないものである。

第一　松若が天狗にさらはれたのを苦にして父少將が死ぬと、舍弟松井源五定景は、陰謀をもち出して反對され、粟津六郎俊兼を攻める。俊兼は先づ御臺を、ついで若君を酉坂本へ落し、敵に向つては若君自害と披露し、自分も自

害と見せかけてそら腹を切り、屋の棟づたひに落ちてゆく。

第二　梅若丸は大津の浦についた時、人買喜藤次の餌になつてしまふ。粟津六郎はそのあとで、北の方に遇ふが梅若丸の行衛がわからぬので、互に悲しみながら搜しに出る。

梅若は習はぬ旅をさせられて、武藏の隅田川につき、虐待されて死ぬ。死ぬにのぞみて素性をあかし、所の人々によつて大念佛を催して弔はれる。

北の方は梅若が人買の手によつて東へ下つたときゝ、戀しさのあまり狂氣となり、たづねまはる。

狂女道行　「たまかづら、かゝれとてこそ生れけめ、ことはり知らぬ我涙……」（段尾に及ぶが、箱根山、大磯あたりのことを述べて、まだ隅田川に着いたとはない。）

第三　粟津六郎は梅若の行衛を到る處たづね、箱根峠について、松の根に一睡すると、去年の春松若丸を誘ふて羽にのせ、大唐四百餘州まで見せ廻つて、今歸つた比叡山の天狗橫河坊は、通力にて六郎を見つけ、下りて山伏姿となり、散々に力の上で六郎をなぶつた後、汝がさがす梅若丸は隅田川邊にて死に、母はそれを慕ふて下つたと敎へ、その上吉田の家をつがせよといつて松若を引渡す。

やがて二人で東にいそぐ途中、藤澤にて、梅若の重代をさしてゐる男を見つけ、巧に梅若殺しの人買なることを白狀させて、仇を討つ。

第四　隅田川のほとりでは、三月十五日梅若の忌日だとて、在所の人が弔ふてゐる。

梅若の母は狂ひ廻りて此處へつく。そして出舟に乘つて、去年三月十五日に、白河の人商人にいぢめられて、奥へ

ずる途中、死んだ少年の爲の大念佛が今催される事を渡守から聞く。そして狂女の母はやがて墓に詣でゝ廻向すると、梅若の姿が柳の蔭から現の如く現れる。母が嬉しと取つかうとすると姿は消える。母は今一度姿を見たしと歎く。

第五　母は悲の果に、川に身を沈めんとする時、粟津六郎は松若をつれて來る。母は大に喜びながら憶ひ出に泣く。やがて妙義山北法寺の源流上人を招いて、隅田川の邊にて追善を營む。法事の終る頃梅若の亡魂はまた現れ、往生せんとしても、母の執着が強くて中有に迷ふから、歎をひるがへして菩提心を起し、跡を弔ひくれといふ。やがて西方より魔風來り、黒雲の中から天狗横河坊が現れ、上洛出世の門出祝にとて、松井源五定景を目の前へ落す。松若は太刀をぬいて刺し、兄梅若への孝養にする。やがて母諸共に上洛し、跡目の參内して、四位の侍從となる。

【解說】一種のお家騷動物にて、それに我子をさがす母の物狂を取り合せたものである。其間に天狗、人買、班女物語、隅田川物語、忠臣物語などが綯ひ交ぜられ、一種の悲哀味に富んだ、而も最後には諦めを說いて佛敎說話化たらしめた物語である。

【原據】謠曲『班女』と『隅田川』とをつなぎ合せ、主として後者を中心として、お家騷動の樣式にあてはめて構想したもので、土佐掾加賀掾本乃至近松の『雙生隅田川』等では、女主人公は眞の狂女となつて子をさがすやうに仕組まれてゐるが、江戸版では謠曲『班女』風に、女主人公は佯狂として、子をさがすやうに仕組まれてゐる所を注目すべきである。

そしてまた謠曲に於ては、此二つの物語は、宛ながら前後の二篇をなすが如くに、別々になつてをり、假名草子『班女物語』でも、女主人公は、其別名の『花子物語』が示す如く、まだ謠曲其儘の一種の戀愛的物狂に過ぎないのが、淨瑠璃にては、我子を失つての物狂にまで進められたので、自然一般の興味と同情を引いて、繰返して歌舞伎其他で上演されたものと思はれる。

【影響】享保五年八月竹本座上演の近松作『雙生隅田川』は、上方版『隅田川』とは、大體に其仕組を等しくしてゐるが、梅若を人買惣太が殺すことにし、其惣太が實は吉田家の舊臣淡路七郎であるとし、梅若の素性を知ると悔悟自殺せしめ、後には七郎の化現が松若を携へ來つて、母に引渡すといふやうに仕組まれてゐる。之等の工夫が近松によつて案出されてゐる所を見、それが片鱗だも土佐や加賀の作品に影響してゐない所から考へると、近松の此作よりか、土佐や加賀の作の方が前のものであると思はれる。蓋し天狗が一子をさらつて起つた事件を、再び天狗が他の一子を報ひて事件を結ぶとした事に對する、土佐や加賀の仕組に滿足せずして、近松が今一歩現實的な解決を求めようとして、改作したものと思はれるからである。

土佐掾の『隅田川』や近松の『雙生隅田川』は、引續き色々な隅田川淨瑠璃の改作を生み出すべきであつたに、その後有名なものもなければ、殆ど淨瑠璃を主とする方面に、改作を見ないやうであるが、それは此隅田川物語が、歌舞伎の方面に於て、あまりに發達し過ぎた爲ではなからうか。

延寶頃か、少くも元祿初年には、既て現れてゐたのではないかと思はれる山本角太夫の『隅田川』の影響を受けただらう江戸歌舞伎に於ては、既て近松の作の現れる以前に、元祿十四年中村座上演、市川團十郎作の『出世隅田川』を最初として、元祿十五年山村座の『紅梅隅田川』、寶永元年山村座の『けいせい隅田川』、寶永二年市村座の『早

唉隅田川』、寶永五年市村座の『愛敬隅田川』、寶永七年森田座の『藪入隅田川』等が上演されてゐるのである。

かくして後に、近松の『雙生隅田川』は出現を見るに至つたのであるが、其後浮瑠璃に於ては、これぞといふ作品の出現を見ず、歌舞伎の方面に其興味をまかせてゐる間に、明和二年になつて、『江戸名所都鳥追』に、法界坊が飛込むに及び、漸く其仕組は複雜となり、『隅田川續偈』（天明四年大阪蘆川座上演）に至つて、本爽の『隅田川』は、法界坊に其株を奪はれたが如き觀を呈するに至つた。けれど一方に於て、純粹の隅田川物語は長唄の『賤機帯』や『角田川』、清元の『角田川』、河東節の『隅田川舟の中』などとして傳統を存してゐる。

此他に歌舞伎の方向や讀物の方面に於ても、自然隅田川物語は隨分發達したのであるが、今一々列記の煩を省くことにする。

○隅　田　川（江戸版）

【種類】（一）京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫藏本。小形十六行十丁、近藤助五郎清春畫の兩面繪三、江戸通油町藤田版。

（二）同じ古梓堂文庫本。小形十七行十丁、內題も題簽もなく柱に「すみた川」とあり、兩面繪六、うろこがたや孫兵衛版。

（三）岩瀨文庫藏本。題簽も內題もなく、柱に「すみた川」とあり、小形より少し大きい形、十七行十丁、うろこかたや孫兵衛版、挿繪兩面三。（二）と（三）とは大體同樣であるが、繪の數が異る。

【太夫・刊年】何れも太夫名なく、（一）は奥に享保十年正月刊とあり、（二）も（三）も共に「正月吉日」とあるだけで年號は削られてゐる。

【形式】凡て六段曲、（一）の二段は「其後」、三段と四段は「是は扨置」、五段は「いたはしや」、六段は「去程に」で始まり、各段尾には皆形式句がある。（二）と（三）とは、同文にて、梗概は次に示す如くである。

三種とも大體同文で、大序の文など、皆同樣であるが、（一）だけは、他の二つと比べて、文章が少し異ることは、（一）の三段目の首が「これは扨置としかぬにいましめのなはをかけ」となつてをり、六段目の結尾が

「梅若殿の御ぼだい母うへのきやうやうよきにとぶらひ給ひけるめで度共中々申斗はなかりけり」

で終つてゐるのでも知られる。

けれども大序は三種とも同一で、（二）（三）の曲尾も同樣である。

【岩瀨本】初段「つら〳〵おもんみるに本朝七十三世堀川の院の御宇かとよみやこ北白川に吉田の少將これさたとてかうけ一人おはします、然るにこれさた內には五かいをたもちほかにはじんぎを本としてしいかくわんけん七げい六のふくらからす、其名のほまれ世にたかし……」

【梗概】大體の筋は以上三種皆同一であり、文章も大凡同樣であるが、次の梗概は岩瀨文庫本による。

初段　吉田の少將は七藝六能に通じ、二子あり、梅若丸（十一歳）松若丸（九歳）といふ。少將は世の有樣を感じて御臺と圖つて、松若を出家させようとする。乃ち叡山に送りて、日行阿闍梨の弟子とすると、其學すばらしく進む。ところが一日天狗が來て松若をつかんで空に消える。少將はその事を知ると歎き悲み、風の心地はいよ〳〵烈し

くて、遂に舎弟松井の源五さたかけ等を招いて、梅若が十五歳にならは參内させて後をつがせ、守立てよと遺言して死ぬ。

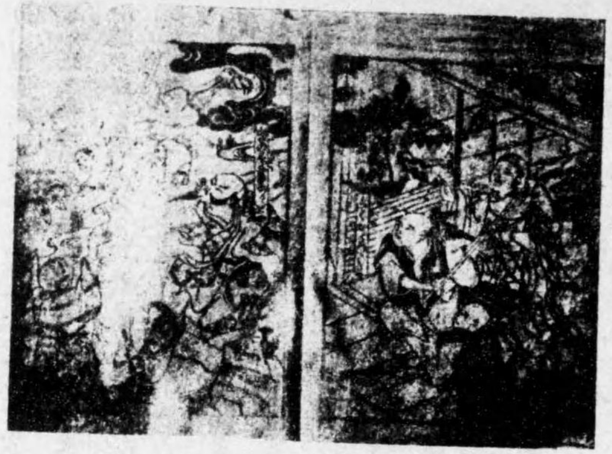
「隅田川」（京都帝大藏）

二段目　梅若今は十五歳になる。松井の源五は梅若に吉田の家をつがせんより、自分がついで榮華に暮さうとする。乃ち松若の郎等山田三郎を近付け、陰謀を語り、更に梅若の郎等粟津の六郎としかぬを手に入れようとして招く。六郎は陰謀をきくと、怒つて斬つてかゝり、御臺を坂本に落して、夜討の來るを待つてゐる。間もなく戰爭になつて、粟津六郎は遂に敵に捕へられる。

三段目　源五さだかげは六郎の剛直なるを見ると、怒つて首を刎ね、首を獄門にかけて、惡心を企む故斬つたと記すと、首は目を開いて、三年の內に報ひるといつて空に上る。

梅若は山田三郎年光につれられ、逃れて山路に迷ふ中、奥州の人商人が來り、梅若を引立てゝ下る。年光は驚いて、梅若をさがすべく諸國修行に出る。

梅若は人買に苦められ、悲嘆の中に隅田川へつく。人買は散々に打擲して、歩むにたへぬ梅若をすてゝ東へ下る。あとにて梅若は道行く人に向つて自分の來歴を語り、「梅若空しく成ならば、道のほとりにつかをつき、しるしに柳をうへ給ひ、たかふだたてゝ給はれや、あゝなつかしの母上樣と、是をさいごの言葉にて年は十五、三月十五日にあしたの露ときへ給ふ。」



「隅田川」（岩瀨文庫藏）

四段目　梅若が死ぬと在所の人々は遺言通りにして弔ふ。「三月十五日には諸人多く集るとかや、こゝにしやけんをとゞめしはみたい所の御やどどんの太夫でとゝめたりかれはとしかぬがおぢなるが……」、元來これ定の恩を蒙りながら、御臺を追拂つてしまふ。御臺は都にのぼり、到る處梅若をたづね廻り、大津三井寺にて、子供は人買に買はれて、東へつれゆかれたときゝ泣きくどく。「われはあまたもなでしこの二人の子共を行方しらず見うしない母はまた何となるべきぞ……みづから年よりたりけれと、いとなまめいたる事なれば、狂女になつて出んとて、とある所にて旅のしやうそくなされける、いたはしやみたい所は、はやしやうそくをなされける、かみを四方にふりみだしさゝのはにしてきりかけてふりかたけ、しんによの月はくもらねど狂女とや人のいふらん……」

（こゝに東下りの道行がある）――「八重一重はや九重を立出て四條五てうのはしのうへ……むさし下ふさのさかいなるすみだ川につき給ふ、こゝやかしこにたゝすみ給ふみたい所の御有樣はかなかりとも中々申斗はなかりけれ」

五段目　母の御臺は隅田川について、舟を見つけて、「なふ舟人みづからをも舟に乘せてたひ給へ、舟人きいて言ばをきけは都人すがたを見れは狂人なりおもしろくくるはれよ」、さなくは舟にのせぬといふ。やがて狂女は舟にのり、見ると、數多の人が岸の木の下にて大念佛を行つてゐる。それについて尋ねると、舟人はいはれを語る。乃ち梅若の死を語るのである。そして狂女の歎をきいて、今更の如く同情する。やがて狂女が念佛を唱へると、柳の蔭より梅若の姿が現つの如く現れ、狂女が抱きつかんとすれば姿をけす。狂女が盛になけく時、僧が出てさとす。狂女は諦めて落髮して、めうき比丘尼と呼び、あさちか原に庵を結んで弔ふが、やがて鏡の池に身を投げて死ぬ。

六段目　あはづの三郎年光は四國九國を尋ね、引かへして大津の浦を通ると、山田三郎が小鳥狩をしてゐる。乃ち天の與へと首を打つと、山伏が一人來て年光をつかんで空に飛び、相模國大山不動にておろす。そして山伏の教に從つて神に祈請してゐると、そこへ天狗が、松若をつれて來て、梅若の最後、母の末路を物語る。松若はやがて日行あじやりを賴んで參內して、これまでの一々を物語り、兵五百を賜はつて松井の源五定景を打ち、領所を頂いて、兄梅若のぼだいを弔ふ。「梅若殿の御ぼたいよきにとふらひ給ひつゝかすのやかたを立ならへゐいくわにさかへおはしますめてたき共中〳〵申斗はなかりけれ」。

【原據・影響】凡て加賀掾正本の項にまとめた。

○聖　德　太　子（？）

【證裁】紫蘭文庫藏本。外題も內題もない零本にて、柱に唯「太子」とのみあり、內容によつて上記假外題の如きものと察せられる。半紙形よりやゝ幅廣の十八行細字本にて、十七の丁附があるから少くも十八丁はあつたと察せられる。繪は半面もの七、兩面もの一だけ殘つてゐるが、もつとあつたかと思はれる。守屋の顏など公平風ではあるが、人物はむしろ小さい方である。

【太夫・刊年】共に明かではないが、延寶から元祿頃のものかと思ふ。語り出しや其他の曲節付から想像すると、角太夫節の正本かと考へられる。

蓋し版式、挿繪などから見ると、藤九郎版の家藏『あはしま大明神雛祭由來』や東大藏『高砂』などゝ同樣の版である。

【形式・曲節付】五段曲にて各段首尾に形式句があり、曲節付は左の如く頗る多い。

詞、地、ハルフシ、地セメ、イロフシ、ウク、ハルヲトシ、ヲクリ、地カヽリ、イロ詞、ウレヒフシ、キホヒ三重、ヲクリ三重、ハルカヽリフシ、ツキユリ、ヒロヒ、シツメ、カン色詞、モツ、カヽリセメ、キホヒ、イキコミ、スカス、引取三重、カンフシ、カンイロフシ、中三重、ウタカヽリ、イロ引キンカハリ、地ハヤク、下、カンクルフシ、カハリ七ツオリ、ユリフシ、カヽリセメフシ、カントメフシ、地キン

【梗概】第一（最初の方は欠落してゐるが、繪を見ると）聖德太子を中心として、あとみのいちい、てうしまる、その他の諸卿が集つて物部守屋討伐を評定してゐる。最後に太子に向つて、佛法では殺生を禁ずるといふに、戰爭は罪惡にあらずやと尋ねると、一人の惡を滅して、萬人を救ふが爲たといつて、身を犧牲にして、佛法を起さんとする太子は、直ちに守屋討伐の用意を命ぜられる。之を聞くと守屋は、一子ゆげの大臣弟物部のこむらじ、執權きかみの

源内を集めて評定する。一族同心七生まで此國のあだをなさんと、こむらじが答へるので、守屋は喜んで、一族朋友を招いて強制的に連判を求める。中にかしはでの金吾がゐない。守屋は一同を歸したあとで、金吾夫婦を招いて「それ日本は神國にて神のつくり給ふ國なる故、我朝の風俗專ら神道を以て國の政とす、然るに聖德太子始めて佛法といふゑせ事を取立給ふゆへしんかいのみたまれたまひ、國にあく病起り、萬民なやみ申ゆへ、某臣たる道を立たつてかんけん申すを、却つて御ふくみにて此比は當家を亡ぼさんとの御企」、乃ち近親を招いて今連判を求めたから、金吾にも之に加はれといふ。處が金吾は案に相違して「まづあの聖德太子を何人と思召ぞ、忝くも觀音ぼさつ、日の本のしゆじやうさいどのためかりに……身をけんじ給ふ事かくれなし」といつて、斷乎として之に反對する。守屋乃ち怒つて、金吾夫婦が連れて來た姫を殺さんとするので、一旦僞つて連判に加はり、守屋の心を和げ、妻子を歸した後、改めて憤然として暴擧に反對し、遂に嘲罵の中に殺される。

守屋はやがて、代々の知行所たる河內木のもとの庄に、要害をかまへ、稻を集めて稻村城と呼び、三千餘騎をもつて太子軍を待つ。

太子軍では、蘇我いもこ、はだの川かつ、あとみの一ゐを前後として、二百五十騎で攻る。處が多勢に無勢で、太子の側には、てうし丸一人となり、太子は已むなく逃げ出し給ふと、守屋は追かけ來る中、太子は椋の木を見つけ、「佛法我國に廣まるべくは非情なりとも我を助けよ」との給ふと、むくの木俄にさつと開けて太子を隱す。やがて敵が去つた後にて、太子は祈念を凝し、駒に一鞭をあて給ふと、てうし丸諸共に、忽ち虛空に上り給ふ。駒は神力によつて電雷の如く空をかける。（段末欠落不明）

「聖德太子」　第七圖と第八圖　（紫關文庫藏）

第二（序のあたり欠落）ある時、太子は芹をつみて母に孝行つくす姫をみつけ、感心して心動き、母の菴をたづねて、それが金吾の遺兒の姫と母なるを知り、求めて妃となし給ふ。そして姫を芹摘の后と仰せられる。暫くして太子は再び守屋を滅さんとして都に上る途中、神通力のあたか坂本の二大臣を見出し、其他以前の大臣等數多集來るや、守屋方を襲はれると、守屋は既に亡きものと思つた太子の攻擊に驚きあはてる。やがて太子が「佛法ごち四天王のかうぶく自在の矢」を放たれると、矢は稻村が城を七へんまはり、天地四方震動し、守屋の胸板に立つ。守屋が仆れると、川かつが飛んで行つて首を打つ。と、白色の玉が飛出して、忽ち二つに割れ、如我昔所願今者已滿足一切衆生皆令入佛道と金色の文字と現れて、虛空に上る。やがてあたか坂本の二老人は、今は佛法弘通自在たるべしといつて、文殊昆沙門の姿となり空に上る。

第三　金吾の姫と妻とは、殆ど太子から見すてられた如き樣にて山中にあり、姫は太子をうらめしく思ひ、病める母は、太子が始めて佛法を弘め給はんとするがもとで、わが夫は守屋に殺される、守屋は亡びた、これ全く太子の爲だといつて恨み歎く。

太子は黑駒に乘り、てうし丸を供にして、大和斑宮へつき給ふたが、途中片岡山のほとりにて忽然馬が進まぬ。調

べて見ると痩衰へた旅人がゐる。その人と佛教の問答や和歌の交換をし、再會を約して後太子は宮に歸られたが、間もなく旅人の死が傳へられる。太子はわざ〳〵行つて之を弔はれる。人々がそれをとめると、達磨大師なのだと云はれるので、墓を開いて見ると、達磨の姿は見えぬ。驚いて人々が拜すると、再び達磨大師の姿が現れる。やがて太子は經典書寫の爲にとて、片岡山にこもり給ひ、政治を蘇我いも子に托される。そして後人に對して利益を殘さん爲とあつて、兩手の皮をはぎ、ぼんまう經二卷の外題におし給ふ。そこへ妃の母君來つて、妃を置去にされたといつて、頻りに怨言をいはれるが、太子は此仕事の終るまで妃を預けると仰有る。母君は一刻も早く妃を引とられたいといつて歸られる。（此後少し欠く。）

妃は太子が片岡山におはすときいて、あひにゆかれる。此處が道行になつてゐる。

太子も今は佛道修行の爲に、とある岩間に座をくみてまします。山神やしやまでも太子の苦行を尊みて、毎日色々の供物を贈りては姿を消す。そこへ芹摘の妃は尋ね來つて、さま〳〵の怨言の後に、出家するから髪を剃つて弟子にし給へと太子にせまられるが、太子は禪定の座を立たずにゐます。（此後欠。）

第四　（四段と三段との堺目落丁にて不明）「となへ給へは不思議や虚空に光明輝き十方より文字飛來り、六字の名號と現はるゝ。此光明に照され忽ち佛體と現れ西の空へぞ飛去り給ふ」。太子夫婦は心靜に念佛される。大内の人々は光明に驚きて、片岡山に分入り、太子の御修行圓滿を賀する。太子は此行の序に忉利天へ參り、帝釋天に謁するから上天するとて、妃を斑宮に送り、自ら忉利天へ上られる。

第五　太子は一人霞をしのぎ、雲を分け忉利天へ行かせられる。そして喜見城の景色を眺め喜びつゝ、やがて帝釋天に謁して、色々と物語をされ、何故の上天かを答へ給ふ（といふ處にて落丁、終に及ぶが、次にある圖を見ると、）太子らしき人が大きな鳥に乘つて雲に浮び、宮殿には數多の佛めいたる人々あり、宮殿の上には柿の如き實生りて、そこに「右の木秋のひがんに花ちりこのみなる所」と記され、右下の方に、おりひめの歌として「天の川いかなる水の流にてとしに一たび袖ぬらすらん」、返歌「よそにても見まくほしきに七夕のあふ夜のそらを雲なへたてそ」とあつて、全體が「須彌山圖大からくり」とことはつてある。

【解説】不幸にして完本でないから明かにはわからぬ。『聖德太子の本地』や一般傳記などから、守屋との戰や達磨との片岡山にての會見が借られてゐることは大體明かだが、妃との關係などは頗る世話的になつてゐるかと思ふと、四五段に至つて、急轉回して、太子の苦行修行が圓滿して、遂に忉利天に上り、須彌山に到られるといふ處まで、述べられてゐるので見ると、佛教宣傳劇でもあると同時に、延寶頃に流行した聖者傳の一つでもあるのである。

四五段が非常に宗教的になり、神祕的になつてゐるから、當然そこに大からくりや糸操が用ひられてゐることは明かで、演出上には可なり目覺しいものがあつたことゝ思はれる。

【出處・影響】『上宮聖德法王帝説』『聖德太子傳暦』などによる。寛文期の『聖德太子御本地』參照

○百萬遍數珠功德記　　加賀掾正本

【體裁】帝國圖書館藏本、半紙形十七行、十四丁半、兩面繪五、奥に「二條通寺町西へ入北側山本九兵衛板」、柱には「万」とある。

【太夫・刊年】 初行内題下に加賀掾正本とあり、刊年は記してない。『新修繪入淨瑠璃史』には天和貞享頃と記されてゐる。

【形式・曲節付】 五段曲にて、各段首尾に形式句あり、曲節付は多い。

此作の初段の敍述は次の如く、突忽として始まつてゐる處が珍らしいから、數行を引いて見よう――

「扨も其後序るてん三がいちうおんあいふのうだんぎおんにうむゐしんじつぼうおんしや是じやうぶつのかとでなり、されば せじやうのことわざぶつぼうふしぎわうたいざ誠也けりときは木の中にもなはたかさごの、まつだいのすべらみことぶさうを しろしめさるること チロシ天りやくゑんぎにたぐひたり、地中扨もいんじとし中ぐう御なんざんめざましく今はかうよと見へさ せ給へばしゆしやうをはじめ奉り せつろく百くはんきをうしなひ給ふ處に、淨土宗中こうのめいそうなんれい大おしやう、 たいわけのおびをさゝけ玉のみはだをなでさせ給ひければ、さばかりの御なんざんたいらかにわかみや一かたかうたんまし 〳〵、上下さゞめく御よろこひよにもつきあるいさをし也……」

これまでの說出しと異つて、突如中宮のお難產から出たところが、先例にないやうである。

【梗概】 第一、中宮の御難產に際して、淨土宗の名僧南れい和尚が、たいわけの帶を以て、御體にさはると、直に御安產があつたといふので、和尚は御褒美を貰ふ。やがて和尚は今出川に開帳を行ふと、群集があまた參詣する。信者山村玄蕃忠正が一子喜七郎をつれて參詣の處へ、土居原源五左衛門國綱も參る。國綱は參詣の女達を見てふざけかかるが、その女が忠正の女房であつたので、一騷ぎが起る。けれども忠正が穩便に扱つた爲に事がすんで、皆々堂に參る。堂では和尚が觀音の由來功德を說いてゐる。やがて和尚が厨子を開くと、木佛と和尚の姿が、何れかわからぬ位に見える。一同が念佛を唱へてゐると、折から庭上に龜が一疋現れ、見る〳〵それが衣冠正しき老翁に變る。願はれて和尚がけちみやくを授けると、我は松島大明神で、衆生濟度を目的とするといつて、一丈餘りの蛇身となり、ちんじゆの社だんに飛入るが、又しやかむに如來と現れる。（挿繪を見ると、「ちんじゆ松島大明神かめに成給ふ、大がらくり」と記す。）

第二　都の東吉田岡崎近郊の百姓が禁廷に長り、近頃變化が出ると訴へると、五條の中將は「それ日本はしん國、まして王城の近隣にいかでさやうの事あらん……」といふが、關白は源五國綱、相澤左京之進賴かず、及び相澤の弟十七歳なる賴久に討伐を命ずる。其夜相澤左京之進があみだが峯にて、衣をかふつて來るものを引捕へて見ると、弟賴久である。國綱も一人の女を捕へて見ると、山村玄蕃忠正の妻で、夫の病を癒さん爲、死人をやいた火で、飯をやいて食はせると、病がいえるときゝ、七日の間、此處に通つてゐるといふ。國綱は同情しながら、彼女を口說いて手こめにせんとする時、相澤兄弟が現れる。

やがて國綱は忠正を亡きものにして、其妻を奪はうと心得、色々企てるが、又相澤兄弟の爲に妨げられて逃亡する。

第三　戀の爲に恐ろしい企をした國綱は、都をのがれて木幡の里にかくれてゐたが、七年の後、彼は弟國虎と心を合せて、忠正を討たんとして、內親王の嵯峨の花見を利用せんとする。（こゝに內親王嵯峨へ花見の、名所物語の節事）「あれ御らんせよ北にきふねやくらふ山そも此山は戀ちにわきてむつまじきひかるげんじのしよわけのたね……」偶々用事あつてお供にをくれた忠正を、乞食姿をした國綱兄弟が刺殺す。折柄病床にあつた十三歳の一子喜七郎は、

悲のあまりに死んでしまふ。

第四　南れい和尚は玄蕃忠正父子の墓を終つて歸る時、喜七郎の亡靈は和尚の前に現れて、助を乞ふ。和尚は此時父子を弔ふて、諸共に西方淨土に成佛出來るやうにしてやるといふが、喜七郎は承知せぬ。和尚が重ねてこれは因果ぢや國綱は昔一寸の白犬、汝が父は山犬であつたが、山犬が白犬を引裂いて喰つた爲に、今生にて敵を討つたのだ、それを今又討たば互に討ちつ討たれつ盡くる時はないから、仇討をやめよといふ。けれども喜七郎は願をきかれずは惡鬼となつて、佛法弘通の妨をなすといつて、口より火焔を吐く。和尚聽せず祈りかけると、幽靈は猛火となつて消えうせる。

其後喜七郎の亡靈は相澤兄弟に導かれて、轉寢してゐた國綱の首を斬つてにげ、敵を討たせて貰つた禮をのべて、國綱の首をわたして消える。亡魂が親の敵を討つたのは、前代未聞だといつて、喜七郎の母を喜ばすべく、相澤兄弟は都へいそぐ。

道行　山村玄蕃忠正の北の方は夫と子を失ふて、「是をしゆつりのゑんとして……墨ぞめの麻のころもに身をやつし……戀しゆかしき妻や子の墓所へ日ごとにまふでつゝ……あはれはかなき浮世ぞと思ひもふかきかも川や」。

「百萬遍數珠功德記」第二圖（帝國圖書館藏）

第五　玄蕃忠正の妻はしゆんてい尼と號して、日毎に父子の墓參をしてゐる中に、喜七郎が國綱を討つたとて、相澤がその首を持參するや、敵味方一佛成道の爲、一萬日の念佛を始むべく、春貞は南れい和尚をたのむ。さてその日になつて、和尚が念佛開びやくをしようとする時、國綱の弟國虎はかけ來り、喜七郎の墓をあばいて、死骸をずた裂にして、怨を晴さんといふ。和尚が許さぬといふが、盛に暴言を吐く、乃ち和尚は地獄の樣を見せるべく、百萬べんの大じゆずをくり出して、國綱や喜七郎が八萬地獄にて苦しむ樣を見せると、國虎は遂に頭をたれて和尚に謝し、序に助けさせ給へといふと、「一ねんみだぶつ即滅無量罪此じゆずをはなたずねんぶつせば成佛疑あるべからず……」と和尚は祈る。

【解說】忠正の妻を戀して、國綱が先づ忠正を討つと、忠正の子喜七郎の亡靈は其仇を討つ。國綱の弟は怒つて、喜七郎の遺骸を引裂かうとして、南れい和尚に、百萬遍の數珠をくつて地獄の樣を見せられ、遂に濟度されたといふ、仇討物語であり、教化物語である。亡靈が仇を討つたのが珍らしいといひながら、その亡靈が地獄で苦しむ處を見せて、教化するといふ所に狙はおかれてゐる。

○忠臣身替物語

【體裁】寛文三年の『公平法問淨』を近松が改作して、『忠臣身替物語』又は『今樣かしは木』と呼んだことは、正本や『外題年鑑』等の記述によつてもわかるが、加賀掾の名入の『忠臣身替物語』を、實は未見である。家藏の十行本『忠臣身替物語』には『今樣かしは木、忠臣身替物語』とあるが、奥附がないから、太夫名を知ることが出來

ぬ、けれども家藏本の文章は、『近松全集』所載の『忠臣身替物語』と同一である。

『近松全集』によると、竹本義太夫直傳『今様かしは木』と稱するものは八行四十七丁。又原名其儘の『金平法問諍』と題し、筑後掾と門左衛門連名の奥付あるのは十行三十丁。『忠臣身替物語』といふ外題の繪入本は十七行十三丁半である。

【太夫・刊年】『外題年鑑』には『今様かしは木』を元祿二年八月義太夫の語つたものとしてをり、既記繪入本にも「元祿二年巳八月吉日」とあるからは、加賀掾も元祿初年に語つたものと思はれるが、『外題年鑑』の加賀掾語物目錄にも、唯『身替問答』とし、富松薩摩の語物としても『忠臣身替物語』があげてあるだけで、上演の年代が記してない。從つて、義太夫と加賀とでは何れが早く語つたかも明かでない。

【形式】五段曲、『忠臣身替物語』と題するものには、各段首に形式句はなくて、唯各段尾にのみのこつてゐる。第四段に「かしはの前道行」がある。

江戸版　「金平忠臣身替」　題簽と初丁

第一「ぼんなふは家の内の犬うてども去らず……」

【梗概】梗概解説原據等に關しては、既に「慶長寛文篇」一〇一頁に凡て詳記したから、それにゆづる。唯、次

に改作の江戸版『金平忠臣身替』について記す。

●金平忠臣身替

【體裁】岩瀬文庫藏本。半紙形に近い中形本十七行十二丁。柱に「萬」の字あり、「滿仲」のつもりか。挿繪兩面三、奥に「うろこがたや新板」とある。題簽には「金平忠臣身替」とあつて、其左側に、上から二字あけて「法問諍」とあり、下にあつた筈の太夫名はけづられて、太夫正本の字が殘る。下段には鱗形屋の紋が中央にあつて、左右に「大傳馬・三町目」とある。內題には「公平忠臣身替」とある。

【太夫・刊年】殘念ながら上記の如く、太夫名がけづられ、刊年はなく、新板とあつたりする點から見ても、再版であることは論がない。

【形式・曲節付】六段曲にて、各段首尾に形式句がある。

【今様かしは木と比較】『公平法問諍』を近松が改作した『今様柏木』又は『忠臣身替物語』と題するものと比べて見ると、一、二、五、六段は夫々『今様柏木』の一、二、四、五段と殆ど同樣で、本曲の三、四段目が『今様柏木』の第三段に相當してゐる。そして大體同文である。

今、本曲の各段首を見ると、

初段「扨も其後ほんのふは家の內のいぬ、うて共さらず、ほだいは山の鹿、まねけ共來らずめいは只一心の中に有……」

二段目首「其後かもの二郎吉宗殿公平隆し置ける由君御立腹かきりなく父にそむくふから者佛法をやふり主にたて付く大惡人

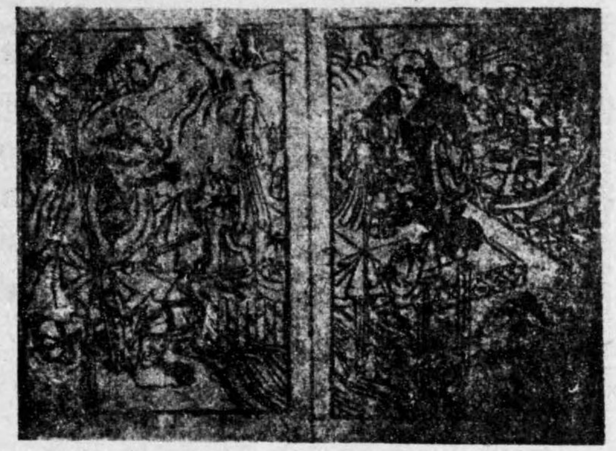
きうに押よせ打とれと御ちやくし八まん殿に打ての大將……」

三段目首「其後わだ左衛門爲宗は一子竹若丸をかたハらへ近付て何と思ふぞ竹若か樣にたゝかふも主君への忠とかつうはか名を取らん爲然は汝も某もあすの命も斗かたし同死すべき命ならは末代になを殘す爲二郎殿の御身替に立申さんとは思はぬか……」

三段目尾「…吉綱殿も公平も和田左衛門が打取たとたからかによばはれば をの〳〵駒をかけよせてあつはれお手からめでたやと、かち時どつとつくり立てかいちん有こそゆゝしけれとにもかくにもかの爲宗が心ていほめぬものこそなかりけれ」

四段目首「其後爲宗は吉いへ殿の御供申ぶ將の御前に罷出上いもだしかたき故吉つな公きん平共に打申て候と則二つのにせ首を御前にひろうする……」

四段目尾「姫はうれしきかず〳〵のことはの禮義のべのつゆしつほと夫婚とふらいて泪ながらにかへらるゝいづれあはれはおほけれ共かゝるなけきは又よにもたくいあらしと思ふ人聞く人おしなべてかんせぬ者こそなかりけり」



「金平忠臣身替」　（岩瀬文庫藏）

五段目首「其後頼吉公のみたい所は八まん太郎吉いへ殿を召れ扨もかもの次郎は父の御きけんおもくして打れたるとは聞つれ共……」

六段目首「其後いたハしやみたい所は吉綱公の御事をふかくなけかせ給ひ頼吉公へ御そせう有、ついせん樣々有中にやいはにかゝるしれうにはながれくわんじやうこそおくるれど……」

曲尾「爲宗はなけきの中の悦ひなり其時みたひ所は公平爲宗兩人に數々の御引てものを給ハりそれよりもおの〳〵を打つれてやかたにかへらせ給ひける千秋万せいの御悦ひめてたし共中々申斗はなかりけり」

【梗概】全曲としては寛文三年の『公平法問譯』と同樣であるから、詳述した其項にゆづり、本曲の三四段のみを見ると次の如くである。

三たん目　和田左衛門爲宗は竹若を近づけて、同じ死ぬなら二郎殿の身替として、末代まで名を殘さんとは思はぬか、今日の渡邊の言葉の末汝を義綱公の身替に立て申せといはぬはかりと察したが、すまじきものは宮仕だといふ。竹若はさすが三浦の子孫とて「父の御ため若君の御身替はいかで命のおしからん、……父上の御心に叶はで相はて候はゞよみちのさはりと存ればとく〳〵くびを打給ひ吉つな公をたすけてたべといさぎよく申」す。爲宗大に感たんし、直に公平を訪れて此旨を傳へ、若君命全ければ後には何ともならうから、竹若が身替になるといふと、公平は二人の忠義に感泣する。さていよ〳〵爲宗は竹若の首をはねんとして心落つかず刀をなげると、竹若は人手にかゝつては大變だといつて父を勵まし、今朝母からもらつた肌の守を父に托して、母に名殘を惜しまぬことをかこちつゝ首を討たれる。爲宗の歎の聲に義綱は事情をきくと、生きても甲斐なしと刀に手をかけるが、公平と爲宗が押とめ、公平も義綱も爲宗が討取つたことにして、館に火をかけて落のびる。

四段目　其後爲宗は義家の供をして頼義の前に出で、上意もだし難くて義綱公平共に討てすてたといつて首を差出

す。頼義は二つの首を見ると、公平は死後に面をさらさんことの無念さに面の皮をはいだと見えるといつて、首は爲宗に與へる。爲宗は首を持歸つて北の方に、竹若が若君の身替に立つたとつげると、喜びながら、最後にをくれたるけしきはなかつたかと、北の方は夫を勇める爲にけなげな物云ひをして、やがて一室に入るなり、竹若の首を顔におしあてゝ泣き、「扨も打も打たり、打れも打れたりおしまぬぶしの命ながらまだおい出る若竹のはつへのつゆときへうせしむなしき姿は何事ぞや」今一度名殘が惜しみたかつた。父ばかり親と思ふて母は親と思はぬかと恨む。と竹若が姿忽然と現れて母にわびながら、さほど歎かれると成佛出來ぬから、それよりぼだいをとはれよと乞ふ。北の方が喜んで飛つくと姿は消えてしまふ。

やがてそこへ一人の女が來て爲宗に斬つてかゝり、夫の敵だといふ。それは柏の前で、義綱を討つたから敵だと說明する。爲宗はやむなく竹若を身替にしたことを語り、若君は在所やわたに忍びねることをつげる。「姫はうれしさかず〳〵のことはの禮ぎのべのつゆしつほと夫婦をとふらいて泪ながらにかへらるゝいづれあはれはおほけれ共かゝるなげきは又世にもたくいあらしと見る人聞人おしなべてかんせぬ者こそなかりけり」。

○ぼし折

隨分流行したものと見えて、可なり澤山の正本を見るのであるが、大別して義太夫正本、山本角太夫土佐掾正本、繪入本、六段本とすることが出來る。その中、山本土佐掾正本を原本とする說もあるが、それが正しいかと考へられはしても、今日までの處では、明證をつかむことが出來ぬ。從つてやむなく、義太夫正本を最初の上演と見ざるを得ぬ。

【義太夫正本】 これは『近松全集』第三に取入れられてをるもので、八行五十四丁、奥に山本九兵衛板とあり、竹本義太夫と近松門左衛門信盛の名もあげられてゐる。

【刊年】 第五段牛若神宮參拜の條の初に、「神風や伊勢の宮居は去年の秋御遷宮なる新宮に、今年輝く春の日の…」とあると同時に、同じ五段に「はしらごよみ」の節事の初に「抑今年は何事も心にかのえむまの年」の語があるので、元祿三年の庚午にも適合し、元祿二年九月十日內宮（皇大神宮）、同十三日外宮（豐受大神宮）の遷宮の事實と一致して、『近松全集』にも說かれてゐる如く、自ら元祿三年に書かれたものであることを知り得る。『外題年鑑』には、「源氏烏帽子折 二度目元祿十二己卯正月二日」とあるのみで、初回の上演は記されてゐないが、元祿三年初回の上演は疑ふ餘地なく、その際の正本として用ひられたのが、義太夫の名の見られる、單に「烏帽子折」の外題をつけたこれであると思はれる。

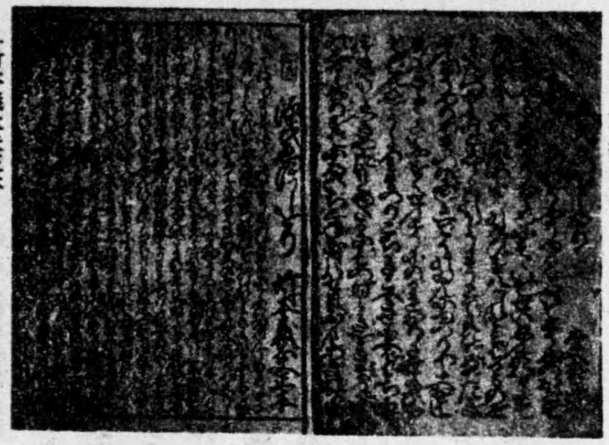
【形式・曲節付】 此正本は五段から成り、各段首尾に形式句はなく、第二段に「ときは御ぜん道行」、第三段に「ゑぼし折名づくし」、第五段に「牛若伊勢神宮參拜」の節事、「はしらごよみ」などがある。殊にこの第五段は他の異本と詞章を異にし、曲尾は次の如くなつてゐる。

曲尾「牛若歡喜の思ひをなし、百拜千拜幣帛を瀉へすをみ衣、東の勢を催して怨敵を追伐し、源氏繁昌國繁昌治る御代こそ久しけれ」

【異本源氏烏帽子折】 ところが前のと異り、第四段終までは殆ど同文であるが、第五段に至つてすつかり改作され

てゐる正本がある。それは題簽の外題は同様（家蔵土佐掾正本は唯『ゑぼし折』とあり）でも、内題に源氏の二字が冠されて『源氏烏帽子折』となつてゐる。

山本土佐掾正本



「源氏ゑぼし折」　初丁

竹本義太夫正本

花やかにてさんぐうある……」

その種の正本は存外多く残存し、『近松全集』には、土佐掾直之正本で十行三十三丁本、竹本筑後掾正本とある十行三十一丁本、八行四十丁本、七行七十二丁本、寳永七年鶴屋版十四行十五丁半本等は皆さうであるとして擧げてある。これ等は元祿十二年の二度目の上演に用ひられたもので、初回正本が御遷宮をあて込んで書かれたので、其第五段を改作して、二つの節事の代りに、『三社託宣』の中から「二位中將宮めぐり」をそのまゝかり、之を「牛若宮めぐり」としたものと思はれる。

東京帝國大學圖書館藏本、半紙形より縱少し短い十行三十三丁本を見ると、五段にて、各段首尾に形式句なく、第五段は私の所謂義太夫本と同様に始まり、「牛若宮めぐり」は次の如く始まつてゐる。

牛若宮めぐり「是はさておき御さうし牛若はしのゝめをいざないさも

曲尾「君が代を千代はんぜいとまもらせ給へと八はい九はいなし給ふ」

これは元祿十二年の改訂本の種類で、『近松全集』に載せられてゐる鶴屋本なるものと同様である。

【角太夫正本】以上の外に山本角太夫正本と記されたものが三種ある。第一は『源氏ゑぼしをり』といひ、十行二十五丁、山本九兵衛版。第二は十行二十四丁本で、『げんじゑぼしをり』といひ、第三は『源氏ゑぼし折』とて十行二十四丁ながら第二とは趣を異にする。又鶴屋喜右衛門版にて、山本土佐掾直之正本と記す、『源氏烏帽子折』といふ十行三十五丁本もある。

處が曲節付から見て、土佐掾の正本であること疑ないもので、題簽に「山本土佐掾直傳」とあり、外題を『ゑぼし折』とし、內題を「源氏ゑぼしおり」とする家蔵京寺町菱屋治兵衛板、十行二十五丁本は、第四段までは初版即ち元祿三年版と大同だが、第五段は、鶴屋本とは又趣を異にし、同段の首尾が下の如くである。

第五段首「かくてそのゝち牛若の御いきほい、りやうが水を五千里のとらふうはのなんぎしのぐがごとく、夜を日についで下り給ふ、程なくあふしうだてのこほりにつかせ給ふ……」

曲尾「やれ方々とよろこびいさみてそれよりも、十万よきを奉る、かゝ義經の御ゐるせい、いよ〳〵げんじの御はんじやう、千秋万歳ばん〳〵せい、めでたし共中々申はかりはなかりけり」

これで見ると、牛若の秀衡入から、勢揃についで、軍略の指南を經て、上洛決意までがついてゐるのである。

『近松全集』にあげてある「土佐掾直之正本」といふのは、既記の如く、二度目の上演物と同様といふのであるが、何だかこの家藏本とは同一でなささうな氣がする。

【繪入正本】 更に古觀文庫藏は破本であるが、それは半紙形十七行にて、繪兩面及び片面繪各々二づゝ綴り、十五丁であつたかと思はれるが、第五段が殆ど落丁になつてゐる。内題は「源氏ゑほしをり、竹本義太夫正本」とあり、第一段は「扨其後」、第三段は「去程に」、第四段は「かくて其後」で始まり、第二段には「ときわごぜん道行」とないこと、唯「道行」とある。惜むらくは、第五段以下凡て落丁にて、多くをいへぬ。

【江戸版六段本】 この外に東京帝國大學圖書館藏に、『けんじゑほしをり』と題して小形十六行十丁。兩面繪三、奥に「江戸大傳馬町、うろこかたや孫兵衛」とあるものがある。刊記は唯「正月吉日」とあり、六段曲にて、各段首には形式句があるが段尾にはない。試に各段首を見ると、下の如くである。

初段「扨も其後、後白河の法皇はわきてめてたきけん王にて……」

二段目「其後六原にはときわを生取けいこはあたりを押拂ひて來りけり……」

三段目「其後清盛すでに太政大臣に上り入道してぜうかいと法名有……」

四段目「其後牛若ははやよいのまにふかく成其夜もふけてしのゝめは左折に小ゆひをゆい御ゑほし出來たり……」

五段目「其後關平兵へ宗清は妻白たへ源氏のゆかり有ゆへに……」

六段目「其後ひるか小島におハします源頼朝もり長一人はい所のとぎ……」

曲尾「源氏の末は万々せい五こくふにやう長安金東のせいをもよふしておんてきをついばつせんけんじはんぜうめてたしとそかんしける」

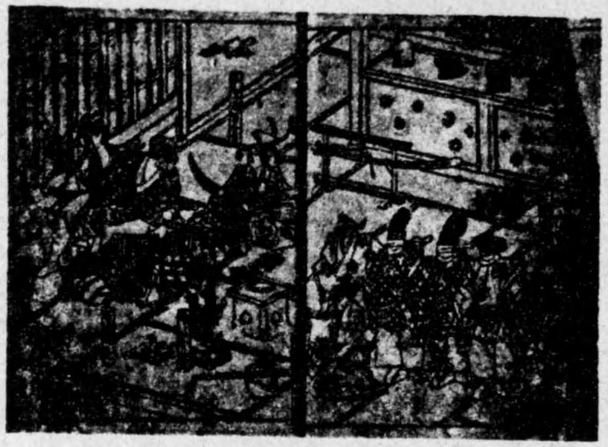
各段首の模樣によつて見ると、分け方が知られると同時に、初版の『烏帽子折』でなくて、第二版の改訂版が、江戸版として行はれたことを知ることが出來る。

【梗概】 『近松全集』其他にも記されてゐるから、極めて概括的に記す。

第一　義朝の死後、長田忠致の子、太郎が、常盤牛若母子を捕へたのを、義朝の忠臣瀧谷金王丸と藤九郎盛長が見つけて、太郎を誅倒し、首搔落して常盤母子を救ふ。

第二　清盛邸の評定についで、「ときは御ぜん道行」。伏見の宗清の館に近づいて、母子は宿を乞ふて、雪の夜を軒下に寢るが、遂に宗清がそしらぬ顏で助ける場。宗清の妻白妙の兄藤九郎盛長は、常盤母子が助けられるを見ると、禮に來る。此處が所謂伏見常盤の場にて、母子の愛情胸にせまるものがある。

第三　清盛は烏帽子屋五郎太夫に製作を命じ、同時に牛若と覺しき者來らば訴へよと沙汰する。牛若は成人して元服せんとして、京三條烏丸の烏帽子屋五郎太夫の店にて、左折の烏帽子を求めようとすると、五郎太夫はそれを源氏の公達と覺つて、六波羅へ訴へる。



竹本義太夫正本　「源氏ゑほし折」　第三圖

ところが烏帽子屋の娘東雲は、牛若を見ると忽ち心を引かれ、彼の元服を祝はんとて、數多の烏帽子掛に、樣々の烏帽子を着せて（ゑぼし折名づくしの節事）、牛若の前にならべ、關八州の諸大名になぞらへた武士揃をする。此時和

田畠山朝比奈などの聲がきこゑると、六波羅からの捕手も躊躇する。そこへ金王丸の土佐坊昌俊が來て、敵を追散らす。

第四　彌平兵衛宗清の妻白妙は、烏帽子屋の娘東雲と共に、牛若の後を追うて、江州田村川で追つき、三人で平家の追手監物太郎を川へ投げ込み、敵兵と戰ふて、「三人手に手を取組みて、流るゝ武者の頭をふみ、肩をふまへて飛こへ〳〵向の岸にかけあがる」。

第五　盛長と土佐坊とは、蛭が小島に頼朝を訪れて、大惡魚をもつて來たといつて、長田庄司を引出し、之を料理する。やがて盛長は仰を蒙つて牛若を迎へにゆく。

（以下、土佐掾本と義太夫本では異る。）

（義太夫本）　牛若は白妙東雲を從へて、伊勢神宮に參拜し、源氏の開運を祈る。神主は一萬度の御祓を授けた後、吉凶禍福を知り得る、伊勢暦を縮めた「柱暦」（節事）をさづける。盛長は關東勢をつれて、牛若を迎へがてら參宮する。

（土佐本）　牛若は東雲をつれて伊勢に參宮する（牛若宮めぐりの節事）。そして日本國中一萬七千餘社の神をそろへて、君が代を千代萬歳と守らせ給へと八拜九拜する。そこへ盛長が關東勢を引つれて、お迎へかてら參宮する。

【解說】　要するに判官物の一つで、義朝の死後、常盤が三子をつれての伏見の流浪と、やがて宗清に助けられて後、牛若が成人して元服し、金王盛長等に助けられて、東下りをする間の雜事を綴り合せたものであるが、所謂伏見常盤の一段と、烏帽子屋の一場が最も興味ある場である。

【原據】　第二段に舞曲『伏見常盤』、第三段は謠曲『烏帽子折』により、「牛若宮めぐり」は『三社託宣』の「二位中將宮めぐり」を其儘かりたものである。

【影響】　天滿八太夫の正本に元祿三年刊『鎌田正清』又は寶永版に『伏見常盤』と題するものがある。兩者共に同內容であるが、その「伏見常盤」の段は本曲と密接な關係がある。

又今日迄佐渡に殘つてゐて最近發れたといふ昔の文彌節の一派では、近松作の此伏見の里の一段を最も尊重し、その中に同流の曲節が凡て含まれてゐるといつてゐた。今日殘存する一中節の『妹が宿』、常盤津節の『宗清』も此段から出てゐる。

○渡邊つな引　並ニ鬼平親王車曳

伊藤出羽掾正本(?)
節付木屋七兵衛正本

【體裁】　青々園文庫藏本。半紙形十七行細字十五丁半。繪兩面二、片面二。元祿頃の繪にならひ、人物が寛文延寶頃のに比して頗る小さくなつてゐる。版元はないが、『蒲御曹司東童歌』と似た版である。關根只誠翁舊藏印有り。

【太夫・刊年】　第四段目に節付木屋七兵衛正本とあり、奥に「元祿未歳正月吉日」とある。元祿末年の癸未十六年でなくて、「四年の辛未」と、前所藏者只誠翁は推定記述してをり、思ふにその說は正しかるべく、元祿末年のものとしては、既に流行後れの上方公平物で、『惟喬惟仁位諍』に渡邊綱の武勇談をからませたものである。種彦の『淨瑠璃本目錄』には「元祿四年印本」として本曲を伊藤出羽掾正本としてゐる。

【形式・曲節付】　五段曲にて、各段尾には形式句あれど、段首には大序に「さても其後」があるだけで、二段以下

にはない。

曲節付を拾つて見ると、

序、地、詞、色詞、色ハル詞、ハヤメ詞、地、地ハヤメ、地色、中地、地中チン、色、色中、中ハル色、色フシ、色チロシ、カン色フシ、色引フシ、ハヤムフシ、ハルチン、中チン、中、下、上、下チクリ、色カンチクリ、モツ、モツ色、モツフシ、ユリモツ、中セメモツ、色モツフシ、色モツ引フシ、引モツ下フシ、クリ上、クリ上引フシ、ハルカンクルフシ、三重、三重上、大三重、色三重、引取三重、三ツユリ、クリ上ユリ、ハツミチンユリ、色チトシ、ハルチトシ、カンハルチトシ、フシユリチトシ、チトシフシ、色カンスヘチトシ、ハルスヘフシ、スヘフシ、本スヘフシ、カンスヘフシ、下ユリナガシ、本ユリナガシ、カン本フシ、地カ、リ、ハルカ、リカンフシカ、リ、カ、リ地、地カ、リ色、色ハヤムカ、リ、地ハヤメカ、リ、ハルフシ、カンハルフシ、キンカハリ、色カハリ江戸、ヒロヒフシ、ノムチスフシ、クルヒヤウシ、キチヒフシ、カン引ステフシ、中セメフシ、ハツミフシ、ハツミ色フシ

の如くかなり澤山あつて、角太夫節や義太夫節や播磨節嘉太夫節などに見る曲節付と、多少異つたものが目につくことを注意すべきである。それが第四段に

第四　中宮みつひめみち行――ふし付木屋七兵衛正本

とある所以であらうかと思はれる。それにしても「ふし付木屋七兵衛正本」なる句は、如何に解すべきであらうか。唯曲節付を木屋七兵衛がしたといふ意味であらうか。さすれば「正本」の意義は如何に解すべきか、七兵衛が節付を

した寫本、原本といふ意味に過ぎないのであらうか。第四段の道行の下にだけ、此句がある所を見ると、主として其處に七兵衛が重きをおいて、曲節をつけたものと見え、全體を彼が語つた正本といふ意味ではなささうであるが、それとも寛文五年八月九兵衛板『安藝宮島辨才天利生』が彼の正本であるのを見ると、彼が語つたものの如くでもある。それにしても種彦の目錄に伊藤出羽掾正本とあるのは何によるのだらう。又道行そのものはあまり長くもなく、それほど優れた文でもない。

【梗概】第一　六十二代村上天皇の女御皇太皇后源のとう子は、建陽門院と號し、一の宮の太子が御病氣にて御即位なき故、わが子の二の宮爲平親王――猛惡無道にて鬼平親王と呼ぶ――を御位につけようとしてゐられる。遂に御即位の事から、少年を集めて、二組に分けて綱引をさせ、勝つた方の組の宮が即位される事となる。西宮の大臣はしげつらと共に二の宮を擁立して、外祖として權威を振はうとする。そして少年向の小袖や髪をつくり、之を郎等に着せて、子供との綱引に勝たせようとするのである。此時三田の源次の妹てる田といふ女が、甥の渡邊源五丸をつれて、綱引の儀式に顔を出す。やがて花々しい東西の棧敷に一の宮二の宮方が列り、先づ木火土金水になぞらへて、一の宮方から五人の童子が出ると、やつぱり二の宮の方からも五人が出て綱を引き、初め一の宮方が勝たんとするや、二の宮方では子供に裝うた强力を出して勝たうとする。此時一の宮方ではまた渡邊の源五丸が出て、二の宮方をなやまし、遂に二の宮方の少年に裝うた三十男四人を散々になぶつて　見事に綱引に勝つ。源滿仲は源五丸が其昔經元に仕へた三田源次の子であるときくと、即ち天下分け目の綱引に勝つたからとて、名を綱と與へて源氏一の家臣とする。

第二　太子たる一の宮が冷泉天皇とならせ給ふと、源滿仲の功を稱して攝津守に任じ給ふ。滿仲は攝津に行つた留守を、其子頼光と綱とに警護させてゐると、丁度御門が石清水へ行幸の時のこと、右大臣廣方は鬼平親王に通じ、鳳輦に親王を隱して、御門を討ち奉らうとする。處がいざ乘御といふ時に、牛が狂ふて舍人を殺す、乃ち今日の行幸は御中止といふ事になるが、頼光綱が後にて樣子をさぐりに來て見ると、廣方が鬼平親王を輦の中から出さうとしてゐる處である。乃ち輦の中を見る見せぬで大爭の後、廣方は討たれ、鬼平親王は遂に頼光の爲に縛られ給ふ。

「渡邊つな引」　（東京帝大藏）

第三　悪計がばれると、女院は更にそれからそれと計畫され、甘言と泣落しで鬼平親王を牢から出すに成功し、更に非望を企まれる時、頼光は親王を押へつけるが、ついで危險を避けるべく、頼光は主上を負うて、一度攝津の國へ落ちてゆく。

中宮には主上の御行衛不明と聞き、いたく嘆かせられる處へ、二の宮鬼平親王は紫衣にて入來り、御身を第一の后とあがめるからといはれるが、中宮は悲と怒とに二の宮を罵り、御身如き悪人に何ぞ從はんとて、二の宮をつき落される。二の宮は怒つて中宮を庭の木に縛りつけてさいなみ、毎日一本づゝの指を切つても意に從はせるといふ。やがて日が暮れて、第三の守平親王は中宮を男裝させ、宮中から忍び出させられる。

第四　御門は津國多田庄にて、滿仲父子に守られておはしながら、中宮の事が御氣にかゝり、又中宮の御父關白實頼公は土佐に流されたと聞き惱み給ふと、滿仲は土佐の中納言兼宗卿に募兵の使を送る。

中宮は守平親王に助けられた後、あはれにも一人津國多田庄に向はれる途中（これが道行）みなせの里の辻堂にて、敵方の平重つらの弟かもの介てる重が、中宮を見つけて强ひて妻とせんとする。折柄上洛中の綱の叔母てる田は之を見ると、「てる重がそくびつかんでかしこへだうと取てなげ、やあびらう成侍かな、何ぞやおつとのある女に戯をいふのみならず奪取て我つまにせんとは人の皮につゝまれたる畜生といふ物なり、女と思ひあなどつて、後に後悔いたさるゝな」といひ、勇猛に活躍し、數人をなげ仆し、敵の餘黨が退却する間に、中宮を負うて逃る。やがて川ばたへ來て舟を見つけ、中宮を乘移らせようとする時、敵照重が追かけ來て、中宮を奪つて舟にのせて逃出す。てる田が困り果てゝゐる時、中宮を迎へに來た綱は川に飛込む。照重は渡邊綱を見ると、恐れて中宮を川へ投げ込むが、綱はそれを中にて受取り、泳ぎ歸つて叔母に引渡し、舟を覆して敵を滅す。

第五　使に行つた仲光は關白と共に土佐から上る。やがて三の宮は見事に二の宮を討ち、折柄都へ攻上つた滿仲軍に味方して、平重つらを捕へ、女院左大臣も皆捕へられ、ついで重つらは首をはねられ、三の宮は東宮にたゝせられて、天下再び安らかになる。

【解說】　本文中に惟喬惟仁兩親王位諍のことが引かれてゐる上に、これも二の宮と一の宮との位諍であるから、近松作といはれる『惟喬惟仁位諍』から影響を受けたものと思はれる。

つまり女院が腹ちがいの太子を退けて、己が腹の二の宮を即位せしめんとして、宮中の大官と結びて、叛逆を企て

られるのを、源満仲頼光に渡邊綱が加はつて、太子一の宮を助け、結局叛逆を不成功に終らしめる、といふ筋のもので、外題は二の宮の鬼平親王方の陰謀の裏をかいて、位諍の爲の綱引に、渡邊綱が剛力を以て忠勤をはげみ、親王が鳳輦に隱れての陰謀も、綱の爲に遂に不成功に終り、一時は親王が權威を得られるが、三の宮の正義への加勢によつて、一の宮が再び位に復し給ふといふ、一種のお家騒動風のものである。唯綱の活躍が目立つて、自ら外題となつたのであらう。

【影響】『鬼平親王車隱』はこの改作である。

●鬼平親王車隱

【體裁】東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行十丁。兩面繪三。奥にうろこかたや新板と見え、柱に「車」の字がある。

【太夫・刊年】共に不明ながら『渡邊つな引　並鬼平親王車隱』の改作と思はれる。

【形式・曲節付】六段曲にて、各段首尾に形式句がある。曲節付はない。

初段「扨も其後一けひらくる時天下のはるみどりハ夜もときは成松にさへつるひなつるの初そめでたけれ、されは人王六十二だいむらかみ天王のによごかうたいこうぐうみなもとのとうしゐんがう蒙らせ給ひけんやう門院と申奉る誠に天下のこくぼとして御いせいはなはたかぎりなし、……」

【原據】元祿四年の『渡邊つな引　並鬼平親王車隱』の改作にて、筋は同樣であるが、原曲の第一段目が本曲の一段目と二段目とされてゐて、此第一段に最も手が入れられてゐる。試に二段目以下の段首を記しておくと

二段目「其後かものやしろには其日のぎしき花やかに神りよをいさめ奉る程なく時こくになりぬれば……」これから後に綱引がある。

三段目「其後一の宮はせいとく天に叶はせ給ひける、されは滿中を御れんちかく召れ……」

四段目「其後女いんは二のみやのけいりやくいたつらに、、れ給ふと聞召かねて頼し人々と内談を申合つゝ御てんをさして入給ふ去程に御かとにはあやうきなんをのかれさせ給ひ……」

五段目「其後天王はまん中父子がはからいにてつの國たゞのせうに玉さをすへじせつを待せ給ひけり……」

六段目「其後わたなへがはたらきにて中宮事ゆへなくたゝの庄へ入らせ給へは互に御悦はかきりなし、然に中光は中納言諸共に三千よきをもよほし……」

曲尾「天王御らんしこくぼの御事はくはん白に預置、大臣は西かいへなかすべし重つらをはそれはからへ　らい光長てやがて首をばねらるゝ、其後三の宮を當宮と定め天下長久におさめ給ふ、せんしうはんぜい、めてたし共中々申斗はなかりけり」

「鬼平親王車隱」　（東京帝大藏）

【挿繪】序に挿繪を見ると、第一は、國母、二の宮の御前にて、「よこい半藏手からの所」と記されて、彼が大木

を揮つて勇氣を出してゐる繪。第二は、右上に網代車があり、牛があばれて、ひろかた、渡邊爭の處。第三の繪では左側に一の宮馬上に、側に滿仲、三の宮右に手をついてあられ、二の宮の御首は、中央に三寶の上に、其周圍に頼光、渡邊綱等。

○金平大峯入　四天わう鉄鬼責

【體裁】古觀文庫藏本。小形十六行十三丁。內題に上の如くあつて、題簽なく、柱には「大峯入」とあり、兩面繪四、奥に通油町、新開板とあり、その上には、版元は元から入れてなかつたやうに思はれるほどしか空地がない。

【太夫・刊年】太夫は不明だが、奥に「元祿四年辛未正月吉日」とある。

【形式】六段曲、各段首尾に形式句がある。

初段「さても其後、それぜんあく二つはひとへに兩わの如くにして國をさる事とをからず、その比のみかどをば仁王六十七代三條のゐんと申奉る……」

【梗概】初段　三條の院の時の武將は源伊豫守頼義にて、竹綱、公平、平井の鬼同獨武者、うすいの定かげ、うらべの民部すへかねの五人の外、三浦竹知などの若武者が從ふ。

其頃天下に不思議な事があつた、即ち元治四年かのへさる七月七日大風あり、天地闇黑二時に及ぶので、頼義は參內して、神代の古事など引いて奏聞すると、奥州天の原大納言純秀は言葉尻を捕へて、頼義をせめる。公平や公綱は天の原に斬つてかゝらうとするが、頼義がとめる。やがて博士を招いて占はせんとする時、雷電が博士の上に落ちかかるが、其時公平が雷電鬼を討倒し、賞を賜はる。

二段目　無雲天の大惡魔かまん天ばしゆらとて、其丈一丈二尺、左右の牙は劍の如く、兩眼は百煉の鏡に血をそゝぐ如きが、日本を疫病にて暗とせん評定をしてゐる所へ、二鬼が雷電鬼の二つになつた體をかつぎ歸り、日本には公平がゐて、到底手におへぬと語る。他の外道等は皆震へ上るが、大將ばしゆら天は一人憤然として出發するので、他の外道等も從ふ。

三段目　奥州三つ峯山に夜々光物があつて、山谷が鳴響くが爲、五十四郡の人民皆耳がつぶれ、病床に臥すといふ有樣である。

天の原大納言は其後本國に退き、逆心を企てんとしてゐる。乃ち惡根の南せん入道、つくも川の天來軒、ふとせ山のばん來山等の三惡僧を招き、計畫を廻らし、醉つて寢てゐると、惡鬼が現れて彼等の胸中に飛込み、忽ち彼等を亂心狂氣たらしめる。乃ち祈禱樣々行ふが更に甲斐がない。又或夕暮惡鬼が八十の老人と現れて、一同に邪心を吹込む、大納言は遂に三千餘騎を以て都に攻上り、途中にて丸山將げん鳥山松ながの等の軍と戰ふが、其時惡鬼の軍が現れて敵味方とも引さらつて空に上る。

「金平大峯入」　第四圖　（古觀文庫藏）

四段目　其頃、都には數多の狐が現れて鳴き騷ぐので、護摩が修行されるが、その最中に、頭は鬼、胴は猿の如き

鳥が出て飛び廻る。公平は此時招かれて之を退治する。

其時奥州なる鳥山松ながから「大峯山にきじんがすみ天原がむほん敵身かた共に引さらへ馬をつかんでひきやうになす事只いわしが小鳥をなす如し」と訴へる。勅命によつて頼義に征伐を命ぜられると、公平は魁せんとして竹綱と散々爭つた後、頼義が仲裁して、竹綱の計略にて、一同山伏姿で大峯山入をすることゝなる。

五段目　頼義一行は、つくも川に着いて、それから六十の老婆の案内にて宿につく。奥の間に入つて見ると、素晴しく飾り立てゝある。「四方にかけたる四季の繪は異國のゑかき陶淵明が筆の跡わこくの繪師とは見へさりける……先東の方には初春や梅が香りに鶯のしたいきたりし花のもとにさながらはつねを出すていかすみかくれの遠山に……」（全く十二段草子の四季をまね、その文をも多くかりてゐる。）やがて四天王等が酒宴の馳走になつてゐる中に、姥も侍女もいつの間にか鬼女となるので、公平等が討つてかゝらうとすると、空に消える。

六段目　四天王等は大峰山に上つて二重三重に取まくと、荒鬼共は大石枯木をなげてふせぐ。先づ定景が大悪外道を討つ。竹綱等がさま〳〵の鬼を平げた後に、やがて坂田公平が鐵鬼の首に「百ゑのくさり十すゑにねぢて」打かけ、遂に之をつなぎとめて、枯木を切つてはたゝらをふんで火焔で責め殺すと、他の殘の鬼どもは皆天に逃げ去る。

【解説】　全く酒呑童子物語から出たとも見るべき幼稚極る鬼神退治物語で、最初の大納言等の事は、彼等までが鬼神にさらはれるといふ前置にしか過ぎない。

【原據】　『酒呑童子』から來たもので、四段目の四季の景は『十二段草子』の影響である。本曲と『大峰の本地』とは關係がない。三條院の御時には、「元治庚申四年」なるものなく、「長和乙卯四年」しかない。

○明　用　天　皇

【體裁】　東京帝國大學圖書館藏本。小形十六行十四丁。初行に「やうめい天わう」とあり、柱には「やう」の二字が見える。奥に「通油町かぎや新板」とある。

元祿四年刊「用明天皇」　初丁

【太夫・刊年】　太夫は不明ながら、奥に「元祿四年辛未仲春日」とある。

【挿繪】　豊富にあり、（一）まの〻長者が御臺と共に、「うぢ山觀音に參詣して申子をする。左に家のおとな小姓達がゐる圖。（二）みかど櫻花を叡覽の所。公達澤山あり。（三）くらんど勅使として、長者の家に至る。長者いや〳〵、あく太郎てがら、など記されてゐる圖。（四）觀音現れ、七夕はたををり、長者拜む圖。（五）みかど舟にて道行、船頭物がたりの圖。（六）山路笛を吹く圖、姫君笛をきく。（七）「みかど山路となり給ふ」とあり、射的の處。挿入の寫眞は四、六、七圖である。

【形式・曲節付】　六段曲、各段首尾に形式句がある。曲節付はない。

初段「さても其後それ天もんを見てちへんをさつしにんもんの見て天下をくわせいす愛を以てせい道りにあたるときんばぶうん時にしたがつて國家ほうにう也、されば仁王卅代のみかとをはきんめい天皇とぞ申奉るその比の事かとよ、つくしぶんど

【梗概】初段　用明天皇の御時、豊後國宇治山といふ所に、眞野の長者家春といふがある。萬に富める故まんの長者と云ふを、云ひやすき樣にまの殿といひ出した。朝暮酒宴に日を暮すが、八苦の習の例にもれず、四十に及ぶも子がない。乃ち一日御臺と共に宇治山の觀音に立願する。其夜をこもると、觀音は八十計の老人と現れ、一人の子を授けると云ひ、左の袂に玉を入れたと思ふと、御臺は孕みて、十月にして女子を生む。靈夢によそへて玉よの姫と呼ぶ。いつか十三歳になる。卅二相をそなへて「詩歌管弦にくらからず、夫婦の人の御寵愛上から下に至るまで、千秋萬ぜいの御よろこび何にたとへん方もなし」。

元祿四年　「用明天皇」　第六圖

二段目　「其後たうきんに立せ給ふは、用明天王と申奉る、生年十六さいにならせ給ふ」。いまだ后ましまさず、御望に叶ふ方もなく、色々伺ひ奉ると、美人の繪を取出して、此繪に似たる女あらばまいらせよとの宣旨である。けれどもかゝる美しき女の現世にありとも覺えず、各々呆れてゐると、豐前の國の住人藏人の清景が此由を承り、眞野の長者の娘は此扇の繪にまさつて美しいと奏上する。乃ち眞野の長者の姫を迎へて參れとの勅命があり、藏人は姫を迎へにゆく。けれども長者は一人の姫なればとて御辭退申上げる。まさきの六郎は一先都に歸つて、由を奏すべく勸めるが、藏人は怒つて兵を以て長者の舘を圍み、戰にまける。

三段目　藏人は戰にまけて、忍びて都に上り、奏聞に及ぶと、大軍を以て攻めよと勅命があるが、關白大臣は此時、それよりも難題を仰付られるが上策ならんと奏する。かくて一萬石のけしのたねを日の中に奉れ、それが出來ずは姫を内裏へ參らせよと、先づ長者家春に勅命がある。長者がこまつてゐると、御臺は十萬石も用意してあるといつて、無事にけし種を奉る。今度は「蜀紅の錦を以りやうかいのまんだらをはた色に七ながれ織りつけて參らせよ、それがかなはぬものならば姫をだいりにまいらせよと重てちよくしを下され」る。「りやうかいのまんだらとやらんは佛たちの淨土にて蓮の糸にておらせ給ふ」物なればとて、長者がこまつてゐると、觀音のお告があり、「二十五のぼさつたち長者がていに來降あり、ひこぼしたなばた下にゐておるひのおとはおもしろやてい〳〵からりからころり、からりころりとおる音はさながらみのりの如くなり、廿五色に七ながらはた色におりたて中のでいにおかせ給ひかきけすやうにうせ給ふ」。長者乃ち之を奉ると、「只まの殿は佛にてましますや」とて、御門は「玉の殿をふりすてゝいやしきしづの身と成ていつくをそこと白浪にたゞよふ舟の如くにてうかれ出させ給ひける」。やがて大物の浦につかせ給ふ。

四段目　都にては、御門のお妻が見えぬとて、大騒動であり、法皇のおなげきはかぎりない。

大物の浦にて、御門は幾後へ下る舟をみつけ、これに便船をたのませ給ふ。船頭藤太は御望にまかせて、名所舊蹟を一々語り申上げる。「先此方に見へたるみやはうち出のはま……今のうき身はよもとめし浮世のさがをたまさかに

たいりわうだゝこき過てかせにまかせて行程に豐後の國に聞へたるさがのせきにも付給ふ……」（此段は舟人の名所ものかたりが殆ど九分を占めてゐる）。

第七圖　「用明天皇」　元祿四年

五段目　「去間みかとはたれ知るよしのたよりもなくかなたこなたにまよはれしが」、ある宿につき、亭主をたよりて、長者に奉公をのぞみ、自ら山路と名乘つて長者に御對面ある。長者は「いかに山路、此長者は牛を千疋かい候が九百九十九疋にはとねりがそふて候があれに候あめなる牛はとねり共がにくみつゝ草をも水をもかはぬ也けふよりして山路にあつくる也草をも水をもかい給へ」といふ。「いたはしや戀ゆへりやうでうしたまひて明れは牛の口を引千人のとねり共と打つれうしろの野邊に出てさせ給ふ」。けれども草も刈ることが出來ず、唯横笛を取出し、想夫戀といふ樂をしばし吹き給ふ。牛は耳を傾けて之を聞いてゐる。人々は之を見ると、「おゝおもしろいその山路どの草ばし刈るなふをふけ汝がうしには草をかりてかけうぞよふけよふけといふ程に一度も草をばかり給はず笛打ふいておはします」。

かくて山路は憂き身をかこちつゝ、法藏比丘がぜんじやう太子の時代、あしゆく夫人を戀ひて、王位を去り、東じやう國へ尋ね行き、遂に戀を得たことを思ひつゝ、玉依姫と遇ふ日をこがれておはします。

六段目　都には七月上旬に大地震があり、御門のましまさぬを嘆く占が出て、八月十五日には、宇佐八幡の御前にて、ほうじやうへを行ふことゝなり、その神事を眞野の長者につとめさせる事となる。長者が如何にすべきかを尋ねると、それは「しきしやうこくしやうしんぐわんみや人八人の矢おとめ五人のかくらをのこまいりていとうのつゝみを打さつさつのすゞをふり上げいばあげ馬みこのむらしゝでんがくとをつて後さてやぶさめ候よ」と答へる。やぶさめの外は用事がかなふが、流鏑馬だけが出來ぬとあつて、遂に山路にそれをさせる事となり、それが出來れば長者の婿にするとまで話が進む。山路はいとやすき事とてそれを引受け給ふ。

八月十五日になる。儀式の通り御神事が進んで、愈々流鏑馬になる。それも見事に終ると、神殿震動して、八幡の神邊ゆるぎいで、「王は十善神は九善九ぜんの神の神事を十ぜんの御身としてつとめさせ給へはいよ〳〵五すいおもふなり候今は都へ還御あれ……」と仰せられると、「十ぜんの御身をは夢にもさらに知らずして三とせが間つかい申あさましさよと」恐入り、長者は玉依姫を參らせる。御門は二たび御位につかせたまひ、「そのゝちわうじ誕生あり けるがしやうとく太子是なりけりかのやうめい天わうの御いせいきせん上下おしなべてかんぜぬものこそなかりけり」。

【解說】有名な山路と玉依姫の物語で、用明天皇が親しく眞野長者を訪れ給うて、遂に長者の心を解いて、姫を后とし結ふといふ傳說物語である。

【原據】舞曲の『ゑぼし折』中の草刈笛に關する一節を、殆どまるぬきにしたもので、詞章も多くその儘用ひられてゐる。

【影響】近松作『用明天皇職人鑑』は、之が影響である。

○金平千人切

【體裁】東北帝國大學圖書館藏本。『金平本全集』中に複製もある。小形十七行十三丁。兩面繪四。題簽に「金平千人切」とあり、その左側には「やはぎの橋大かつせん……」と記し、下段に「通油町、井筒屋」とあつて、中央に井桁の紋がある。奥に刊記の下に井筒屋新板とある。

【太夫・刊年】題簽に太夫名もあるらしいが、不明、奥に元祿四年辛未五月吉日とある。

【形式】六段曲、各段首尾に形式句がある。

初段「さても其後國家おさまりたみゆたかなるはけん王……」

文章中には公平とあつたり金平とあつたりするが、題簽と初行には「金平千人切」とある。

【梗概】初段　後冷泉院の御宇、伊豫守頼義天下の將軍たり、義家義宗義光の三子あり、臣に竹綱公平あり、公平は山姥が孫にて、金時の一子、其心ふてきにしてたんりよなる事限なく、鐵壁を碎く大力あり。其他うすいうらべ平井三浦たけち鎌倉などの臣がゐる。

處が世太平にして物淋しく、武人武を忘るゝ間にも、公平は一人武勇を忘れず其力日本一を誇つてゐる。象頭人胴の魔物がまん天之をきくと、高尾山から飛來つて公平の前に立つが、公平は少しも驚かず、やがて雙方格鬪の後、がまん天が天に向つて叫んで、天狗共四五十人を呼びよせ、公平を愛宕山につれゆく。けれども公平は隙間あらば四五

人を引つかんで逃げようとしてゐるので、天狗共も相談の結果、たいとうれん、だいふれんと稱する二振の名劍を與へるから歸つてくれといふ。公平時節よしと劍をとつて歸る。

二段目　公平が歸京して太刀を頼義に見せてゐる所へ、美濃國みかのゝ原くわんれい安丸が逆心の報を傳へる。公平は直に討伐に向はうとするが、竹綱は遮つて、一同が討伐に向ふと、留守を襲はれる計略らしいといふので、先づ洛中を狩ることゝなる。公平は太刀をもつて五條の橋に立つ。深更に至つて身の丈九尺の大男二人現れ、公平を捕へて手玉にとる。危い處へ平井占部が來て敵を川へ投込み、やがて一人を、天狗からもらつた八尺の名劍で斬り、群り來る敵をば、更にすらり〳〵と斬つて、一人の大男を生捕つてかへる。

三段目　生捕つた敵の大男を強ひて名乘らせて見ると、どぶくまといふ。竹綱は彼一人を今更殺したとて、何の役にも立つまいからとて、頼義に乞ふて命を助けようといふと、公平は折角の敵を許すことの危險を述べて、大に不平である。けれども遂に頼義がどぶくまを許すと、彼は恩を謝しながら、歸國も出來ぬ故殺してくれといふが、諌められて、「扨は天の給はる我命かへつてゐざらんは後日のあた敵はあつまにこそみち〳〵たりいかに金平殿さほどむねんに候はゞ三河の國八はしのあなた成やはぎのはしにてさんくわい仕るにて候はん有かたき御こうをん重てほうじ奉らんと」いつて立去る。

四段目　下總上總の大將天のいかづちなる神の大神あくとみとて、入鹿の子孫がある。父なる神が、まとろが池の龍女と契り、大蛇の腹に三十三年やどつて出生したものにて、其丈一丈二尺、額に二の角あり、鬼人と名のり、大力あつて足速く、水練者にて、古今の大力千人を臣として、三河以東を己が所領と呼ぶ。例のどぶくまは彼が臣下で頼

義等を失ふべく出かけたのであつた。

公平は爾來「出仕をやめ浮世の中も氣にくわず」、どぶ熊を矢矧の橋に取殺し、竹綱に見せでやりたく、「どぶ熊にめぐりあふその内は千人切を始わこくのそうとうを竹つなぐんぼうにまかせんと一すじに思ひ極め」、長暦二年五月下旬都を去つて信濃に下る。

第三圖　「金平千人切」　元祿四年版

公平が立出たあとでは、四條五條嵯峨到る處で千人切ありとて都人恐るゝこと甚しい。竹綱之をきくと、之こそ公平の所業なりとして、之を止むべく、一同と彼處此處に忍ぶ。惡とみの郎等なゝくもの石がらんだは公平その僞の男だが、八ぼう頭巾をかぶり、四天王等を討たうとして三條に待かまへてゐる。竹綱うゝ井の二人は之を公平と思ひ込んで、油斷して捕へられ、東に運ばれる。

五段目　公平はどぶ熊の言によつて三河に下り、矢矧の橋にて九百五十四人を斬つて、今や僅かといふ時二人の飛脚が通るを押とめて、持てる七雲石がらんだからの文を見るとそれには、竹綱定景の二人を捕へたから迎へに來いと記されてある。公平は喜んで二人の來るのをまつ。

やがて七雲は竹綱うす井を駕籠に乘せて橋に近づいて、どぶ熊に出遇ひ、捕虜の一人なる竹綱を、どぶ熊に與へる。七雲に別れると、どぶ熊は竹綱を解放して、この前助けられた禮に報ひる。その樣をさとると、七雲は立歸つて、どぶ熊の變心を怒り、組付いて爭ふ。危い處をどぶ熊は又しても竹綱に助けられる。竹綱とどぶ熊とは進んで八矧の橋にて、うす井を奪還し、三人は更に東に向つて進む。その間に公平は敵の八十三人を殺す。

六段目　やがて三人は矢矧の橋にて、公平に出遇ひ、とぶ熊と公平とは先づ打合ひ、公平は九百九十九人（前に九百九十四人、後に八十三人、それでゐて今また九百九十九人といふ、まことに勘定が合はぬことだ）斬つたから、千人目に汝を斬るのだといふが、此時竹綱は、どぶ熊の案内で敵將を斬りに行かうといひ、公平もどぶ熊の變心を喜び、連れて東に下る。之をきくと惡富の軍は進發し來り、大戰鬪の後、公平は惡富と組み、頼義軍も攻來り、どぶ熊も加勢して遂に敵を殲す。

【解說】　公平の矢矧の橋に於ける千人切が中心になつてゐるといふものゝ、それは牛若の五條橋に於ける千人斬から思ひついたもので珍らしくもない。其他文も幼稚で、仕組も貧弱、全く元祿期のものとは思へぬものである。果して元祿初年の作であらうか。『金平本全集』解說には淨瑠璃正本でなくて、繪草紙の一つとして刊行したものだらうとあるが、或は單なる讀物であるかも知れぬ。

【出處・原據】　最初の千人斬は云ふまでもなく、指鬘外道の名によつて知られてゐる央掘魔羅が師の命によつて千人を斬らうとして、釋尊が丁度その千人目であつたといふ物語に出たものである。そしてそれは『央掘魔羅經』卷一、『雜撰譬經』卷一等に見えてゐる。此物語が延寶七年刊『牛若千人切』などに取入れられ、本曲はそれをまねたのである。（二一八頁參照）

○源氏六十帖

宇治加賀掾正本

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十八行十丁半。細字にて讀み難く、奥に八文字屋八左衛門板とあり、柱には「新石山」と見える。又初行内題下には「水うみの八景、けいせい情の湊」の句が二行に書かれ、原内題はけづられたものゝ如く、下部に太夫名がある。題簽には中央に『源氏六十帖』と大書され、その左側に「けいせいおうしう道行、宇治加賀掾正本」とあつて、下段に「ふや町通、八文字屋、八左衛門」と三行にかゝれてゐる。『德川文藝類聚』第八にも收む。

【挿繪】 見返に「傾城あふしう道行」の人形を、舞臺中央から見物席の中央に設けた花道でつかふ繪あり、此外に『德川文藝類聚』所收の繪と、石山寺にて紫式部が湖水を見てゐる繪と、更に「あふしう一念のあらはれ」の繪がある。

（東京帝大藏）

【石山寺開帳】 半紙形繪なし、八行四十五丁本『石山寺開帳』は『源氏六十帖』と大體同文である。然し唯『石山開帳』といふ十行本は、『石山記』の改作で、『石山寺開帳』とは全く異物である。

【太夫・刊年】 本曲の内題下にも宇治加賀掾正本とあり。元祿四年夏石山觀音再興開帳にあたり、原曲に手を加へたものだと『近松全集』に記されてゐるが、傾城奥州を入れた點からいふと、それほど早いものか。それにしても石山寺開帳とどちらが早いのであらうか。

【形式・曲節付】 三段曲、第一、二、三に分たれて、最初に「扨も其後」があるだけで、他の段首には形式句はないが、段尾にはそれがある。

初行「扨も其後事もおろかや江州石山寺の觀世音と申はそのかみ紫式くわうてい……」

第二段に「水海の段」、第三段に道行がある。

（返見）「源氏六十帖」 加賀掾正本

【梗概】 第一 上東門院が頭痛の御惱の時、珍らしい物語のお望があり、紫式部へと御下命があるが、式部が遠慮すると、右大辨國丸と衛門介信高とが交々勸める。ところが國丸は式部を戀して報ひられず、信高は式部から戀ひされてゐる。乃ち國丸信高の間に爭があるが、門院が靜められた處へ、博士廣純が奏し、門院の御惱は、前生の白骨が如意嶽の頂に殘つてをる故だといふので、信高が其白骨取除の爲に、人力の及ばぬ如意嶽に上る。けれどもそれは國丸が信高を殺さんと計略だつたので、信高が嶽頂に上ると、國丸は頼みの藤かづらを斷ち切る。其時臣の隼人の介は助けに來て、信高の

父が國丸に殺されたことを傳へる。信高は乃ち石山觀音を念じて嶽頂から飛降り、都に歸つて國丸を討たうとするが、國丸は信高を讒言して、放蕩の果に父を殺したといつてゐるので、ほういやう五郎は彼を門内へ近づかせぬ。信高は悄然として自害を思ふが、隼人の介は此時、力を盡して信高を勵ます。「武士の家名は末代も殘る成に我計かはお主迄朝敵の惡名をとらせ給ふのみか、肝じんの親どの敵討ずに……」と忠言を盡して諫めると、御所の門を守る五郎も感心して、二人に加勢するので、主從は一旦落ちて父の仇國丸を討たうとする。

女院の御ぼたい所安居院の法印は信高をかくまふ。丁度信高の父正信の一七の法事とて、流灌頂の由來を說いた處へ、例の五郎が見舞に來る。そして出家姿にされてゐる信高を見て口惜しがり、法印に怨言をいふが、信高が帽子をとれば昔の姿である。五郎も安心して、信高に味方し國丸を討たしめようとする。

第二　信高に焦れてた紫式部は、信高の行衛がわからなくなると、法印をたづねて、心の中をあかして行衛をきくが、曖昧にして敎へぬ。式部は悲んで池にはまらうとする。それを見ると、人を助くるは菩薩の行、佛も許さう「ましてや二人の戀がなければうきもなし、の給ふ如く此寺は女人禁制の地なれ共、今日は女人ほうらくじや、こりや旦那とつてゆけ〳〵〳〵しなさやむまいな」と法印は歌拍子で、信高を引合せようとする。五郎は、そんなことで親の敵を信高が討てるかと罵る時、式部は飛出して、五郎の刀を引拔いて「女が男にほれたといふはよく〳〵思ひあまつてなり、……かやうにしたふ心の内ふびんとも思はず、戀のあだなす其方が身をたしなみて云たがよい」とて、五郎と式部の乳人卯の花との縺れ合をすつぱぬくと、五郎も閉口して謝罪し、信高と式部との仲をとりもつことゝなる。

そこへ式部の父元高の執權小濱の新五友春と、乳人卯の花の侍從の兩人が來て、信高と式部を迎へに來たといつて連れ歸らうとすると、五郎は反對して、彼等は國丸の内通者にて、信高を討つて式部奪取の手段だとすつぱぬく。果して議論の果にさうとわかり、五郎は敵を討拂ひ、「誠は我人間ならず、石山寺に年久しき近江丸と云白狐、執權はやと石山寺にこもれば佛の大慈大悲にて、災難を救へとて、觀世音の佛勅にまかせ、ほうせう五郎に姿をかへ、今の難儀は救ふたり」といひ、ついで、數多の狐が式部を迎へに來て石山寺へつれゆく。

水海の段　（此處に此句があつて、以下全く『源氏供養』の第三段と同文を取入れてゐる。）　つまり式部が湖水を見てゐる中に、源氏物語の想を得て、直にそれを須磨明石の卷として書きつけたといふのである。

第三　さていよ〳〵六十四日かゝつて、紫式部は『源氏物語』を成就すると、あぐゐの法印をして判定せしめ給ふ。法印が讃嘆すると、「末世の寶とて、加茂の大いつきの宮へつかはされる」。

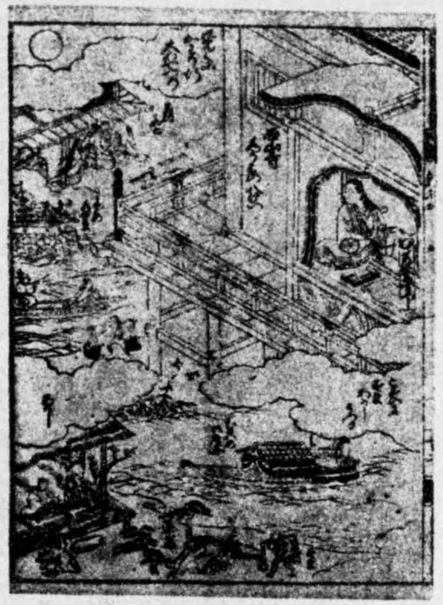
そこへ五郎や信高が來て、信高が勅勘を蒙つたのは、全く讒者の爲だといひ出すと、右大辨國丸との爭となり、對決となつて遂に國丸の罪が暴露し、彼は鬼界が島へ流される事となり、紫式部と信高とは、目出度結婚させられる。やがて石山開帳を機會に供養の爲に石山寺へ御幸がある。

道行　「うきおもひ胸にたく火のしばや町……」としばや町の遊女奧州の怨の道行である。

さて門院たち御堂に御座しますところへ、人目を忍ぶ辻籠にて、しばや町の遊女奧州が來て、彼女をすてた信高に對して、散々の恨み言をいふ。紫式部が場所柄を說いて罵つた處へ、又しても遊女零浦が來て、怨事をならべるかくて「かい帳はわきへ成、客爭ひのつめびらき、しつかい揚屋の坐敷」の樣になると、信高も遂に怒つて、遊女達を

もてあまして追拂ふ。

その夜お通夜となつて、女官達一同が内陣にこもり、式部信高も物語の反古製の紙帳に入ると、夜中に至つて、奥州琴浦の二人の一念が、有し姿をそのまゝに現れて、信高を惱ます。門院の御沙汰にて、住持と安居院法印が「りやつこうふしぎの大海に、こう大ちゑの波の音……」と祈りのける。遂に信高の夢がさめる。「是といふも石山の大ひさつたの御きずい、佛法繁昌天長地久めでたかりける御代の春べと、ぱん民歩みをはこびける」。



加賀掾正本「源氏六十帖」

【解説】『源氏供養』の大筋をとつてはゐながら、第一二段は殆ど紫式部に對する右大辨國丸の戀が中心といはふか、信高を戀する紫式部ほしさに、國丸が信高殺害の謀策をのべ、第二段の後半に至つて、僅に式部が源氏物語の構想を得る水海の段を敍し、第三段の前半は國丸の罪惡暴露の場に中心をおき、後半では信高の昔馴染の遊女奥州と琴浦との怨言を中心として、信高が怨靈にたゝられるを祈りのけることになつてゐる。改作とはいつても本曲に於ては全く時代の姿があざやかに現れてゐるといふべく、殊に傾城二人を擔ぎ出して、艶めかしい情趣を描いたり、元祿式の紫式部にされてゐる點が、著しく注目をひくと思ふ。

【出處・原據】『源氏物語』から出て『河海抄』、謠曲『源氏供養』、延寶四年の『江州石山寺源氏供養』によつてゐるといひながら、傾城奥州の關係からは『傾城璣間嶽』とも關係をもつてゐる。

○石山寺開帳

加賀掾正本

【體裁】帝國圖書館藏本。東大國語研究室にも所藏。半紙形八行四十五丁。繪なし、以上の内題下に正本太夫名あり、終に別に奥書もあつて、二條通寺町西へ入町山本九兵衛刊とある。

【太夫・刊年】初行及び奥書に加賀掾の名が見える。けれども刊年はない。『外題年鑑』によると、野田若狭、富松薩摩の語物とある。前島春三氏藏八行本の奥には、富松薩摩と宇治宮内の名が載つてゐる。

【形式・曲節付】上中下の三段。上之巻の段付の處に、上の字は見えぬが、次には「須磨明石巻、中之段」とあり、更に「下之巻」とあつて、その中に、「けいせい大州道行」の別行が終に近くある。

曲節付はあるが大序には何もない。

上之巻「事も慰かや江州石山寺の觀世音と申は往昔聖武皇帝天平勝寶六年に御建立有其後孝謙天皇の御宇に丈七の尊像をあらたに作り……」

かうして上之巻から、段首には形式句が無くなつてゐるが、『源氏六十帖』には、大序に「扨も其後」がある。形式から見ると、殆どこれと同文である『源氏六十帖』と比べては、この方が後のものゝやうでもあるが、もし本正本が元祿四年夏の石山再興の開帳をあてこんだものとすると、この方が早いやうにも思はれる。

須磨明石卷、及び傾城大州道行の節事がある。

○子四天王指物揃

【體裁】 帝國圖書館藏本。又古觀文庫にも藏す。小形十六行十五丁。題簽なく、初行に以上の題あり、奥に「うろこかたや新板」とあり、又柱に「指物」とある。古觀文庫藏本も同版であり、これは題簽もあり、それに『子四天王指物揃』とあれど、後版と見えて、挿繪が二丁少く從つて全丁數十三である。

【挿繪】 挿繪兩面六あり、第一の繪では、「きん平十四才」とあつて大石をもちあげてゐる。第二の繪では、すゞかの大臣時丸と大しが原將けんとが切り合ひ、第三の繪では、金時や渡邊が清涼殿にて、關白の前で歌をよむ。第四の繪は、頼光の前で四天王等が先陣をあらそひ、指物揃の所。第五の繪は、「するかの助くむ所」とあるが、相手は公平らしい。第六の繪は金時が大きな棒にておに丸をひしぐ所。繪の數も兩面物が六あり、畫樣は元祿以前のものと思はれる。

【太夫・刊年】 共に不明ながら、挿繪や版式等から見ると、元祿前のものと思はれる。そして第四段にて、此曲の主人公時丸が加賀の白山城にこもつたことを述べて、その城には三年前に、立花の尼公が立籠つたことが記されてゐる。立花の尼公の立籠つた白山城の戰といふのは、天和貞享頃の『四天王女大力手捕軍』のことであるから、本曲は『女大力手捕軍』の上演された後三年、即ち貞享頃か元祿始頃の上演乃至刊行のものと推定してよいかと思ふ。殊に三段目に於て、金時が和歌を詠じてほめられると、平和になつて武人が和歌などを詠ずるのは面倒だといつて歎じてゐる處から見ても、寛文の公平物流行期から大分後のもので、公平物が漸く變化して來た頃のものであることを知るに足ると信ずる。

又『四天王女大力手捕軍』が和泉太夫物である關係からも、和泉太夫の語物かと思はれるが、明言は出來ぬ。

尚古觀文庫藏本の題簽左側には「江戸、、太夫正本」とあつて、太夫名は削られてをれど、和泉太夫正本らしく思はれる。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句があり、首尾は次の如くである。

初段「さても其後それ天地るんやうわがうにして四方はうかくのたいをかんがみるに、そのかたち五りん五たいにして、人げんこのたいをうけてといふものひとりもなし、されども五ぞやくのあくは月のおもてに立かゝるあくうんにひとし、こゝに仁王六十七代のみかどをは三條の院と……」

曲尾「都をさしてがいぢんみるかの子四天王のういぢんほめぬものこそなかりけり」

曲節付はないが、四段目に指物揃の節事がある。

【梗概】 初段　人皇六十七代三條院の御時天下の武將を頼光といふが、頼光老年に及び、綱、金時、季武、定光、平井の保昌も四十餘歳になり、其子竹綱十五、公平十四、定景十五、季宗十六、平井の鬼同丸清氏は十七歳になる。頼光一日四天王の子を招かしめて對面する。そして金時の子惡太郎は命ぜられる儘に、七八十人の力を要する石を引提げて、竹綱にわたし、竹綱之を頼光の前へ運ぶ。かくしてつぎ〳〵と石を運ぶ。さて大師河原の將げん宗高と其弟やしや一丸とは力を誇つて公平等と競爭するが、二人共面目を失するに反して、子四天王等は競爭に勝つて、大に頼光

を喜ばす。

二段目　大しがはらの將監兄弟は不面目を嘆き、すゞかの大臣時丸を語らひて逆心をすゝめ、僞文を認め、賴光の判をにせ、都落して東路にしのぶ。鈴鹿の大臣といふのは入鹿の末葉にて、其丈八尺、關八州の大將たり、その弟を鬼丸といひ、一層丈高く、共に入鹿に劣らぬ曲者である。其從者には金剛の大王入道、雲山千りうの大かう坊といふ二人の法師がある。其他に八劍のくわいりん、てるひの源五正友、入日の八郎等が從ひ、更に關八州の旗頭、二階堂駿河守忠信、坂東伊賀守公春、東山大膳のすけ國廣、大野のとうにん忠兼等が四頭と呼ばれ、補者の任をつとめてゐる。鈴鹿の大臣は關より東に覇をとなへ、賴光に楯をつくべく廻文を廻すと、越後國五十嵐の平內左衛門以下數多の大名が三十萬騎を率ゐて集る。（集るものゝ名が十一行もあげてある）。そこへ大師河原の將監が賴光の僞文をもつて時丸の前へ出る。そして時丸と一味せんとしたが、案に相違して時丸は將監の態度を怒り、鬼丸と共に將監宗高を軍神の血祭にそなへて、白山の城にたてこもる。

「于四天王指物揃」　第二圖

三段目　其後六月十五日に、都に雪降るふしぎあり、朝廷には賴光を召して評定されると、從つてゐた金時は「時しらぬ雪はあくまで白砂におのれときへて氣にもかゝらず」と詠じて賞讃される。と公平は此頃戰が止んで武人がすたれ、公卿となつたことが面倒だといふ。渡邊綱は此時、「日月の兩輪の車めぐり來て、みゆきの庭のながめとやなる」と詠ずる。そこへ越前の住人篠崎判官高元が、時丸の叛逆を訴へて來る。公卿達が驚く間に、賴光は笑つて戰亂鎭定を引受けて邸に歸り、勢揃をする。

四段目　賴光二條の城に歸つて一同と軍略を相談すると、「渡邊承り、上意の如くあの白山の城と申は此三年以前立花の尼公せんわう丸やばとみのうばつらがこもりたる立花のとうのことなり、やすがきつきたる名城にて、よせ口心にまかせず、敵に八十分の勝有つて身方に勝利わづかなり云々」といふと、金時は渡邊を罵つて、「過し立花が戰にもゐしれぬ女に打たてられ四天王一代の手を取たり……」臆病ではいかぬから、金時が先陣を承らうといふ。かくて爭の後遂に子四天王に初陣させることになり、賴光も大に喜び、子四天王を呼び、それ〳〵に旗印を渡す。「先一ばんに春ならねどうすがすみに小ざくらおどしの腹卷に紺糸縅の大よろいはしだれざくらのさきかけて今を盛のさしものは、吉野の山はつせなるその名は高き山ざくら……軍に花をちらすべしと渡邊の竹綱にこがねつくりの御太刀そへて源五父子に給はりける」。それから公平、定景と順次に一同へ指物を給はると、一同は今度は先陣を爭ふ。それを見ると「賴光御きげん限りなく、おやの子とて公平が父に似たるあらぎのてい、竹つながおとなしき申ぶん、賴光がたからは彼等五人と御悅はかぎり父四天王にも御指物給はつて、長和二年七月二日に花の都を打立加賀の國へとよせにける、かの四天王親子の心の內うれしき共中々申ばかりはなかりけり。」

五段目　源氏方では加賀の安宅をすぎて小林に陣取り、綱は子四天王を招いて、色々と軍法軍略をさづける。やが

て互にひそかに策をめぐらして先陣を企て、遂に公平がそれに成功する。

六段目　兩軍の接戰になつて敵の鬼丸は大活躍をするが、遂に首を討たれ、時丸や四頭等が逃出すを追かけて討平げる。

【解說】三段目にもあり、刊記の條にも述べたやうに、此頃戰がやんで太平久しく、武人がすたれて和歌など詠ずることを金時が歎じてゐることから見ても、寛文延寶以後、公平物の傾向が漸く變つたことを知るに足る期のものではあるが、內容は唯鈴鹿の時丸が關東に覇をとなへようとした時、子四天王が金時の指圖によつて戰ひ、公平が先陣をなして、遂に一同で之を滅したといふまでの、純然たる公平物である。

勿論四段目に指物揃といつて、賴光が子四天王等に、出陣に先だつて旗印や武具を授ける處が、美辭でつゞられてゐるから、之を外題としたに過ぎないのであらうが、子四天王が白山の城に初陣をするからといつて、之が子四天王物の最初の曲であるとはいへない。既に萬治寛文期のものにも『子四天王始』といふ曲があることを記すべきである。

【原據】原據といふほどのものでなくても、兎に角白山城の關係や、戰法などから、『四天王女大力手捕軍』と色々の交渉があり、初段に於て子四天王等が大石を持ちなす邊りの趣向は、既に前にも見られたことである。

○公平伊勢參（神道ぎの一ちん）

【體裁】紫蘭文庫藏複製本、頗る珍らしいもの丶一。小形十六行十丁。初行に上の如くあり、卷尾には版元もないが頗る木版が惡くなつてゐたと見えて、刷がおどいものである。挿繪は兩面三。柱に「いせ參」

【太夫・刊年】共にわからぬが、版式からは少くも元祿頃であるが、內容からは寛文頃までも溯れるだらうか。

【形式】江戸本に珍らしく五段曲、それで完結してゐるが如く思はれる。各段首尾に形式句あり、二段目に神おろし。

初段「さても其後、つら〳〵大千せかい天ちくから日本三つ合三國と名づく……としてつれにすいはのへだてなく佛法神道兩わにして……」

【梗概】初段　賴義の四天王等が集り、十月の猪の子の意義を語つてゐる時、竹綱が「神道の國に生れ、みかどと申もみな是かみにあらずや、君といふも是せいわ天皇の御すへ、さあらは是じんむ天王の御ばつせ、是神ならずや……」といつて我國と神との關係を說き出すと、公平との間に神道問答となり、遂に公平は「いせに參宮して神道のふしぎ」を拜せんといつて家に歸る。

二段目　公平はいやがる阿部晴明を案內として伊勢に參宮すると、川を渡らうとする時、大蛇が十二の角を振立て、紅の舌をまき、眼を日月にひとしく車輪の如く光らして、行く手を遮ぎる。之ぞ大神宮に敵たるものならんと公平が斬つてかゝると、首は伊勢の國あきゝの山の大天狗だといふ。更に進むと二丈計の鬼神が限りなく旗戈を橫へて遮る。公平一々之をへこませてしまふ。乃ち鹿島の神の指圖にて「とかく神力を合たばかつてもの見せんみな〳〵神いくさをやめ給へ」といふと、空俄に晴渡る。

三段目　公平は明星が茶屋につく。此處　けがれをきよめる所なるが、やんごとなき女房數多出て公平を樣々にも

てなす。ついで衣冠正しき神主が鯛を携へ、女は長柄の銚子をもつて出で、御酒をすゝめる。公平は喜んで酒を頂き甘露だと喜び、神主に舞へ、舞ひそこなへば「公平が五尺八寸の太刀にて劍の舞を舞いて見せん」といふ。神主は釣竿に鯛をまき、扇をとり、「そもめでたいの魚をつるゑびす三郎とは我事也、心もきよきせいてんつくしの浦やせと〳〵になにはのうらよりふねにのりかいていにこぎ出す……」と魚の名をならべて舞ふ。公平更に汲みながすと、「さかきのとその酒五そうをあらい魚鳥しゝむし……公平が口より我さきにと飛出る」、と公平は一切のけがれを祓はれて有がたやとて、今までは神に對して疑の念をもつてゐたのが「うたぐりの惡ねんゆるさせ給へ、いせの神がきと手を合するとひとしく神主と見へしは伊勢天照皇大神の三男ひるこの命其御子は西の宮の若ゑびすわれ也女性と現し給ひしは月よめ日よめすゞかのみや……やはたの神れいをしらしめんと公平がゑひふしたる枕の夢に現れ給ふ。晴明は公平の非禮を許し病をいやさせ給へと壇をかまへて「きん上さいはい〳〵うやまつて申……」と祈る。六十餘州の神々を神下ろしする。やがて公平病いゑて、謹んで神道を敬ふ。

「公平伊勢參」（紫蘭文庫藏）

四段目　公平は伊勢に參宮して敬神の念をふかめ、神々の集る出雲の大社に詣でんとて晴明をつれて進む。先年父猪熊らいけんを討たれ鈴鹿山に隱れて、仇討の時をまつてゐた猪熊の二子鬼やだ友竹、鬼ばら大膳二人は、背て羽を討たれて恨とする大山伏大山と謀つて、大社にてまち、病後で弱つた公平を三人で討ち首をとる。

五段目　晴明が逃げ歸つて、公平は伊勢で神罰を受けて大病だと語ると、定景、すへ宗、清氏等が樣子を見に出かける。そして歸り來る伯耆の大山といふ山伏と猪熊兄弟を途に見つけて打滅し、都に歸る。

【解說】　現實主義的怪疑的思想の公平が伊勢參宮をして、神威に感激し謹嚴なる敬神家となるといふ三段目で、話は終つてゐるが、後半は猪熊兄弟が父の仇を討たうとして出雲大社參詣の公平の首をとるといふのである。最後の五段目の地理的關係に矛盾があるやうであるのは、此時代のことゝして許し得るとしても、公平が本當に仇を討たれるとか、殺されるとかいふのは、今までの所見の公平物中此一曲だけである。公平が死んだと趣向して、公平物が急に衰へ出し、再び公平が蘇生した趣向の作を出したとも傳へられてゐるが、それは何でも寛文期のことかと思はれる。

それに公平物の中にて、五段で終つてゐる本曲は頗る珍らしいと思ふ。

○法華經守護

出羽掾正本

【體裁】　東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十七行十三丁半。初行には「日蓮上人御誕生」とあるが、題簽には中央に「法華經守護」、その右側に「ほつけきやうしゆごきしぼじん」、その左側には「日れん上人たんじやうきずい、

出羽掾正本」とあつて、下段に「三きばし筋、ばくろ町かと、吉身屋、藤九郎」と四行にかゝれ、更に右側表紙の中央に小貼紙があり、丸に笹の紋の下に、右側に太夫出羽掾、左方に「上るり、濱本七兵衛」とあり、今一人の太夫に「岡」の字らしいものが見える。岡本文彌とあつたのではないかと思はれる。挿繪は兩面三、片面三、更に奥にも正本屋藤九郎板とある。

出羽掾正本　「法華經守護」

【太夫・刊年】　內題の下にも題簽にも、出羽掾正本とあつて、奥に元祿四未年菊月吉日とある。

【形式・曲節付】　五段曲、第三段の首以外には皆形式句あり、各段尾にも形式句がある。曲節付は豊かにある。

【梗概】　第一　法華經の守護神として立る鬼子母神十羅刹の因緣を尋ねると、釋迦在世の頃、大雪山の麓そうかいの邊りに、一人の鬼女がゐた。名をかりてい女といふ。之が後の鬼子母神である。阿修羅王の妻として一千人の女子を生んだ。その女子の中に彼女が寵愛するものが十人ゐた。之を十羅刹女といふ。その最も末の子をひんぎやうといふ。年三歳、かりてい女は殊に之を愛する。

慮がかりてい女は子が多くて、養ふに困るといふので、神通力を利用し、時々人の子を取つては空を飛んでもち歸り、之を常食としてゐる。

その頃まかだ國の傍にはうまんのたいそうといつて有德の長者があり、その子にきんきやう姫といふ美人があつた。夏の一日はうまんが酒宴を催してゐる處へ、忽然鬼子母が空から下りて來て、七歳の姫をさらつて去つた。だが突然の事なので、一家の人々は姫が何處へ行つたのか知らない。博士に占はせると、噂の主人公鬼子母が取去つたのだといふので、父の長者は、姫を取返すべく雪山に出かける。長者の妻は、妙法華經を鷲鷲山で說いてゐる釋迦の處へ、姫を取返してくれと賴みにゆく。同情した釋迦は目連尊者の手から瑠璃の鉢を受け取つて、一言「妙法蓮華」といふと、鉢は空に舞ひ上る。釋迦は姫の母に向つて、つま子の身を案ずるならば、絕えず「妙法蓮華」と唱へよといふ。

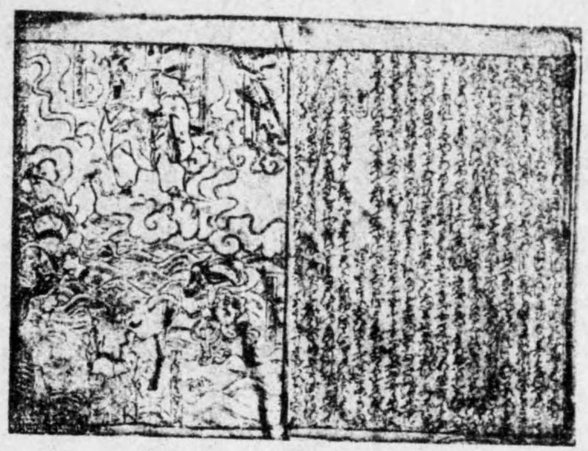
空に舞ひ上つた神通の鉢は、大雪山に飛んで、池へ落ちると、車輪の如き蓮花と咲いた。折から池の邊で遊んでゐた鬼子母の末子は、此蓮花を取らんとして花に乘る。忽然谷風が吹いて、根から折れた花は、ふわ／＼と空中に舞ひ上る。上りつ下りつして、花は遂に鷲鷲山に到着する。釋迦は子供をあやしながら、汝の母の邪慳を直さん爲に連れて來たのだから、心配するな直に歸してやるといつてすかす。鬼子母は我子の行衛のわからなくなつたので狂氣になつて追ふ。

第二　鬼子母のかりてい女は三十三天をかけ巡つたり、龍宮に行つたりして尋ねるが、我が子の行衛は分らぬ。

まかた國のはうまん長者も、姫をさがすこと七十日にして、北天竺のかうゑん山につく。同樣に子を奪はれて尋ねてゐる中天竺舍衛國のふみやう長者と、はらない國のけんた長者に出遇ふ。末の娘を探してゐる鬼子母も三人にぶつかる。三人から同情されて、彼女は自分の名がかりてい女であることを語ると、三人は子の敵だといつて打つてかゝる。大格鬪の最中へ、神通力の目連尊者が來て、かりてい女の娘は釋迦の處に居ると敎へ、空から子供の衣を舞ひ下

らせる。

第三　鬼子母が釋迦の前に到つて、子供を返して貰ひたいといふと、釋迦は誰もが自分の子の愛に引かれることを說いて、汝が他人の子を悉く返せば、汝の子を返してやるといふ。處が自分には子供が多くて、他人の子を食はねば生きる道がないと答へ、行乞して生きるの道を敎へてやるからといはれると、鬼子母は忽ち他人の子を返して我子を貰ふ。そして十羅刹女もろ共、今後は法華經の守護者たらんことを誓ふ。「法華經の守護十羅刹女の由來是なり」と、此處で此段の前半が結んである。



「法華經守護」（東京帝大藏）

此段の後半に於て、釋迦は妙法蓮華經は諸經の王也といつて、上行、無邊行、しや行、あんりう行四菩薩に向つて、その功德を說き、上行菩薩に之を守れといふ。說經が終ると、上行の足の下から紫紺の蓮華が生じて、上行は空にのぼる。やがて日輪の光天下ると思ふと、上行は日の內に入る。かくて二千年の間くる〳〵巡つて、我日本に來り、末法法華の大とうし日蓮上人とならせ給ふといふのだが、繪を見ると、「上行菩薩の形蓮華となり、胎內にやどり給ふ、後に日蓮上人と成り給ふ」と記されてゐる。

第四　此段と次の段とは、日蓮が生れてから、例の法難までを說いたものである。

日蓮が生れて、やがて東條山で法華經を學ぶ中に、不思議な女が出て來て、彼の說法を聞きたいといふ。それを知ると、師匠の本覺坊は、異說を唱へ、殊に女人に近づく不都合ものとして、彼を殺さうとする。法華經の功德を解するちくご坊は日蓮をかばつて、自分の腕を切られる。庭前の柳の木は大蛇となつて、本覺坊に食つてかゝる途端に、本覺坊は足をふみ外して、石で頭を打つて死ぬ。ちくご坊が日蓮を助けて逃れてゐる途中に、空中から大蛇が追つて來て、ちくご坊の腕をついでくれる。大蛇は柳の精であり、法華經の功德で成佛した女である。

第五　日蓮は清澄山に逃れて、東條山での遭難を物語り、此處で日蓮と號し、ちくご坊は日朗と名乘る。その後日蓮が說敎してゐると、例の東條の地頭東條景信は、日蓮を見つけて危害を加へようとする。逃げて鎌倉に渡らうとすると、舟の中で龍王が現れて、「忝くも君は釋迦佛本化の大薩埵上行菩薩の再誕生なり、末法の今に至つて、法華經を廣め給ふ時此本尊を奉れとの佛勅を蒙りし故二千餘年の時をまつて、只今渡し奉る、尙法華經を廣めさせ給へ」といつて釋迦の像をさゝげる。日蓮再び東條の追跡に遭つて苦しむ處へ、例の鬼子母が現れて、東條を押へつけ、十羅刹女は彼をさらつて天へ上る。鬼子母は即ち佛に對する約束を守つて、法華を守護するのだと物語る。

【解說】　要するに前半では、人の子を食つた鬼女が、人間を愛し法華經に感化されるに至る物語を說き、後半では、法華經の宣傳者たる日蓮の力を說いた所謂佛法の功德靈驗物語であつて、此間到る處に、機巧や糸操が盛に用ひられてゐることが目につく。

【出處・影響】　前半の鬼子母神の由來は、同じ太夫の『鬼子母神』から取られてゐるか、それと同物であらうが、

もと〳〵『一切有部毗奈耶雜事』卷三十一や『鬼子母經』などに說かれたもので、後半は日蓮傳である。江戸版『鬼子母十羅刹女の由來』は此系統のものである。日蓮傳としての影響は、一寸記し切れぬほどある。尙承應の『日蓮記』（『慶長寛文篇』三五四頁）、寛文の『日蓮記』（一〇三七頁）、『鬼子母神』（一一〇〇頁）等參照。

○女人即身成佛記

加賀掾正本

【體裁】半紙形八行四十一丁。之と同內容の義太夫正本は『大覺僧正御傳記』と呼び、八行五十一丁、九兵衞版である。本曲に多少の增補を施したものが義太夫正本であり、それは『近松全集』に收む。

【太夫・刊年】本曲には加賀掾の名があり、近松全集には加賀掾正本も義太夫正本も、殆ど同時の興行であらうといひ、「元祿四年十一月十三日京都妙顯寺にて、日像上人三百五十年忌法事あり、之に因みたる出し物と覺ゆ」と記さる。成程大覺僧正の師たる日像上人傳を『花洛受法記』として公にしたのが、元祿二年であるから、本曲の上演は大體元祿四年頃かと思はれる。

【形式】五段曲、各段尾にのみ形式句がある。第四段に「あまよのまへ道行」がある。

第一「自證無上道大乘平等法、もし小乘をもつて化する事乃至一人におゐてもせば…」

『大覺僧正御傳記』には、此前に凡一行ばかり別の文がつけてある。

【梗概】第一　前攝政近衞經忠の息月光君は、十五歲にて父に別れ、繼母に憎まれて嵯峨の大覺寺にかくれ、七月の精靈會に際し、回向の爲の經としては、何を讀むべきかを僧正に尋ね、法華經に如くものがないと敎へられ、大覺寺の廟所にて、深夜自我偈を誦すると、「山中の諸石塔皆一同に動き出し、月光と同音に自我偈を讀む」のみならず、樣々の不思議があるので、月光は益々法華に身をゆだね、愈々衆生利益の志をかためる。

繼母は月光の家出を喜び、我子雨夜の前を愛し、遂に家人平井大炊介、同一角兄弟に月光を殺させようとする。兄弟は驚いて僞り諾する。兄弟は此命を受けて、互に其心を疑ふて爭ふが、共に忠義の心から和睦する。そこを通り合せた日像上人は、事情を知つて、二人に月光を我寺につれて來させる。

第二　「兄に從へば親への不孝、母にたよれば兄弟の道たゝず」、即ち自ら兄の身替になる外ないと知つた雨夜の前は、罪深き女人の後世を賴むとの遺書を、上人の寺に投込んで身をかくすが、いつか備前の住人兒島三郎高則といふ武士に救はれて、其家にかくまはれる。

月光も平井兄弟も、共に日像の弟子となつて出家してゐるが、妻になる筈の雨夜の前に逃げられた鹽谷左京時平は、怒つて月光等を攻めて、大爭の處へ、父の忌日だとて參詣に來た高則が、二丈餘の材木を振つて敵を追拂ふ。

第三　時平は又、高橋半平といふ浪人を、僞勅使として、月光、日像、平井兄弟、兒島三郎等を捕へて、播磨灘の海中に沈めて殺さんとするが、折柄千尋の大蛇が現れて、船をゆり碎き、却つて警護の武士を皆溺死させる。そして二個の牢輿は無事にて、月光等は見事に助かり、兒島三郎の鄕里備前兒島に庵室を結びて住むことゝなり、月光は剃髮して大覺と名乘り、平井兄弟は知覺正覺と呼んで彼に仕へ、高則は宗敎信仰の眞髓について敎を受ける。こゝに即身成佛、女人成佛、煩惱即菩提などの長々しい說法がある。

第四　姬は高則の妻と共に、寺に高則を訪ねる。あまよのまへ道行。

其後時平は雨夜の前を、北野にて見つけて、家に連れ歸つて拷問する。母が之をたしなめると、時平は怒つて母を殺し、姫も殺してしまふ。處が殺された姫は忽ち龍女となつて。曼陀羅の力によつて時平を悶絶せしめる。

第五　延文年中大旱魃の際、勅命によつて日像は祈禱をこらし、其際雨夜の前は「我本人間に候はず、長く蛇道の苦を請し龍女にて候が……朝暮拜する曼陀羅の、妙法蓮花の功力により、變成男子疑なし、此報恩に今此度、雨を降し妙法の威力をあらはし申さん」とて、大に雨をふらす。即ち宗祖日蓮には大菩薩を、日朗、日像には菩薩號を、大覺には大僧正の號を賜ふ。

【解說】『花洛受法記』の姉妹篇にて、月光即ち後に大覺僧正の傳記を中心として、彼が繼母から受ける迫害と、其異母妹雨夜の前の龍女となつての女人成佛記とを、之にからませ、その間に法華經の功德を說いたものである。

○柏崎

【體裁】半紙形八行三十九丁、奥附を缺く。『近松全集』第三にも收む。

【太夫・刊年】『外題年鑑』にも加賀掾の語物と記せど、正本の奥附が缺けて不明である。然し『近松全集』所收のは、曲節付から見ると義太夫正本らしい。刊年も削られて、「仲冬吉祥日」の字をのこし、竹本座では、元祿五年正月二日から上演したことになつてゐるが、加賀掾はもつと前に上演したものとされてゐる。

【形式】五段曲。各段尾には多少の形式句がある。第四段に「みだい所の道行」がある。

第一「月明かならんとすれどもふうん是をおほひ……」

【梗概】攝津せいふの城主入間左衛門は鎌倉在番中、謀叛を企て、越後柏崎城主兵部太夫清政に同心を迫つたが、應じないので、讒言して詰腹を切らせ、更に討手に向ふ。清政の臣遠藤小太郎は、奥方と花若花姫をつれて、海路を上洛せんとする折、入間の郎等に攻められて奮戰中、奥方も二子も人買の毒手にさらはれてしまふ。

やがて二子は越前大野の荒鉱庄司に買はれ、『山椒太夫』の二子同樣の悲慘な生活をする中、忠臣、小太郎小次郎兄弟と、義士秩父十郎の努力によつて、父の仇を討ち、主從母子再會して再び榮華にかへる。

【原據】謠曲『柏崎』及び、『山椒太夫』によつたものである。

○雪　女

竹本義太夫正本

【體裁】大阪府立圖書館藏本。帝國圖書館にもあり。半紙形八行四十丁、山本九兵衛及び山本九右衛門板。別に十行二十丁本もある。古靱文庫藏のは、同じ十行二十丁ながら、人名に當字が多く、字句に多少の差がある。後版か。

【太夫・刊年】太夫が義太夫であることは奥に記されてゐるが、作者は不明である。元祿五年壬申正月吉祥日刊。

【形式】五段曲。形式句は各段の首尾にない。第一段に子日の松、第三段に戀のとりおひ、及び、しのゝめ夕風道行がある。

第一段首「神代より同じみそらのいく廻り、代々に替らすあけ始て、今日初春のほがらけく四海なみ風おさまりて、人の代すでに六十一世、れいせい院とあふぎ奉るは……」

【梗概】六十一代冷泉院の御時、初子の日に、左近衛の中將有之は、中納言爲則の一子千草丸と有井中將實方の次

男樗丸とを伴うて、關白多銀丸に引合す。處が惡心の多銀丸は、松にたとへて子供を惡口する。有之は虫をおさへて若者達に松の物語をさせてその場はすむ。（こゝが松靈しの節事になつてゐる）

頼光頼信兄弟も四天王をつれて、子日の祝に參內する。折柄豐前の大將赤橋大膳介安景が參內せんとして、頼光の臣、綱の片袖を雪水にてぬらし、綱と末武との爲に散々にこらされる。やがて頼光が退出せんとする時、美女が現れて頼光に話しかけ、落ち來る雪の塊に惱むを見て、頼光が助けようとすると、雪の中から一丈餘りの鬼女が現れ、頼光を引さげて雲井に上る。頼光が膝丸の劍をぬいて拜み打にすると、切られた雪女の首は虛空にありながら、むくろは頼光と組んで落ちる。そして雪女の首は姿を消すに方つて、その膝丸の劍なくば、日本を魔界にたさんものをといふ。

第二　偶々備前備後の大將湯原左衛門常滿が叛亂に及んだので、多銀丸は頼光四天王等をして征伐せしめ、源氏の一黨悉くを都から退かしめんとするが、頼光は半分の兵を殘し、之を弟頼信に統率させて、仲光金時等を從はしめ、自分は半分の兵を以て出陣する。

多銀丸は天下の權を握らんとし、頼光を惡む安景と結び、途に頼光を討たせん計畫をたてたのである。頼信は之を知ると、直に禁裡にかけつけるが、多銀丸等は既に御門と中宮とを安景の陣に送つて居る。御門を奪はれた頼信は切腹せんとするが、金時は之を止めて、仲光に供をさせて頼信を本國へ落し、自分は御門を奪還し奉らうとして、僞つて、敵に降伏して計畫するが、成らずして危くのがれる。

り、今凱旋の際にも立寄つて、頼信のゐるのを見て、仲光等に、二人の娘と共に洛中に忍込ませ、御門を奪ひ還させ奉らうとする。姉娘東雲は頼信を戀してゐるので、桂の里に至るまで、思ひをかきくどきながら道行をする。

第四　御門が中宮と共に押こめられてゐます堀河の牢御所へ、多銀丸は安景をつれて來て、三種の神器の所在をお尋ねし、恐れ多くも御門を川に沈め奉れと安景に命ずる。東雲夕風安光仲光の一行は、皆お局姿にやつして、御門を奪はうとする。ところが一同の知らぬ間に、安景は御門を桂川へ沈め奉る。そこへ仲光一行は最後の御名殘を惜みたいといつてかけつけ來り、既に遲いと思ひの外、此時頼光頼信の父滿仲の靈が水中に現れて、御門を救ひ奉つたから心安かれといふ。ついで加茂の神主が現れて、三種の神器は社殿に移り給ふたといふ。乃ち頼信等は多銀丸を討滅して、御門も神器も共に無事安泰ならせ給ふのである。

第五　天皇は頼光を征夷大將軍に、二男頼信を左衛門督に任じ、凡て滿仲の靈の働きによるのだとて、その靈を祭られる。頼光等が祭の歸りに、山鳴り惡風天地を震はし、雪中の女の首が車に向つて焰の息を吐く、頼光頼信は膝丸をぬいて斬拂ふ。時に崩震動して老翁があらはれ　戈をふると、「我は是第六天の魔王、人皇六十一世の當今まで仇をなすこと九たび……是より末々天照大神の苗裔たらん人を此國の主とすべし、若王命にそむくものこれ有つて國をみだし民を苦め候はゞ八十萬八千のけん屬あしたにかけり夕べに來つて其罰を行ひ、其命を奪ふべし……」といふ。やがて翁が戈をふると、文字がうつり神體が馬上に現れる。

【解說】　要するに多銀丸といふ逆臣がゐて、惡臣をつかつて天位を奪はうとし、一たびは天皇を水に沈め奉るが、源氏の忠節がよく天皇を救ひ奉り、多銀丸を滅したといふのであつて、多銀丸は「此日本のとをつおや公卿をはじめ

士農工商の人間天照大神の子にてなきもの一人や有、……」といひながら、隨分暴言を吐いたり、中宮を刺し殺したり、暴虐の限りを盡して天位を奪はうとするが、結局皇威の力炳として輝くといふことを示したものである。此多銀丸の叛逆の間に、賴信と東雲姫との戀が配されてはゐるが、それは要するに本筋とは關係ないものである。

【原據・影響】 四天王等が局姿に扮して帝を救ひ奉らうとする趣向、鬼神をつかつたり虛をついたりして、源氏を滅さうとする構想などは、初期の公平物に屢々見られたもので、主に本曲は明暦四年刊『宇治姫切』の改作である。第一段「子日の松」は、一中節の「松盡し」に、第三段の「しのゝめ夕風道行」も、一中節の「しのゝめ道行」にとられてゐる。

雪女の怪は、近松の『雪女五枚羽子板』にも用ひられてゐる。雪女といふのは、大雪の地方に見られる女姿の怪で、其角には「黒塚のまことともれり雪女」などの句がある。萬治三庚子仲秋吉日石津八郎右衞門板『雪女物語』二卷にも綴られ、舞曲『伏見常盤』にも、雪女のことが出てをり、又未見の物語にも天明八年版、山東唐洲著『首尾松見越松雪女廓八朔』二卷といふものがある。古來相當に問題になつたものと思はれる。

○曾我物語

【種類】 『曾我物語』が、他の軍記物同樣早くから語物に用ひられ、寛文頃にその正本の見られたことも、それが大抵舞曲に多少の手を入れた程度のものであることも、既に述べたが、これは元祿後に至つても、多くは續の讀物として、種々の形で、色々な所から出てゐるのである。而もその殘つてゐるのは、四、五、六、七卷が最も多いのは、それが最も興味をひく場面に富んでゐるからであらう。今之を表示して見ると、

名稱	刊年	版元	形、行	所在
そか一 ゆいせき浄	―	鑑屋	半紙十七行十四丁	天理
四日目 きりかね	元祿五、初春	同	半紙十七行十一丁	東大
繪入 切兼曾我	正德二、正月	山形三巴	小十六行十一丁	東大
そ、四 きりかね	―	―	小十六行十一丁	岩瀨文庫
五日目 小袖曾我	元祿五、初春	村田屋	半紙十七行十二丁	東大
五日目 小袖曾我	元祿五、初春	村田屋	小十七行十一丁	東大
(そ五 劍さんたん	寛文頃		小十六行十四丁	東大)
繪入 曾我十番切	享保五、正月	鱗形屋	小十六行十一丁	東大
繪入 十番切	享保五、四月	鱗形屋	小十六行十一丁	京大
六日目 十番切	―	鑑屋	半紙十七行十六丁	京大
富士牧狩十番切	享保九	―	―	舊東大
七日目 せんじそが	元祿五、初春	鑑屋	半紙十七行二十五丁	京大

以上の中、『劍さんだん』と外題するものは、遙に古い版と思はれるが、村田屋版十一丁の『小袖曾我』と殆ど同物である。又二番目の『切兼曾我』は、奥の版元は削られて、題簽にのみ、山形に三巴があり、享保五年正月刊の

『十番切』も、奥には鱗形屋とあるが、題簽には山形に三巴がある。版元が移動してからの後刷だと思はれる。殊に繪入の題簽のついてゐることはそのことを裏書してゐると思ふ。

○ゆいせき靜

【體裁】 天理圖書館藏本。半紙形十七行十四丁、兩面繪六。初行内題に上の如くあり、柱には「そか一」とある。巻末に「通鹽町鑑屋新板」とある。

【太夫・刊年】 巻末に「太夫直傳の以正本……」の文字があるが、語つたものか明かでなく、或は讀本かもしれぬ。版式及び挿繪から見ると、元祿頃のもので、刊年のないのは、後刷なる爲と察せられる。現に元祿五年初春刊で鑑屋版の『そが四日目きりかね』があるから、少くとも同時のものと思はれる。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句があり、道行や、他の節事は見られぬ。勿論曲節付などはない。

初段「さても其後つら〳〵ほんてうくわうたうのらいれきを尋るに、それじちいきあきつしまは國とこ立のみことより事おこりいざなぎいざなみのみこと迄七代を天しん七代とがうしあまてる御神よりうかやふきあはせずのみことまでちしん五代と名付以上神代十二代おゝくのせいさうをおくり給ふ是十二ゐんゐんなかたどれり、去程にふきあはせずの第四のわうし御くらいをつぎ給ひ是を神む天皇と申奉る是人王の始也爰に仁王七十六代……」

【梗概】 初段 仁王七十六代近衛院の御時、大織冠鎌足十六代の末葉工藤太夫藤原介高は伊豆國くすみの庄、伊東、河津、宇佐美の三ヶ所を知行し、くすみの入道寂心と呼ぶ。子が皆早世したので、繼娘の子を長男にして伊東宇佐美

をゆづり工藤すけつぐと名のらす。更に嫡孫を二男として河津をゆづり、二郎祐親といふ。久安六年八月十五日寂心が死ぬと、其席で祐親は嫡孫でありながら優遇されぬとて所領爭を始めるが、北條時政等の言葉にて先づ鄰式をする。

「ゆいせき靜」　（天理圖書館藏）

二段目　すけ親はその後くすみを所領せんとして樣々心を碎き、遂に大見小藤太八幡の三郎を招いて、心中をあかすが、二人は驚いて諫言し、入道殿の遺言を守るべき事をつゝける。双方怒つて別れる。祐親は事の露顯を恐れ、直に伊東を襲ふ。大見八幡が歸つて用心してゐる處へ、河津祐親は攻寄せるが、兩將の爲に追拂はれる。

三段目　北條時政等は伊東河津を爭はせておくも面白くないといふので、二人を招いて和睦せしめる。

ところが河津祐親はその後箱根の別當を訪れ、伊東調伏の祈禱をたのみ、いやがるのを遂に承諾させる。四五日祈ると、不動の利劍になま血がついて、伊東の首がころぶ。

四段目　「其後むかしが今に至るまで佛法五ちの御ちから今にはじめぬ事なればいのるしるしのあらはれて」、祐綱は奥野の狩に病に臥し、立てぬと見ると、九歳のかな石丸を招いて、色々遺言する處へ、祐親は來つて、誠しやかに今後の金石丸の世話を請合ふ。御臺もその言を信じて、十五歳に

なつたら男にしてくれ、そして祐親の女まんどう御前にめあはせてくれとて、一切を祐親に托する。安永二年七月十三日に祐つぐは死ぬ。年四十三。

五段目　祐親は百日もたつと、伊東の家へ入込み、伊東二郎祐親と名のり、心のまゝに振舞ひ、金石丸が十五歳になると、元服させ、工藤祐經と名乗らせるが、家すら與へず、國においては面倒だからと、繼目の上洛に名をかりて、祐經を都に伴ひ、打やつて歸つて來て、折角めあはせた萬劫御前を離別して、遂に彼の母から讓狀を奪はうと工む。祐經の母は大見八幡の二人に謀つて防がしめ、奥野の奥に隱れる。

六段目　祐經の母は其後子を思ふ情と、つらき世の苦とで病み臥し、二人の郎等大見八幡に讓狀とかたみを托して死ぬ。二人は上洛して、廿五歳になる祐經に一切を語り、讓狀を見せると、祐經は始めて我が代々の所領を祐親に横領されてゐることを知り、對決によつて勝たんとして訴へる。かくていよ〳〵對決となつた時、小松重盛が病氣にて清盛が裁く事となるが、其以前祐親は多分の賄賂を以て平家其他を買收してゐたので、祐經は惡口の罪にて、所領半分を沒收され、反抗したとて遂に全所領は祐親に與へられる。

【解說】　伊東寂心の跡をついだ祐繼の所領に對して、弟の河津祐親が不滿を抱き、爭の後、一旦和睦しながら、祐繼が死ぬと、巧にその所頭を横領するに至る經路を述べたもので、柱に「そか一」とあることから見ても、『曾我物語』の第一の卷であることを察することが出來る。

【原據】　曲首に於て神代の事から說き始め、伊東の調伏、伊東の死、爭論の樣子など全く『曾我物語』によつたもので、祐經の所領回復に對する訴狀、その他、曾我物語と同文の處すら少くない。素より多少の脚色があるは云ふまでもない。

○四日目　きりかね

【體裁】　東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十七行十一丁。初行に上の如く「四日目」の字が冠らされ、題簽の頭に「繪入」の字があつたらしく、その下に「曾我」の字だけ大きくあることはわかるが、あとは汚滅してゐる。柱には「きり」と見え、奥に版元として通鹽町鎰屋新板とある。兩面繪三。

【太夫・刊年】　奥に太夫直侮の正本を以て寫したとのみあり、何人が語つたのか明かでない。誰もが語つたかも知らぬが、又讀本でもあつたらう。けれども挿繪版元、刊年初丁などから『繪入淨瑠璃史』所載の『きりかね』と同物であり、從つて土佐少掾の正本であるかも知れぬ。なほ元祿五年壬申初春吉日の刊記がある。

【形式】　六段曲にて、各段首尾に形式句あり。

初段「さても其後つら〳〵せけんなくわんずるに人としてとなきおもんばかりなきものは必ず近きうれい有、爰にせいわけんじのかういんしもづけの守よしともの三男兵衛のすけ源のよりとも　…」

【梗概】　初段　賴朝に永曆元年に伊豆に流され、伊東祐親の館にゐる中、祐親の心變りの爲、密に姪が小島にうつり、文覺のはからひにて、院宣を給はり、治承四年八月十七日山木判官を夜討して、石橋山の合戰に敗れ、眞鶴崎より、安房上總にのがれ、武藏に出て、畠山等諸國の軍勢二十萬騎を得、鎌倉に居を占め威勢天下にあがる。梶原景時曾我太郎祐信は、平家方ながら賴朝を助けたといふので、北條時政によつて、罪を問はれず、賴朝に仕へ

る事となつた時、伊東九郎祐清が捕へられて來ると、頼朝は祐清にも助けられた事を思ふて、其罪を許さうとするが、祐清は、平家方の者として罪を問はれず、恩賞まで貰ふことは出來ぬと頑張る。その時工藤祐經は祐清を殺すべしと云ひ、彼を罵り、彼の父祐親を呪ふと、祐清は兄河津の敵でもあるから、生かしておけぬといつて斬つてかゝる。兩人が爭はうとする時人々がとめる。

土佐少掾正本(?)　「れかりき」

東大藏本切狂曾我と全く同一

二段目　工藤祐經は、此後屹度祐清から討たれるかも知らぬから、進んで先に討たうと用意をする。

又祐清は命を助かつて家に歸つたが、妻は去年死んだし、兄の河津の末の子おんぼうを預るのみなれば、一先づ之を越後くがみの知るべに託すべく、松井源次につれさせる。そこへ祐經が討入る。兄河津の敵を討つことの嬉しさよと、祐清は喜んで敵を引うけ、殆と祐經を討たんとした時、敵の郎等高瀬平藏に妨げられて祐經を逃がす。祐清は都へ上る。（その後加賀國篠原の合戰にて、祐清は實盛と共に討死して名をあぐ。）

三段目　「その後物のがはれをとゞめしは、そがのさとに候へけるを尊ねるに」……頼朝が嘗て八ヶ國の

河津が二人の子共一まんはこわうにてしよじのあはれをとゞめたりゆへいかにと

諸將を召して、自分の幸福を誇る時、工藤祐經は、やがて恐るべき逆臣となるものが二人あるといつて、伊東の孫二人を繼父曾我太郎祐信が養ひ居ることを述べると、頼朝は怪みながら、梶原をして二子を連れ來らしめる。

一萬今は十一歳箱王は九歳になる。二人が親の敵を討つなどといつて、遊び事をしてゐるのを見て、母はかゝる事を內證にせよと戒めてゐる處へ、梶原が來る。祐信は歎く。母はかくと知ると、たまらぬ思ひに口說くが、一萬は「何事も前世の事と思召、さのみなげかせ給ふなよ、御なげきを見たてまつれば、われ〳〵は心もきゑるよみぢのさわりとなるなり」といふ。悲の中に梶原景季は二人を引立てゝ去る。（頗るあはれげな筆にて敍す。）

四段目　「其後梶原源太景季は祐信親子を打つれ、よに入て鎌倉に付給ふ」。其夜祐信は二人の子供に向つて、「いかに汝等かなはぬ浮世をあんずるは是みな人げんのまよひ也親子のちぎりもけふまでとあふ時よりも定まれり……さいごみれんにふるまひて草のかげなる河津殿の名ばしくだすな兄弟よ、何事もか事もぜんせの事と思ひつゝいかにも心をけなげにもて」といへば「何しにみれんに候べし」といつて、恩を謝する。翌日源太は親子の悲を訴へて、助命を願ふが、頼朝が許さないので、由比濱にて討つ旨をつげると、三人の歎は限りない。やがて愈々殺されるとなると一萬は「たゞ何事もか事もなきやうに御心へ候べし……」、箱王は最後に今一目母を見たいといふが、たしなめられると「何しにみれんに候べき」といふ。祐信は二人を勵まして「弓矢の家に生るゝものはいのちより名をこそおしめされば」れうもんけん上のつちに骨はうつめとも名をは雲いにのこせと」いふと、兄弟は「心へ候と西に向ひて手を合せ」名號を唱へる。此時太刀取堀の彌太郎はすでに太刀を振上げながら、いぢらしさに兄弟何れを先にせんかとまどう時、祐信は、それでは己が斬らうといつて後に廻ると、二子は父に斬られるを喜んで、互にわれさきに斬られよう

と爭ふ。祐信は之を見ると「肝消へ心たへ……太刀をかしこにからりとすてたをれふして」泣くのである。そこへ梶原景季がかけつけ、斬ることを遮り、今一度訴訟することになる。

五段目　景時が頼朝に二兒の命乞をするが、頼朝は斷乎としてきかぬ。引つゞいて千葉、和田等皆一同が乞ふが見込がない。最後に重忠が命乞をするが駄目である。重忠は遂に腹を切らうとする。頼朝は已むなく二人を重忠に預けることゝなる。二兒の歸宅を見て、母は夢心地にて喜ぶ。

六段目　「去程に光陰しばし止まらず、つなかぬ月日うつり來て、此年は一まん十三にぞなりにけり。くぼうをはばかる身にあれば、ひそかに元服してまゝ父のみやうじを取曾我の十郎祐成とぞなりける」。箱王の方は父の菩提を弔はすべく箱根へのぼせて別當にあづける。ところが箱王は、いつか仇を討つべき心にもえて、丁度頼朝が權現へ參詣した折をねらつて、工藤祐經を討たうとして討誤る。「かの箱王がふるまい見る人きく人おしなべしといふ鳥はちいさけれ共とらを取あらをそろしのいせいやとみなしたをまいてそかんしける」。

○切　兼　曾　我

【體裁】　東京帝國大學圖書館藏本。小形十六行十丁、奥附の版元はけづられてゐる。繪は兩面三あり、題簽に「繪入切兼曾我」とあり、その下段には、山形に三つ巴の紋所がある。初丁初行にも、唯「切兼曾我」とある。『繪入淨瑠璃史』下卷所載土佐少掾正本といはれてゐるものと、挿繪は同一と思はれる。

【太夫・刊年】　勿論太夫名を見ない讀本風のものであるが、奥に正德二年正月の刊記がある。

【形式】　六段曲にて六つに切れてはゐるが、何段目〳〵といふ段付はない、切れ目の首尾には形式句がある。

大序「扨も其後せいわけんしのかういん下づけの守よし朝の三なん兵衛の佐源のより朝は去ぬるふいりやく元年にゐつの國へ流され、ゐ藤がたちにまします所に介ちかが心かはりによつてひそかに伊藤を出給ひ……」

二段「其後くとう介經は急ぎ國に立かへり耶等を近付今度かまくらにてか様〳〵のしだい也……」

三段「その後ものゝあはれなとゞめしはその比そがの里に候へけるかわづか二人の子共一まんはとわうにてしよしの哀れなとゞめたり……」

四段（汚損して不明）

五段「其後かげ時は急ぎ御所に上らるゝより朝御らんしかちばらこそれいならずそせう……

六段「去程にくはういん時うつり一萬十三にそ成にける……」

曲尾「……は二王受取せんこを見分すひんぬき飛かゝるを同宿はいだきとめをくへ引つれ入にけりかの箱王がふるまいみる人きく人おしなべてしたをまいてぞかんじける」

【挿繪】　第一、頼朝の前に時政、佐々木四郎、そがの助のぶ、かぢ原げんた、よしもり、しげ忠、助つね、等がゐる。第二、一萬箱王が斬られんとして手を合せてゐる圖、第三、僧が箱王をとめてゐる圖。

○きりかねそが

【體裁】　岩瀬文庫藏本。小形十六行十一丁、柱に「その四」とあり、上の內題の上に「四日目」の字はない。版元不

明。繪は東大本「きりかね」と同趣向の兩面三。

【太夫・刊年】 共に不明。

【形式】 六段曲。

初段「扨も其後から原平三景時そがの太郎助のぶほうてうに近付一たん御てきにしとくすといへども君に不忠なき事は上にしろしめされたり……」

二段目「そのゝちこゝに又いとうの九郎すけきよはよりともの御なさけにてふしぎの命たすけられ……」

六段目「かのはと王が心の内むねんなりける次第也」

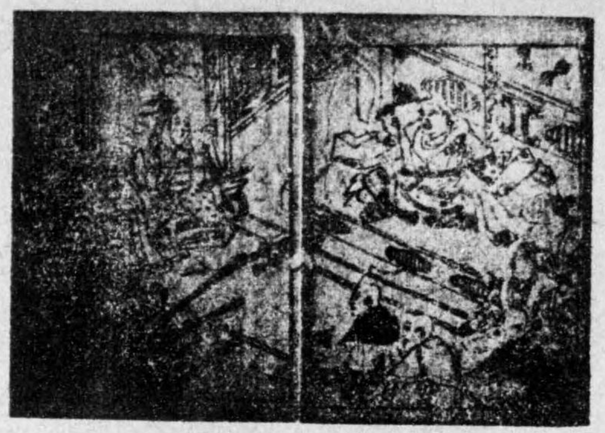
○五日目　小袖曾我

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十七行十二丁、初行内題の上に「五日め」とあり、柱には「こそで」とあつて、兩面繪が四あり、從つて丁數一丁多い點だけが、小形本と異る。

【太夫・刊年】 太夫は不明ながら、奥に刊年が元祿五年申ノ初春吉日、通油町村田屋新板とあり、版元刊年等皆小形本と同樣。

【形式】 六段にて、各段首尾に形式句あり、小形版と文章も同一。

初段「さても其後しやらさうじゆの花のいろ、しやうじやひつすいのことはりをあらはしひくわらくやうの風のなとにはしやうじの夢をおどろかす爰に本てう……」



元祿五年刊「小袖曾我」

【劍さんたん】 初行に「劍さんたん」とあるものと同一といへる。

○五日目　小袖曾我

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行十一丁。初行に『五日目、小袖曾我』とあり、柱には「小そで」と見える。兩面繪三あり、奥に「通油町村田屋新板」と記す。唯前者の小形刷かと思ふが、丁數に一丁の差があるだけ、挿繪が一つ少い。

【太夫・刊年】 太夫直傳云々の文字が奥にあれど、何人の正本か不明、然し刊年は奥に元祿五年申初春吉日とある。

【形式】 六段にて、各段首尾に形式句あり、『劍さんたん』と初行にあるものと比較するに、全く同文。唯挿繪と版式を異にする。（寛永期の「小袖曾我」參照）

○劍さんだん

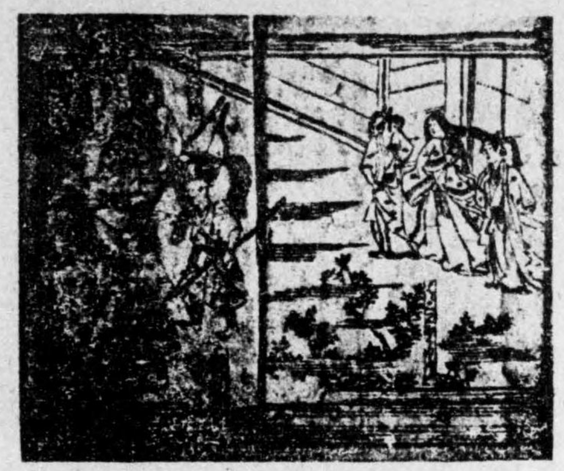
【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。本の形は小さくされてゐるが、『ふじのまきかり』と外題する東大本と框内は

國大、文字も同筆、同樣の版で、挿繪も同筆である。十六行十四丁。柱に「そ五」とあつて「ふじのまきかり」は柱に「そ六」とあるから、共に「曾我物語」の一册なのであらう。奥の文字は本文以外は全く削り去られてゐるから、後刷と思はれる。兩面挿繪四ある。

【太夫・刊年】 太夫名も刊年も見えぬが、挿繪は古風の味があり、或は萬治寛文頃のものかと思はれる。

【形式・曲節付】 六段曲にて、初段は「扨も其後」で、他の各段は「其後」で始まり、各段尾に形式句がある。曲節付はない。

【小袖曾我】 本正本を同じ東大藏元祿五年初春村田屋新板の『五日目、小袖曾我』と比較して見ると全く同文である。



「剣さんだんさ」 （東京帝大藏）

剣さんたん初段「扨も其後ーやらそうじゆゝ花のいろしやうじやひつすゞ[illegible]ゆめをおどろかす愛に本てう八十二世ことば …」

二段目「其後其比右大將よりともは四かいとゝくおさまりふる雨つちくれをうごかさずふく……」

四段目「其後ものゝあはれをとゞめしはそが兄弟の人々にてことにあはれをとゞめたり時むれにすけなり……」

五段目「其後母上は兄弟にふじののかど田にさかづきせんと有ければやがて御かはらけをそゝ……」

六段目「其後時宗はすけなりにちかづき母のふけうはゆるされつ今ははやこんじやうに思ひおく事候はずへんじもいそぎうちじにして名をばんだいにのこさんと……」

曲尾「又もや御めにかゝらんとたがひにいとまごい、はれ御前を龍立すそのなさしてぞいでらるゝ此人々の心のうちきせん上下おゝなべてみなかんぜぬものこそなかりけれ」

○繪入曾我十番切

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十六行十一丁、一丁落丁。兩面繪四。內題は削去られたものゝ如く、唯初行に「初段」とあり、題簽には中央に『十番切』その上に「曾我」と横に書き、「曾」の字が「勇」の字のやうに見える。上段に「繪入」の字あり、外題の下方に、山形に三巴がある。それでゐて奥には「大傳馬三町目、うろこ形や孫兵衛刊」とある。思ふに鱗形屋の板が西村屋へ賣られて後に出たものだらう。柱には「十ハンキリ」とある。

【太夫・刊年】 讀本として出たものらしく太夫名など記述なく、奥に享保五年正月吉祥日とある。

【形式】 六段に分れて、各段首尾に形式句がある。

初段「扨もそのゝちそも〳〵するがの國ふじの山と申はせんき四年三月にこひりんさいよりよのうちにしゆつけんしたる山なればみれにはくしやくほうわうのすみ給ひしいけの有ふもとにせんけん大ぼさついらかなならべ立給ふまことにふそうのめいさん也 ころは元久四年五月下じゆんの事なるに右大將頼朝公ふじのみかり有べきよし……」

二段目「其後愛にあはれなとゞめしはそがの五郎時宗しや兄すけ成にちかづき扨も此たびかまくら殿ふしのみかりの有よし

を承り……」

三段目「其後母上はふじのへのかといてにさかつきせんと御かはらけを取あげさせ給い五郎ほうしにて有ならばさきにそのむべけれ共……」

四段目「其後右大將よりとも公ふじのすそのにおはしますすでに日けんきわまれはかれてやういのせこのもの二日かけていぜんよりみれへわけのぼり……」

五段首　欠　落丁。

六段目「その後時宗をていしやうに引すへる時にらいてう御らんじてそがの五郎時宗とは汝が事か……」

曲尾「……ふじのすそのにやしろを立末代までかたき打もの此神ないのるにたちまちかんなふ有古古末代たぐいまれ成つわものやときせん上下おしなべてみなかんぞゐものこそなかりけれ」

「曾我十番切」（東京帝大藏）

【挿繪】第一は狩場にて仁田四郎猪に乘つて刺殺す圖。第二は祐經酒宴、幕外には十郎と鬼王がゐる。第三龜蔣が五郎十郎をみちびいて祐つねを討つてゐる所。第四は、御所五郎藏が時宗を捕へてゐる圖。

○繪入そが十番切

【體裁】京大寄託、古梓堂文庫藏本、小形十六行十丁、繪兩面四、うろこがたや板。

【刊年・形式】刊年は享保五年四月とあり、段切ありて段付なく、形式句あり。舞の本とは同文ではない。段付のない處から見ても、軍記物淨瑠璃と等しく讀本として賣出したものであらう。

○六日目――曾我十番切

○七日目――せんじそが

【體裁】京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫藏本。半紙判中形刷『曾我十番切』は、十七行十六丁、繪兩面六、通鹽町鑑屋新板。『せんじそが』の方は、十七行二十五丁、繪は兩面十一、半面一あり、柱の前半に「そが七」後半に「こそで」、奥に唯鑑屋と見える。『曾我十番切』『せんじそが』は內題である。恐らく大外題は『曾我物語』とあつたこと〻思はれる。

【刊記】六日目の方には刊記はないが、七日目の方に元祿五年申の初春とある。

【形式】各六段つ〻に分れて、各段首尾に形式句がある。

別の鱗形屋本『曾我十番切』は享保五年四月の刊行であつて、文章は之と全く異る。

【出處・原據】之等曾我物の出處が『吾妻鏡』にあり、『曾我物語』や、舞曲の『切兼曾我』『小袖曾我』『劍戟歌』『十番切』等にそれ〳〵據つてゐることは明かである。

【影響】之等が近松の曾我物や、その他曾我物淨瑠璃、歌舞伎狂言等に及ぼした影響は數へ難く、その他仇討物の種々の形式を生み出すに至つたことも說くに及ぶまい。

尙曾我物及びその影響等に關しては、『古淨瑠璃研究』慶長寛文篇の一二九一頁乃至一二九六頁の間參照。

○かしま御本地

【沿革】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十七行、二枚の落丁あるらしく、殘り十三丁。兩面繪三。版元は削られて不明なれど鶴屋開板とあつたらしい。題簽はないが、初行に上記の內題がある。

【太夫・刊年】 太夫名なく、刊年も削られて不明ながら、元祿頃の刊と思はる。別に池田金太郎氏所藏『かしま』と題するものに、元祿五年正月刊、江戸和泉太夫正本があるといふが、同物とすると、東大本は其再版であらう。又『新修繪入淨瑠璃史』には、本曲を元祿二年刊としてあるが。

【形式・曲節付】 明かに六段物らしいが、落丁の爲不明である。池田氏所藏は六段であるから、本曲も六段と見て差支なかるべく、曲節付はない。

【梗概】 初段 日本は神國として、神多き中にも、神力あらたかなる鹿島大明神の由來を尋ぬるに、本地は釋迦如來である。釋迦は日本を佛法の地とせん爲に、色々に姿を現し、蒙古を平げ惡魔をしづめ、樣々の方便をなす。又唐

初段「扨も其後つら〳〵おもんみるに、まづ天ぢくは月をかた取ゆへ、くはつし國とがうす、もろこしはほしをかたどる國ゆへ、しんたん國となづく、我てうは日をかたどり、大日本とがうし、諸神あふさの神國として、れいじんおほきその中に、誠にしん力あらた成、かしま大明神のゆらいなくはしくたづねるに、本地はしやか如來也、されば日本を佛法のちとなさんため……」

のとうかくしやうとなりて、震旦を減し、龍宮に入る。年十一歳にして世の十七八歳の如く、力は無量、弓矢打物は神通自在、常に柔和なれども、望有る時は兩眼鏡の如く、如何なる鬼神も面をさける。

さてとうかくしやう「諸佛の垂跡、三世の諸佛の出仕の地たる」日本大和國十市の都に、鷲に乘つて來ると、老翁が來て何者かといふ。「我は無邊む中天地の間に父母なし只あいれんを親と頼なり」と答へると、翁は「本來のちしやうは親もなく子もなく草葉に宿る露の如し我も空虛の翁也」とて、庵に導く。

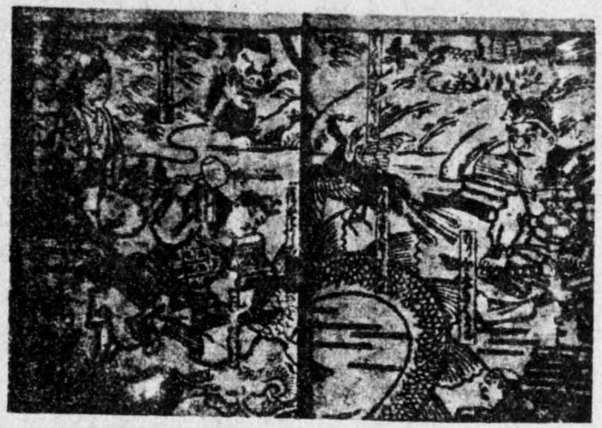
「其頃天王寺代しゆんむん天皇の御時、甚しく雷電あるなので、占ねせると、き萬國のむくりが日本を覆さんとて使を送り、其使が桂川のさよ姫といふまろんを語らふから、今都へ來た異國の童子十二三歳なる者をして、魔ろんを滅させよといふ。其時忽然赤小袖赤袴のとうかくしやうが御簾の前に現れ、魔ろんを退治に來たといひ、龍宮に育つた彼は、怪まれながらさよ姫退治の宣旨をうけ、桂川へいそぐ。

とうかくしやうは「しやつこうにしきのいふく、こんかうさつたの御つるぎ、すいしやうけんこのうきくつ」をはき、出發の時、龍王からもらつた、干珠と滿珠の玉を懷に入れ 桂川につくなり、さよ姫に呼かけ、奮闘の後彼女を生捕にして歸り、直に禁裏につれゆく。

二段目 さよ姫は禁裏へつれられて、元來中天竺に生れて、二百丈の毒蛇だつたが、神慮妙なる國へ來て、段々に小さくなつた旨を述べて降參し、命によつて二十丈の大蛇と姿をかへ、又元の女の姿になつて、許されて桂川へ歸る。かくてとうかくしやうは「いよ〳〵てうかの守護たるべきと、日の本の大將軍よりひでに任ぜらる」。

其頃みちのく平泉にとう〳〵ぐん忠ひらとて、身長九尺餘、地上三尺をかけるといふ曲者がゐた。女一人あり、卅

二相具足し、歌に長じ、心やさしく、ぼさつの前と呼ぶ。大將軍より秀は此姫の事をきいて憧れる折柄、御門の御すすめにて、横川の道方が仲介者として、平泉に忠平を訪れ、頼秀の妻にぼさつの前を乞ふ。處が忠平は、龍宮より來た小僧が、日本の大將軍になるさへ心に充たぬに、我婿にならんとはといつて大に怒る。道方が歸つて奏すると、頼秀に忠平討伐の命が下り、頼秀は直に兵を率ゐて、上野梅が林に着き、忠平も那須野原に陣する。頼秀は先づ忠平方に降參をすゝめるが、昂然としてきかず、明日の戰をまつ。



「地本御まし か」（東京帝大藏）

三段目　（此段は全く戰記にて）頼秀方の小勇士森山みな菊丸の兩名についで、頼秀が奮闘して忠平を追つめる。忠平遂に本國さして落のびる（までを描く）。

四段目　本國へ落のびた忠平を追うて、ぼさつの前まで打滅してはならぬと思ふと、頼秀は軍を都に返して、自ら一人奥州に忍入り、忠平に近づいて、策を以てぼさつの前を手に入れて後に、忠平を討たうと圖る。巧に忠平に面會すると、忠平も亦頼秀をそれと見ぬきはしたが、奉公させておいて、機を見て討取らうとして、既に使ふ。頼秀は詩歌や書を以て、自ら慰みつゝ暮す中に、それが評判になる。秋の十五夜のこと、姫が歌合を催してゐる時、淺尾といふ女中が、此程仕へたきやうがく庄の書いたものとて差出す歌を見ると「しほかまのけふりにあまるこい衣きても見よかしもゆる思ひを」とある。姫は心動きて一目きやうがく庄を見たいと祈りながら、花園に月を見てゐる折柄、頼秀も姫に遇ひたしと花園に近づいてゐると、不可思議なことがあつて、二人は互に見つ見られつして思ひをもやす。（やがてあまり巧妙でない二人の口説事がなが〳〵とつゞく）遂に姫は妻戸をひらいて頼秀を導き入れる。

五段目　「其後より秀ぼさつの前はせんせわかうの御神日本のあくまをしづめさせ給はんためかりに人かいに生をうけ給ひ、ひよくれんりの御ちぎりあさからず、しのびてかよはせ給ひける」。去程に、忠平は頼秀を討たうとして心を碎く折柄、頼秀と姫との間をきいて驚き、頼秀を招いて、主人の姫を手に入れることを咎めると、却つて「雪や氷と隔つる内迷ひさとる時んばたにのながれもと一色の水也」といふ。忠平が遂に怒つて弓をとつて放つと、「その矢れんけと成てかく庄の前にそなはる」。更に腰の劍で打たんとすれば劍は二つに折れ、猛火となつて飛ぶ。頼秀は此時忠平を討たうと思つたが、姫の心が變つてはと、忠平を一度は逃し、一切を姫に語る。と「ついにはかく有べきとかねてごしたる所今更おどろくべきに候はず、父のかんどうかうむるも身より出せるさい、君ゆへと思へば露斗うらみなし、いづくへもはや〳〵共ない給へやとたもとにすがりくどかるゝ、頼秀は聞召あふ何事もぜんせのゑん、いささせ給へこなたへと」忍び出て行く。姫が歩み惱んでゐる時、忽然と白きしか二匹來りて頭を垂れて乘れと云はぬばかりである。二人が「二つのしかに召給へば此しかうれしげに野を過、道をいそぎつゝ、ひたちの國岡のゝ村にいたり、しまのごとく成山の上におろしまいらせ山へぞ入にける、さればかの所をしかの島と書、かしまとなづけ末代に至るまでかしま大明神のやしろをつくり奉る、此念によりしかをはかしまのししやとこそあをぐ也」

二人は五郎太夫の家に宿を乞ふが、五郎太夫が無情なるため、再びあしのい四郎の慈悲にたよる。

さて忠平は二人の跡をさぐらせて、やがて山沼せとうといふ強武者をして六十三騎を以て討伐に向はしめる。（こにて落丁）

六段目　（一枚ばかり落丁）またみな菊丸が功名をたて、忠平と頼秀が戰ふ。頼秀が「おのれは一天の君に御てき仕るめうはつ、いづくにのがれんやと神めうのつるぎをなげ給へば忠平もしんつうの剣をなぐる、二つのつるぎはたとあい火えんを出」す。そして「忠平がけん戰ひまけ、雉子となつてとびめぐる、頼秀の剣鷹と成つてくいふせける。忠平大きに怒り、いかに頼秀我は是元來おうな虫といふまろんくはんらい日のあるじ成しが神代の昔天照大神に此くにをうばゝれ其いきどおりはれずうばいかへさんため今人かいに生をうけとう〳〵くんとは成也しよせん汝だに打ならば天下は我もの成べしとはしりかゝつて組」合ふ。忠平が負けて降參するが、許さず首を討つと、首は空に舞上る。そして一念の飛龍となつて、日本を取かへさんと企むを、頼秀かしま大明神と現れかの魚を神力にておしからめ、かなめ石にて打とめる。「ぼさつの前はかん取の宮と現れ、かしまにてはおくの御てんとあをぎ奉る、かのかしま大明神はほんらい天の御神、さんけいのともがらはさいなんをのがれふかくさいわいそくさいしんめいまもらんとの御ちかい有がたし共中々申斗はなかりけり」。

【解説】釋迦が日本を佛法の國となさんとして、色々の方便によつて現れ、遂に日本の大將軍頼秀となり、奥州の一將軍の女ぼさつ姫を手に入れて、鹿島香取の神と仰がれるといふのである。本地垂跡説に立つて編み出された物語を浮曲化したものであらう。かうした本地物の原據は、なほ充分に研究されねばならぬ。

○新大織冠

【體裁】早大演劇博物館藏本。半紙形十七行十三丁。挿繪兩面三、片面二。初行に「新大織冠、水からくり」とあり、奥に刊年の下に、「太夫直正本屋藤九郎新板」とある。

【太夫・刊年】太夫は明かではないが、曲節付から見ると、大序は角太夫節であるから、相模掾か、治太夫の語物らしいが、他の段首の曲節付は、加賀掾物と似てゐる。奥に「元祿五年壬申七月吉日」の刊記がある。

【形式・曲節付】五段曲にて、段付は第一第二とあり、初段以外他の段首の形式句は殆どなくなつてゐるが、段尾には皆ある。第三に「みち行」がある。

曲節付は大序が「下ア持中ヲン」で始まる點は、直に角太夫節を思はせるが、第二、第三、第四は皆曲節付が「地」で始まり、第五段が「コトバ」で始まる。かくて初段以外の段首及び、各段尾の曲節付が、他の角太夫節正本と聊趣が異つてゐることを思はしめる。次は主なる曲節付である。

下ア持中ヲン、　引序詞、　上オロシ、　モツ色フシ、　色ユリオクリ、　地カゝリ、　色ハツミフシユリ、
ハルオトシ、　色カンオトシ、　キホヒ三重、　カンハルフシ、　色ハルフシ、　スヘフシ、　カン色地、
色モツフシ、　コトハ地、　引取三重、　地ハヤメ、　地色、　色クリ上フシ、　ヒヤウシ（以上第一）地、
モツスヘフシ、　色ヲトシ、　色オクリ、　モツキホヒフシ、　カンクリ（以上第二）、　カンヲクリフシ、
カンスヘフシ、　色フシ、　地キン、　詞地、　カハリツキユリ、　ヒヤウシユリヲトシ、　七ツユリ、

フシマイカヽリ、　上フシ、　ツキユリ、　マイカヽリ（以上第三）　カン本フシ、　下オン、　ヒロイフシ、
カンハルフシ（以上第四）　三中、　色ハツミフシ、　三重、　地中セメ、　カンヲトシ（以上第五）

道行「ならはぬたびに、ならわしの、ならの都を忍びいで、かへり見かさの山かくす、はるのかすみぞうらめしき、すみこしなれし我やどの、こずへもさらにみへわかず、さすがなごりは有物をとなみだにむせびたまひしが……」

これを治太夫の『大伽藍寶物鏡』の道行の文と比べると、全く同文で、唯曲節付が異つてゐることを見る。

【挿繪】　第一圖　唐船にて、萬戸龍女にたばかられ、龍女は玉を奪つてにげるを、萬戸追かける、龍女は龍の胸に半身をのせ、玉を奪つてゐる。凡て水からくりとある。第二圖、片面。廣足鎌足へ夜うちによする、山かみ手からの處、門の上の戰。第三圖、上段は、廣足湯起請にて最期の處、淡海は無事。下段には淡海が藤を傳ふて翁の舟にのる處、舟自ら帆をあげる。第四圖、片面。淡海が海女の父に打たれるを母親がとめる處。下段は淡海が告白し、萬戸が來て、海女の父驚く所。第五圖、大船にて舞樂、海女玉をぬすみかへして歸る處、萬戸惡龍に切つてかゝるべく馬を海に乘入る處。凡て、位置の左右上下はあれ、繪の意匠、大體に『大伽藍寶物鏡』と同一である。但し人物が少し大きいやうである。

【梗概】　本曲を多少改作したものが、松本治太夫の正本『大伽藍寶物鏡』である。其筋は全く同一であるから、梗概はその方にゆづり、如何に改作されてゐるかを示す爲に、各段首尾を比較して見よう。

新大織冠

第一「さてもそのゝちあめつちのめぐみひらけしふぢの門

大伽藍寶物鏡

第一「扨も其後それだいしやうせそんまかた國にじやうだ

さかふる家こそめでたけれ、そも〳〵時は人王四十五代しやうむ天王の御せいたいこくどのたみもやすらかにおさまりくわする御よとかや……」

段尾「……りやうじやのくびみづもたまらず打なとし其身もうみへだんぶとをちしが、又かい上に立およきこれ〳〵ぎよくだう取かへしたり、いそひでふれをおせよひさつき〳〵さづ〳〵〳〵と、うしをゝけたてゝたつなみとつれていそべにうちあがるいさぎよし共中〳〵申ばかりはなかりけり」

第二「大りにはまんと將ぐんらいこうのよしさきだつてそうしければ、みかとせいれうでんにしゆつぎよなれば、百しのくぎやうれつさ有、然る所へたんかい公萬と將ぐんをいざないさんだいあり……」

段尾「……おの〳〵はもんを打てゆるりとやすみ候へとしづ〳〵と出ければ、ぐんぜいのがすまじとおつかくるを大だちぬいてとびかゝれば、どつといふてにげ入けるてるとうわらつて扨々にげあしのはやきやつばらやと馬をうならせ給ひしより、しゆじやうぜんごんの石ずへふかくげだつのはしらたがくして、ぶつかくれいぢやうはやしの如く、三てうにだう〳〵たりいでや人王四十五代聖武天皇と申奉り……」

段尾「……くび水もたまらず打おとしぎよくたうを取かへしうみへざんぶととび入かいしやうを立およぎなんなく舟に乘うつりいそいで舟をおせやおせ、よいさつさ〳〵さつ〳〵さつとうしほをけたて…こぞつてしたな……」

第二「去ほどにからもやまともへだてなく、れんぼのつなにつながるゝ、たうせんもことなう都につき萬戸將軍らいてうのよしはや先立てそうしければ、みかどせいりやうでんに出御なれば百しのくぎやうれつさ有然る所へたんかい公……」

段尾「……八王から〳〵打笑ひ、さてもにげ足はやき奴ばらかなヤレ此なハにゑん有お主の供だちつとせぬか、いやお供をなされぬかと、おどけことばもむま〳〵と、にが口つよくぼつ立〳〵、とぶか如くにはせかへる……と

ほつたて〳〵てとぶが如くにはせ歸る。……こんごうきしもかくやらんとおそれぬ者こそなかりけれ」

第三「かくてたけふさはひろたりをとりことし、急ぎやかたにはせ歸り御まへに引すへありししさいを申上る。たんかい公はおどろき給ひ……」

段尾「……すみよしのうらべよりかみかぜばつとふき來り、をのれとほばしら立けるが、みづからさつとほをあげて、こちふく風はたぶ〳〵とうけつひらきつ、舟は程なくさゐきのくに、しどの浦にぞつきにける。是ぞ誠にごくらくのぐせいの舟もかくやとんとかんぜぬものこそなかりけれ」

第四「去程にしづのめがうきいとなみをしどのうらあまのてはざのかず〳〵にめかりしほやきいとまなみしほくみくるま……」

段尾「……りう神はてうもんのため、こと〴〵くうかみ出ん其隙なうかゞひあつて可然と申ければげに〳〵此ぎ尤也、さらは都へそうしつゝ其やうゐあるべしと御よろこびはかぎりなしたんかい公の御ありさま世にたぐひなきちうしんやとかんぜぬものこそなかりけれ」

第五「たんかい公都へかくとつげ給へばすなはち御父かまたり公りんげんかうぶりあまたのれい人召ぐせられ、さんしうに下ちやく有、ふさゝきのおきに大せんなかまへ対の〳〵是に召れつゝ、しちくりよりつのこゑ〳〵にうらの松風おとそいて、せいかいはとは是ならん……」

曲尾「くびちうに切おとし今は本まふとげたりと悦びいさみて引かへす則かまたりたんかい公都にのぼらせ給ひつつかのほうぎよくをゐいらんにそなへ、そのゝちかうぶくじしやかむにぶつのみけんにおさめ給ふとかやふぢはらうぢの御いせひぶつほうはんじやうめでたし共なか〳〵申ばかりはなかりけれ」

ぞつておそれぬものはなし」

第三「さる間友たけはくもまるをとりことし、急ぎやかたにはせ歸り御前に引すへ有ししさいを申上るたんかい公驚きたまひ……」

段尾「すみよしのうらべより神風ばつとふき來り、をのれとほばしら立けるが、みづからさつとほを上て、こちふく風はたぶ〳〵と、うけつひらきつ、舟は程なくさゐきの國、しどの浦にぞ付にけゝ、國は神國、御代にたへ成御めぐみ、有難もたふとかりけること共やとはいしつくがにあがらるゝ」

第四「げにやうき世のわざながら、ことにつたなきあまおぶねのわたりかれたるゆめの世に、すむとやいはんうたかたのしほくみ車よるべなき身はあま人の袖共に思をほさぬ心かな……」

段尾「……龍神はてうもんのため……たんかい公開召げに〳〵此ぎ尤也さらは此むねそうもんせんと御悦は限りなく、萬こと心合つ、……松にぞ花をかり枕蘇咲く家の御世つぎは此あまへの御子なり」

第五「かくて其後さんしうふさゞきのおきに大せんをうかめつゝたんかい公は都よりあまたのれいじんめしよせられ、しちくりよりつのこゑ〳〵にうらの松風おとそいてせいかいはとは是ならん……」

曲尾「……くびちうに打おとし今は本もうとげたりと悦びいさみて引かへす……其後こうぶくじしやか佛の御くしにとめさせ給ひける、しやうこも今もまつ代もためしまれなる大がらんわがてうの御寶物たへせぬのりの御寺佛法はんじやうさかゆる國ぞめでたけれ」

【解説】 かくして結局本曲は延寶八年の相模據の『大織冠』を改作して『新大織冠』と號したもので、治太夫が更に之に少しく手を入れて『日本大伽藍寶物鏡』などいふ、嚴めしい外題としたものであることは、文體や其他で推定出來ると思ふ。例へば大序の出方が、本曲の方が古めかしいことや、內題下の「水からくり」の字が治太夫正本では